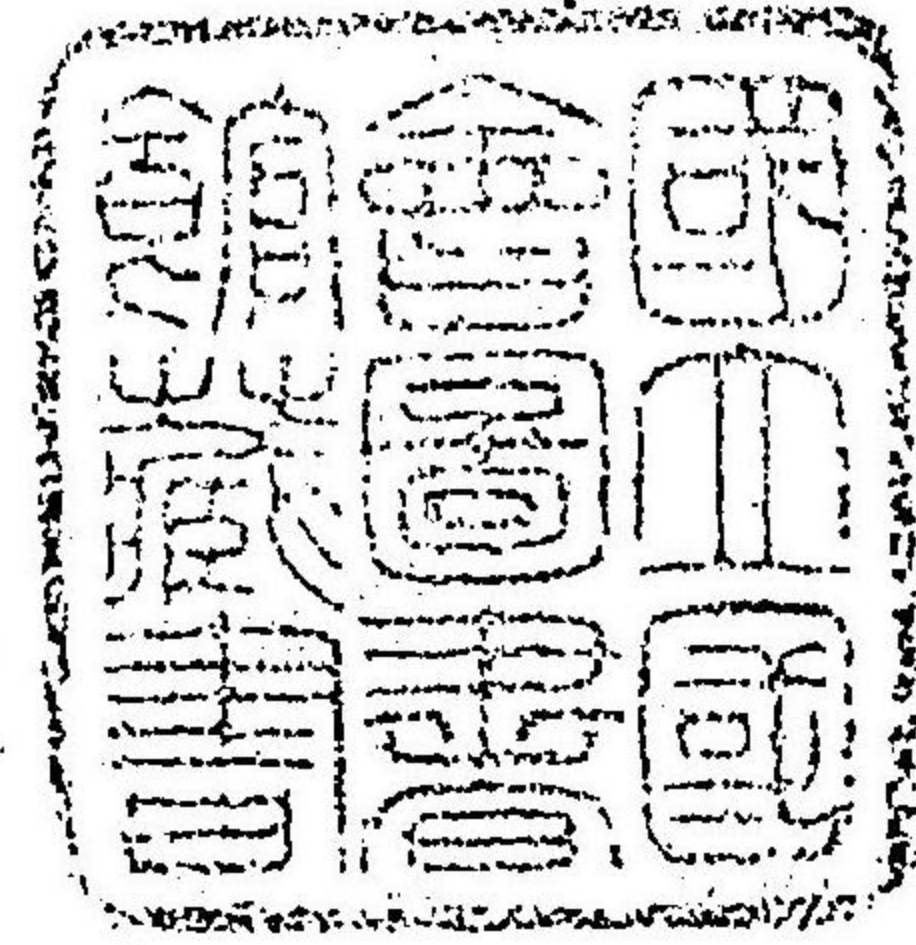
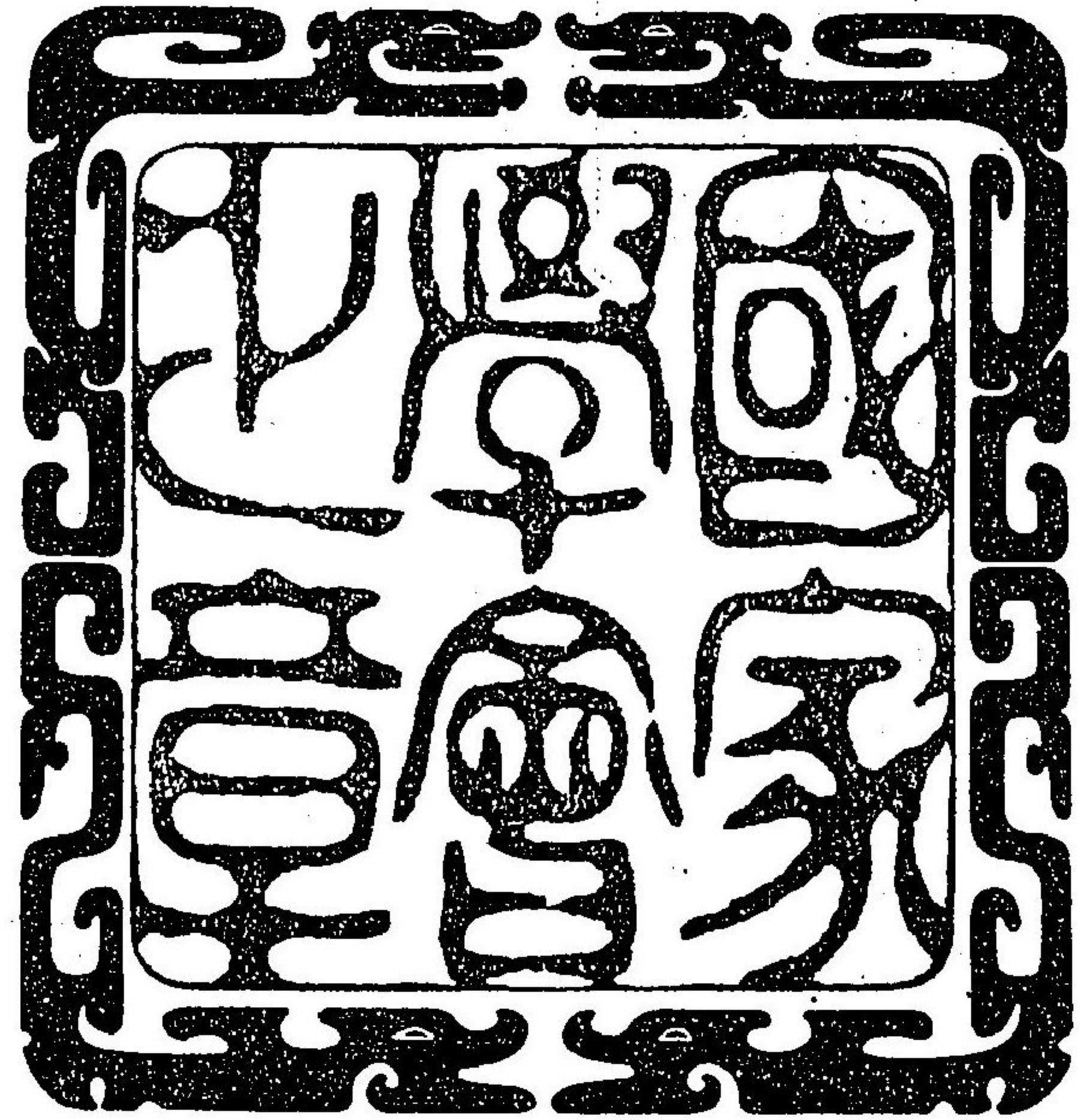


樞密院議長伊藤伯著

帝國憲法
皇室典範
義解

國家學會刊行

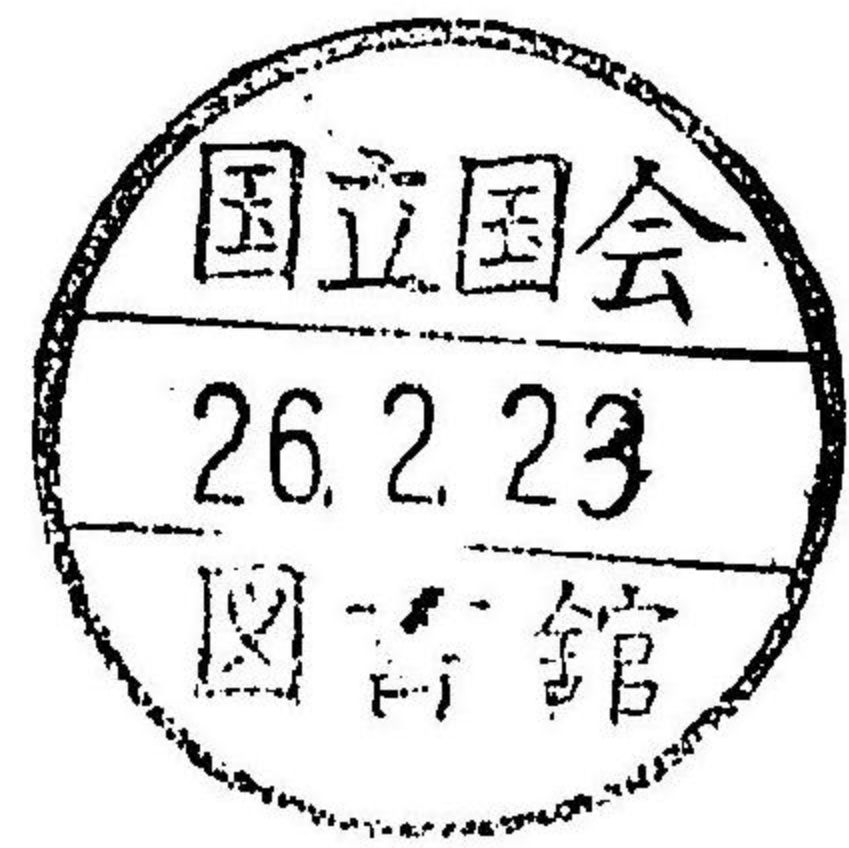
3 23,3 [783 ㄗ



225461



新中條を以て皇立典義
 厚を以て道則を社通以て
 少軌を以て維新の義法と
 國家の大強弱を以て



225461

各家をのり割き正義精確
師といひ日星の外は又証書書翰の
傍よりあきまふ此の比の産後
素能一尔

聖成の由りもの事案も又

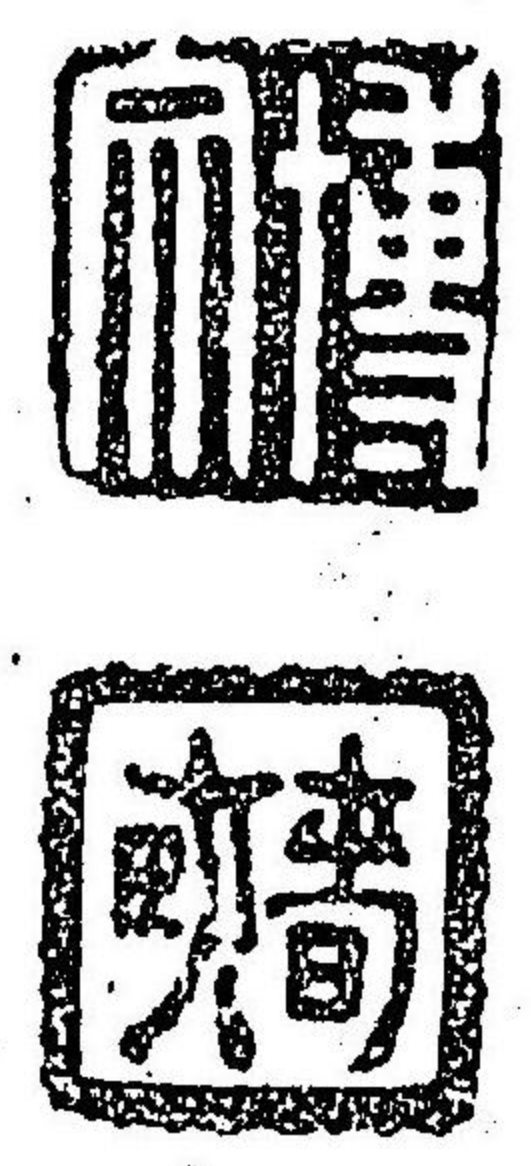
常下信房も俱の研慮考
窮ききの余研と筆記と
為し行ききの後回と名
つけしる義解と謂ふに大
共の証疏を為すも其

所傳者の一に充てしむるは
美しうのく美を共々学院
通く類を持し義を初
すゝめりては之を後合
印せしめあると持てし

敬し合ひし心は此書

の流に于て年月

伯爵伊藤博文謹誌



大日本帝國憲法義解

恭テ按スルニ我カ國君民ノ分義ハ既ニ肇造ノ時ニ定マル中世屢
變亂ヲ經政綱其ノ統一ヲ弛ヘシニ大命維新皇運隆興シ聖詔ヲ渙
發シテ立憲ノ洪猷ヲ宣ヘタマヒ上元首ノ大權ヲ統ヘ下股肱ノ力
ヲ展ヘ大臣ノ輔弼ト議會ノ翼贊トニ依リ機關各其ノ所ヲ得テ而
シテ臣民ノ權利及義務ヲ明ニシ益其ノ幸福ヲ進ムルコトヲ期セ
ムトス此レ皆祖宗ノ遺業ニ依リ其ノ源ヲ疏シテ其ノ流ヲ通スル
者ナリ

第一章 天皇

恭テ按スルニ天皇ノ寶祚ハ之ヲ祖宗ニ承ケ之ヲ子孫ニ傳フ國家
統治權ノ存スル所ナリ而シテ憲法ニ殊ニ大權ヲ掲ケテ之ヲ條章

ニ明記スルハ憲法ニ依テ新設ノ義ヲ表スルニ非スシテ固有ノ國
體ハ憲法ニ由テ益鞏固ナルコトヲ示スナリ

第一條 大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

恭テ接スルニ神祖開國以來時ニ盛衰アリト雖世ニ治亂アリト雖
皇統一系實祚ノ隆ハ天地ト與ニ窮ナシ本條首メニ立國ノ大義ヲ
掲ケ我カ日本帝國ハ一系ノ皇統ト相依テ終始シ古今永遠ニ亘リ
一アリテ二ナク常アリテ變ナキコトヲ示シ以テ君民ノ關係ヲ萬
世ニ昭カニス

統治ハ大位ニ居リ大權ヲ統ヘテ國土及臣民ヲ治ムルナリ古典ニ
天祖ノ勅ヲ舉ケテ瑞穗國是吾子孫可王之地宜爾皇孫統而治焉ト
云ヘリ又神祖ヲ稱ヘタテマツリテ始御國天皇ト謂ヘリ日本武尊
ノ言ニ吾者纏向ノ日代宮ニ坐シテ大八島國知ロシメヌ大帶日子淤

斯呂和氣天皇ノ御子トアリ文武天皇即位ノ詔ニ天皇カ御子ノア
レマサム彌繼繼ニ大八島國知ラサム次トノタマヒ又天下ヲ調ヘ
タマヒ平ケタマヒ公民ヲ惠ミタマヒ撫テタマハムトノタマヘリ
世々ノ天皇皆此ノ義ヲ以テ傳國ノ大訓トシタマハサルハナク其
ノ後御大八洲天皇ト謂フヲ以テ詔書ノ例式トハナサレタリ所謂
「シラス」トハ即チ統治ノ義ニ外ナラス蓋祖宗其ノ天職ヲ重ンシ君
主ノ德ハ八洲臣民ヲ統治スルニ在テ一人一家ニ享奉スルノ私事
ニ非サルコトヲ示サレタリ此レ乃憲法ノ據テ以テ其ノ基礎ト爲
ス所ナリ

我カ帝國ノ版圖古ニ大八島ト謂ヘルハ淡路島即今ノ淡路島秋津島即本
伊豫ノ二名島即四筑紫島即九州壹岐島津島對馬隱岐島佐渡島ヲ
謂ヘルコト古典ニ載セタリ景行天皇東蝦夷ヲ征シ西熊襲ヲ平ケ

疆土大ニ定マル推古天皇ノ時百八十餘ノ國造アリ延喜式ニ至リ六十六國及二島ノ區畫ヲ載セタリ明治元年陸奥出羽ノ二國ヲ分チ七國トス二年北海道ニ十一國ヲ置ク是ニ於テ全國合セテ八十四國トス現在ノ疆土ハ實ニ古ノ所謂大八島延喜式六十六國及各島并ニ北海道沖繩諸島及小笠原諸島トス蓋土地ト人民トハ國ノ以テ成立スル所ノ元質ニシテ一定ノ疆土ハ以テ一定ノ邦國ヲ爲シ而シテ一定ノ憲章共ノ間ニ行ハル故ニ一國ハ一個人ノ如ク一國ノ疆土ハ一個人ノ體軀ノ如ク以テ統一完全ノ版圖ヲ成ス

第二條 皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫之ヲ繼承ス

恭テ按スルニ皇位ノ繼承ハ祖宗以來既ニ明訓アリ以テ皇子孫ニ傳ヘ萬世易フルコト無シ若夫繼承ノ順序ニ至テハ新ニ勅定スル

所ノ皇室典範ニ於テ之ヲ詳明ニシ以テ皇室ノ家法トシ更ニ憲法ノ條章ニ之ヲ掲クルコトヲ用井サルハ將來ニ臣民ノ干涉ヲ容レサルコトヲ示スナリ

皇男子孫トハ祖宗ノ皇統ニ於ケル男系ノ男子ヲ謂フ此ノ文皇室典範第一條ト詳略相形ハス

第三條 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

恭テ按スルニ天地剖判シテ神聖位ヲ正ス神代紀蓋天皇ハ天縱惟神至聖ニシテ臣民群類ノ表ニ在リ欽仰スヘクシテ干犯スヘカラス故ニ君主ハ固ヨリ法律ヲ敬重セサルヘカラス而シテ法律ハ君主ヲ責問スルノ力ヲ有セス獨不敬ヲ以テ其ノ身體ヲ干瀆スヘカラサルノミナラス併セテ指斥言議ノ外ニ在ル者トス

第四條 天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此ノ

憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行フ

恭テ按スルニ統治ノ大權ハ天皇之ヲ祖宗ニ承ケ之ヲ子孫ニ傳フ立法行政百揆ノ事凡ソ以テ國家ニ臨御シ臣民ヲ綏撫スル所ノ者一ニ皆之ヲ至尊ニ總ヘテ其ノ綱領ヲ攬ラサルコトナキハ譬ヘハ人身ノ四支百骸アリテ而シテ精神ノ經絡ハ總テ皆其ノ本源ヲ首腦ニ取ルカ如キナリ故ニ大政ノ統一ナラサルヘカラサルハ宛モ人心ノ貳三ナルヘカラサルカ如シ但シ憲法ヲ親裁シテ以テ君民俱ニ守ルノ大典トシ其ノ條規ニ遵由シテ愆ラス遺レサルノ盛意ヲ明カニシタマフハ即チ自ラ天職ヲ重シテ世運ト俱ニ永遠ノ規模ヲ大成スル者ナリ蓋統治權ヲ總攬スルハ主權ノ體ナリ憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行フハ主權ノ用ナリ體有リテ用無ケレハ之ヲ專制ニ失フ用有リテ體無ケレハ之ヲ傲慢ニ失フ

(附記) 歐洲輓近政理ヲ論スル者ノ說ニ曰、國家ノ大權大別シテ二トナス、曰立法權行政權而シテ司法ノ權ハ實ニ行政權ノ支派タリ三權各其ノ機關ノ輔翼ニ依リ之ヲ行フコト一ニ皆元首ニ淵源ス蓋國家ノ大權ハ之ヲ國家ノ覺性タル元首ニ總ヘサレハ以テ其ノ生機ヲ有ツコト能ハサルナリ憲法ハ即チ國家ノ各部機關ニ向テ適當ナル定分ヲ與ヘ其ノ經絡機能ヲ有タシムル者ニシテ君主ハ憲法ノ條規ニ依リテ其ノ天職ヲ行フ者ナリ故ニ彼ノ羅馬ニ行ハレタル無限權勢ノ說ハ固ヨリ立憲ノ主義ニ非ス而シテ西曆第十八世紀ノ末ニ行ハレタル三權分立シテ君主ハ特ニ行政權ヲ執ルノ說ノ如キハ又國家ノ正當ナル解義ヲ謬ル者ナリト是ノ說ハ我カ憲法ノ主義ト相發揮スルニ足ル者アルヲ以テ茲ニ之ヲ附記シテ以テ參考ニ當ツ

第五條 天皇ハ帝國議會ノ協賛ヲ以テ立法權ヲ行フ

恭テ按スルニ立法ハ天皇ノ大權ニ屬シ而シテ之ヲ行フハ必議會ノ協賛ニ依ル天皇ハ内閣ヲシテ起草セシメ或ハ議會ノ提案ニ由リ兩院ノ同意ヲ經ルノ後之ヲ裁可シテ始メテ法律ヲ成ス故ニ至尊ハ獨行政ノ中極タルノミナラス又立法ノ淵源タリ

(附記) 之ヲ歐洲ニ參考スルニ百年以來偏理ノ論一タヒ時變ト投合シ立法ノ事ヲ以テ主トシテ議會ノ權ニ歸シ或ハ法律ヲ以テ上下ノ約束トシ君民共同ノ事トスルノ重點ニ傾向シタルハ要スルニ主權統一ノ大義ヲ誤ル者タルコトヲ免レス我カ建國ノ體ニ在テ國權ノ出ル所一ニシテ二ナラサルハ譬ヘハ主一ノ意思ハ以テ能ク百骸ヲ指使スヘキカ如シ而シテ議會ノ設ハ以テ元首ヲ助ケテ其ノ機能ヲ全クシ國家ノ意思ヲシテ精鍊強健

ナラシムルノ効用ヲ見ムトスルニ外ナラス蓋立法ノ大權ハ固ヨリ天皇ノ總フル所ニシテ議會ハ乃協翼參贊ノ任ニ居ル本末ノ間儼然トシテ紊ルヘカラサル者ナリ

第六條 天皇ハ法律ヲ裁可シ其ノ公布及執行ヲ命ス

恭テ按スルニ法律ヲ裁可シ式ニ依リ公布セシメ及執行ノ處分ヲ宣命ス裁可ハ以テ立法ノ事ヲ完結シ公布ハ以テ臣民遵行ノ効力ヲ生ス此レ皆至尊ノ大權ナリ裁可ノ權既ニ至尊ニ屬スルトキハ其ノ裁可セサルノ權ハ之ニ從フコト言ハスシテ知ルヘキナリ裁可ハ天皇ノ立法ニ於ケル大權ノ發動スル所ナリ故ニ議會ノ協賛ヲ經ト雖裁可ナケレハ法律ヲ成サス蓋古言ニ法ヲ訓ミテ宣トス播磨風土記云大法山今名勝品太天皇於此山宣大法故曰大法山ト言語ハ古傳遺俗ヲ徵明スルノ一大資料タリ而シテ法律ハ即

十
帝王言ナルゴトハ古人既ニ一定ノ釋義アリテ謬ラサリシナリ
(附記) 之ヲ歐洲ニ參考スルニ君主法案ノ成議ヲ拒ムノ權ヲ論
スル者其ノ說一ニ非ス英國ニ於テハ此レヲ以テ君主ノ立法權
ニ屬シ三體_{君主及上院}下院ヲ云フ平衡ノ兆證トシ佛國ノ學者ハ此レヲ以
テ行政ノ立法ニ對スル節制ノ權トス抑彼ノ所謂拒否ノ權ハ消
極ヲ以テ主義トシ法ヲ立ツル者ハ議會ニシテ之ヲ拒否スル者
ハ君主ヲシテ立法ノ一部分ヲ占領セシムルノ論理ニ出ル者ナ
ハ君主ヲシテ立法ノ一部分ヲ占領セシムルノ論理ニ出ル者ナ
ルニ過キス我カ憲法ハ法律ハ必王命ニ由ルノ積極ノ主義ヲ取
ル者ナリ故ニ裁可ニ依テ始メテ法律ヲ成ス夫レ唯王命ニ由ル
故ニ從テ裁可セサルノ權アリ此レ彼ノ拒否ノ權ト其ノ跡相似
テ其ノ實ハ霄壤ノ別アル者ナリ

第七條 天皇ハ帝國議會ヲ召集シ其ノ開會閉會停會
及衆議院ノ解散ヲ命ス

恭テ按スルニ議會ヲ召集スルハ尊ヲ至尊ノ大權ニ屬ス召集ニ由
ラスシテ議院自ラ會集スルハ憲法ノ認ムル所ニ非ス而シテ其ノ
議スル所ノ事總テ効力ナキ者トス
召集ノ後議會ヲ開閉シ兩院ノ始終ヲ制スルハ亦均ク至尊ノ大權
ニ由ル開會ノ初天皇親ラ議會ニ臨ミ又ハ特命勅使ヲ派シテ勅語
ヲ傳ヘシムルヲ式トシ而シテ議會ノ議事ヲ開始スルハ必其ノ後
ニ於テス開會ノ前閉會ノ後ニ於テ議事ヲ爲ス者ハ總テ無効トス
停會ハ議會ノ議事ヲ中絶セシムルノ謂ナリ有期ノ停會ハ其ノ期
ヲ經テ再ヒ會議ヲ繼續ス
衆議院ヲ解散スルハ更ニ新選ノ議院ニ向テ輿論ノ屬スル所ヲ問

フ所以ナリ此ニ貴族院ヲ謂ハサルハ貴族院ハ停會スヘクシテ解散スヘカラサレハナリ

第八條 天皇ハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其ノ災厄ヲ避クル爲緊急ノ必要ニ由リ帝國議會閉會ノ場合ニ於テ法律ニ代ルヘキ勅令ヲ發ス
此ノ勅令ハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出スヘシ
若議會ニ於テ承諾セサルトキハ政府ハ將來ニ向テ其ノ効力ヲ失フコトヲ公布スヘシ

恭テ按スルニ國家一旦急迫ノ事アルニ臨ミ又ハ國民凶荒癘疫及其ノ他ノ災害アルニ當テ公共ノ安全ヲ保チ其ノ災厄ヲ豫防救濟スル爲ニカノ及フ所ヲ極メテ必要ノ處分ヲ施サ、ルコトヲ得ス此ノ時ニ於テ議會偶開會ノ期ニ在ラサルニ當テハ政府ハ進テ其

ノ責ヲ執リ勅令ヲ發シテ法律ニ代ヘ遺計無ラシムルハ國家自衛及保護ノ道ニ於テ固ヨリ已ムヲ得サルニ出ル者ナリ故ニ前第五條ニ於テ立法權ノ行用ハ議會ノ協賛ヲ經ト云ヘルハ其ノ常ヲ示スナリ本條ニ勅令ヲ以テ法律ニ代フルコトヲ許スハ緊急時機ノ爲ニ除外例ヲ示スナリ是ヲ緊急命令ノ權トス抑緊急命令ノ權ハ憲法ノ許ス所ニシテ又憲法ノ尤濫用ヲ戒ムル所ナリ憲法ハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ災厄ヲ避クル爲ノ緊急ナル必要ニ限り此ノ特權ヲ用井ルコトヲ許シ而シテ利益ヲ保護シ幸福ヲ増進スルノ通常ノ理由ニ因リ之ヲ濫用スルコトヲ許サス故ニ緊急命令ハ其ノ之ヲ發スルニ當テ本條ニ準據スルコトヲ宣告スルヲ式トスヘキナリ若政府ニシテ此ノ特權ニ託シ容易ニ議會ノ公議ヲ回避スルノ方便トナシ又以テ容易ニ既定ノ法律ヲ破壊スルニ至ルコ

トアラハ憲法ノ條規ハ亦空文ニ歸シ一モ臣民ノ爲ニ保障ヲ爲スコト能ハサラムトス故ニ本條ハ又議會ヲ以テ此ノ特權ノ監督者タラシメ緊急命令ヲ事後ニ検査シテ之ヲ承諾セシムヘキコトヲ定メタリ

本條ハ憲法ノ中ニ於テ疑問尤多キ者トス今逐一問目ヲ設ケテ以テ之ヲ解釋セムトス第一此ノ勅令ハ以テ法律ノ曠缺ヲ補充スルニ止マルカ又ハ現行ノ法律ヲ停止シ變更シ廢止スルコトヲ得ルカ曰此ノ勅令ハ既ニ憲法ニ依リ法律ニ代ルノ力ヲ有スルトキハ凡ツ法律ノ爲スコトヲ得ルノ事ハ皆此ノ勅令ノ爲スコトヲ得ル所タリ但シ次ノ會期ニ於テ議會若之ヲ承諾セサルトキハ政府ハ此ノ勅令ノ効力ヲ失フコトヲ公布スルト同時ニ其ノ廢止又ハ變更シタル所ノ法律ハ總テ其ノ舊ニ復スヘキナリ第二議會ニシテ

此ノ勅令ヲ承諾スルトキハ其ノ効力ハ如何曰更ニ公布ヲ待タスシテ勅令ハ將來ニ法律ノ効力ヲ繼續スヘキナリ第三議會ニシテ此ノ勅令ノ承諾ヲ拒ムトキハ政府ハ更ニ將來ニ効力ヲ失フノ旨ヲ公布スルノ義務ヲ負フハ何ツ乎曰公布ニ依テ始メテ人民遵由ノ義務ヲ解ケハナリ第四議會ハ何ノ理由ニ因リ其ノ承諾ヲ拒ムコトヲ得ヘキヤ曰此ノ勅令ノ憲法ニ矛盾シ又ハ本條ニ掲ケタル要件ヲ缺キタルコトヲ發見シタルトキ又ハ其ノ他ノ立法上ノ意見ニ由リ承諾ヲ拒ムコトヲ得ヘシ第五此ノ勅令ニシテ政府若次ノ會期ニ於テ之ヲ議會ニ提出セサルトキ或ハ議會其ノ承諾ヲ拒ムノ後政府ニ於テ仍廢止ノ令ヲ發セサルトキハ如何曰政府ハ憲法違反ノ責ヲ負フヘキナリ第六議會若承諾ヲ拒ムトキハ前日ニ汙リ勅令ノ効力ヲ取消スコトヲ求ムルコトヲ得ルカ曰憲法既ニ

君主ノ緊急命令ヲ發シテ以テ法律ニ代フルコトヲ許シタルトキハ其ノ勅令ノ成存スルノ日ハ其ノ効力ヲ有スヘキハ固ヨリ當然タリ故ニ議會之ヲ承諾セサルトキハ單ニ將來ニ法律トシテ繼續ノ効力ヲ有スルコトヲ拒ムコトヲ得而シテ之ヲ過去ニ及ホスコトヲ得サルナリ第七議會ハ勅令ヲ修正シテ以テ之ヲ承諾スルコトヲ得ヘキカ曰本條ノ正文ニ依レハ議會ハ之ヲ承諾シ又ハ承諾セサルノ二途ノ一ヲ取ルコトヲ得而シテ之ヲ修正スルコトヲ得サルナリ

第九條 天皇ハ法律ヲ執行スル爲ニ又ハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スル爲ニ必要ナル命令ヲ發シ又ハ發セシム但シ命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ス

恭テ按スルニ本條ハ行政命令ノ大權ヲ掲クルナリ蓋法律ハ必議會ノ協賛ヲ經而シテ命令ハ專ラ天皇ノ裁定ニ出ツ命令ノ由テ發スル所ノ目的ニアリ一ニ曰法律ヲ執行スル爲ノ處分并ニ詳節ヲ規定ス二ニ曰公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スル爲ノ必要ニ於テス此レ皆至尊行政ノ大權ニ依リ立法ノ軌轍ニ由ラスシテ一般遵由ノ條規ヲ設クルコトヲ得ル者ナリ蓋法律ト命令トハ均ク臣民ニ遵守ノ義務ヲ負ハシムル者ナリ但シ法律ハ以テ命令ヲ變更スルコトヲ得ヘク命令ハ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ス若兩々相矛盾スルノ事アルニ至レハ法律ハ常ニ命令ノ上ニ効力ヲ有スヘキナリ
命令ハ均ク至尊ノ大權ニ由ル而シテ其ノ勅裁ニ出テ親署ヲ經ル者之ヲ勅令トス其ノ他閣省ノ命令ハ皆天皇大權ノ委任ニ由ル本

條ニ命令ヲ發シ又ハ發セシムト謂ヘルハ此ノ兩般ノ命令ヲ兼ネ
テ之ヲ指言スルナリ

前條ニ掲ケタル緊急命令ハ以テ法律ニ代ハルコトヲ得本條ニ掲
クル行政命令ハ以テ法律ノ範圍ノ内ニ處分シ又ハ法律ノ曠闕ヲ
補充スルコトヲ得ルモ法律ヲ變更シ及憲法ニ特ニ掲ケテ法律ヲ
要スル所ノ事件ヲ規定スルコトヲ得ス行政命令ハ常ニ用井ル所
ニシテ緊急命令ハ變ニ處スル所ナリ

(附記) 之ヲ歐洲ニ參考スルニ命令ノ區域ヲ論スル者其ノ主義
一ナラス第一ニ佛國白國ノ憲法ハ命令ノ區域ヲ以テ專ラ法律
ヲ執行スルニ止メ而シテ普國ノ憲法亦之ニ模倣シタルハ君主
行政ノ大權ヲ狹局ノ範圍ノ内ニ制限スルノ謬見タルコトヲ免
レス蓋所謂行政ハ固ヨリ法律ノ條則ヲ執行スルニ止マラス何

トナレハ法律ハ普通準繩ノ爲ニ其ノ大則ヲ定ムルノ能力アリ
テ而シテ萬殊事物ノ活動ニ對シ逐一ニ其ノ權宜ヲ指示スルコ
ト能ハサルハ宛モ一個人ノ豫定セル心志ハ以テ行動ノ方嚮ヲ
指導スヘシト雖變化窮リナキノ事緒ニ順應シテ其ノ機宜ヲ愆
ラサルハ又必臨時ノ思慮ヲ要スルカ如シ若行政ニシテ法律ヲ
執行スルノ限闕ニ止マラシメハ國家ハ法律ノ曠闕ナル地ニ於
テハ其ノ當然ノ職ヲ盡スニ由ナカラムトス故ニ命令ハ獨執行
ノ作用ニ止マラスシテ又時宜ノ必要ニ應シ其ノ固有ノ意思ヲ
發動スルコトアル者ナリ第二ニ法理ヲ論スル者安寧秩序ヲ保
持スルヲ以テ行政命令ノ唯一ノ目的トスル者アルハ此レ亦行
政ノ區域ヲ定ムルニ適當ナル釋義ヲ缺ク者ナリ蓋古歐陸各國
政府ハ安寧ヲ保持スルヲ以テ最大職任トシ其ノ内治ニ於ケル

ハ一ニ苟簡ヲ以テ主ト爲シタリシニ人文漸ク開ケ政治益進ム
ニ及テ始メテ經濟及教育ノ方法ニ倚リ人民ノ生活及智識ヲ發
達セシメ其ノ幸福ヲ増進スルノ必要ヲ發見スルニ至レリ故ニ
行政命令ノ目的ハ獨警察ノ消極手段ニ止マラスシテ更ニ一歩
ヲ進メ經濟上國民ノ生活ヲ富殖シ教育上其ノ智識ヲ開發スル
ノ積極手段ヲ取ルコトヲ務メサルヘカラサルナリ但シ行政ハ
固ヨリ各人ノ法律上ノ自由ヲ干スヘカラス其ノ適當ナル範圍
ニ於テ勸導扶掖シテ其ノ發達ヲ喚起スヘキナリ行政ハ固ヨリ
法律ノ既ニ制定セル限界ヲ離レスシテ法律ヲ保護シ以テ國家
ノ職ヲ當然ノ區域ノ内ニ盡スヘキナリ

第十條 天皇ハ行政各部ノ官制及文武官ノ俸給ヲ定
メ及文武官ヲ任免ス但シ此ノ憲法又ハ他ノ法律ニ

特例ヲ掲ケタルモノハ各其ノ條項ニ依ル

恭テ按スルニ至尊ハ建國ノ必要ニ依リ行政各部ノ官局ヲ設置シ
其ノ適當ナル組織及職權ヲ定メ文武ノ材能ヲ任用シ及之ヲ罷免
スルノ大權ヲ執ル之ヲ上古ニ考フルニ神武天皇大業ヲ定メ國造
縣主ヲ置ク是ヲ立官ノ始メテ史乘ニ見ユル者トス孝德天皇八省
ヲ置キ職官大ニ備ハル維新ノ初大寶ノ舊ニ依リ増損スル所アリ
其ノ後屢更張ヲ經官制及俸給ノ制ヲ定メラル而シテ大臣ハ天皇
ノ親ク任免スル所タリ勅任以下高等官ハ大臣ノ上奏ニ由リ裁可
シテ之ヲ任免ス均ク皆至尊ノ大命ニ出サルハアラス但シ裁判所
及會計検査院ノ構成ハ勅令ニ依ラスシテ法律ヲ以テ之ヲ定メ裁
判官ノ罷免ハ裁判ニ依リ之ヲ行フハ此レ憲法及法律ノ掲クル所
ノ特例ニ依ルモノナリ

官ヲ分チ職ヲ設クルコト既ニ王者ノ大權ニ屬スルトキハ俸祿ヲ給與スルコト亦從テ之ニ附屬スヘキナリ

(附記) 之ヲ獨逸ノ史乘ニ考ルニ昔時官吏ノ任免ハ專ラ君主及長官ノ隨意ニ任セタリシニ第十七世紀ニ及テ帝國大裁判所ノ裁判官ハ裁判ニ由ラサレハ其ノ官ヲ免スルコト能ハストナシ此ノ原則ヲ帝國參事官ニモ適用シタリ其ノ後第十八世紀ニ至リテ行政官吏ノ任職モ亦其ノ確定權利ニ屬スルノ説行ハレ往々各國法律ノ採用スル所トナリタリシニ第十九世紀ノ初ニ及テ官吏ハ俸給ニ就キ確定ノ權利ヲ有スト雖其ノ職ニ就キ之ヲ有スルコトナシ故ニ俸給又ハ恩給ヲ與ヘテ其ノ職ヲ免スルハ行政上ノ處分ヲ以テ足レリトストノ主義ヲ論スル者アリ此ノ論理ハ首ニ巴威倫ノ官吏ノ職制法ノ掲グル所トナリ政府ハ懲

戒裁判ニ由ラスシテ行政上ノ便宜ニ由リ官吏ノ官階及官階俸ヲ存シテ其ノ職務及職務俸及職服ヲ解クコトヲ得セシメタリ
千八百十 獨英國ハ獨逸各國ト固ヨリ其ノ例ヲ殊ニシ或ル一部ノ官吏ヲ除ク外ハ君主ハ隨意ニ文武官ヲ任免スルノ特權アルモノトスルコト今仍古ノ如キナリ

第十一條 天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス

恭テ按スルニ太祖實ニ神武ヲ以テ帝國ヲ肇造シ物部較負部來目部ヲ統率シ嗣後歷代ノ天子内外事アレハ自ラ元戎ヲ帥井征討ノ勞ヲ親ラシ或ハ皇子皇孫ヲシテ代リ行カシメ而シテ臣連二造ハ其ノ褊裨タリ天武天皇兵政官長ヲ置キ文武天皇大ニ軍令ヲ修メ三軍ヲ總フルコトニ大將軍一人アリ大將ノ出征ニハ必節刀ヲ授ク兵馬ノ權ハ仍朝廷ニ在リ其ノ後兵柄一タヒ武門ニ歸シテ政綱

從テ衰ヘタリ

今上中興ノ初親征ノ詔ヲ發シ大權ヲ總攬シ爾來兵制ヲ釐革シ積弊ヲ洗除シ帷幕ノ本部ヲ設ケ自ラ陸海軍ヲ總ヘタマフ而シテ祖宗ノ耿光遺烈再ヒ其ノ舊ニ復スルコトヲ得タリ本條ハ兵馬ノ統一ハ至尊ノ大權ニシテ專ラ帷幄ノ大令ニ屬スルコトヲ示スナリ

第十二條 天皇ハ陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ム

恭テ按スルニ本條ハ陸海軍ノ編制及常備兵額モ亦天皇ノ親裁スル所ナルコトヲ示ス此レ固ヨリ責任大臣ノ輔翼ニ依ルト雖亦帷幄ノ軍令ト均ク至尊ノ大權ニ屬スヘクシテ而シテ議會ノ干涉ヲ須タサルヘキナリ所謂編制ノ大權ハ之ヲ細言スレハ軍隊艦隊ノ編制及管區方面ヨリ兵器ノ備用給與軍人ノ教育檢閲紀律禮式服制衛戍城寨及海防守港並ニ出師準備ノ類皆其ノ中ニ在ルナリ常

備兵額ヲ定ムト謂フトキハ毎年ノ徵員ヲ定ムルコト亦其ノ中ニ在ルナリ

第十三條 天皇ハ戰ヲ宣シ和ヲ講シ及諸般ノ條約ヲ締結ス

恭テ按スルニ外國ト交戰ヲ宣告シ和親ヲ講盟シ及條約ヲ締結スルノ事ハ總テ至尊ノ大權ニ屬シ議會ノ參贊ヲ假ラス此レ一ハ君主ハ外國ニ對シ國家ヲ代表スル主權ノ統一ヲ欲シ二ハ和戰及條約ノ事ハ專ラ時機ニ應シ籌謀敏速ナルヲ尙フニ由ルナリ諸般ノ條約トハ和親貿易及聯盟ノ約ヲ謂フナリ

(附記) 歐洲ノ舊例ニ依ルニ中古各國ノ君主ハ往々外交ノ事ヲ親ラシ英國ウヰリヤム三世ノ如キハ躬外務長官ノ任ニ當リ當時ノ人共ノ尤外交事務ニ長シタルコトヲ稱贊シタリ近時立憲

ノ主義漸クニ進歩ヲ加フルニ及テ各國外交ノ事務亦責任宰相ノ管掌ニ屬シ君主ハ其ノ輔翼ニ倚リテ之ヲ行フコト他ノ行政事務ト一般ナルニ至レリ那破列翁佛國ノ執權タリシ時兩國講和ノ文函ヲ作り直ニ英國ノ君主ニ贈リシニ英國ハ其ノ書ヲ受ケテ而シテ外務執政ノ書ヲ以テ之ニ答ヘタリ今日國際法ニ於テ慶弔ノ親書ヲ除ク外各國交際條約ノ事總テ皆執政大臣ヲ經由スルハ列國ノ是認スル所ナリ本條ノ掲クル所ハ專ラ議會ノ關涉ニ由ラスシテ天皇其ノ大臣ノ輔翼ニ依リ外交事務ヲ行フヲ謂フナリ

第十四條 天皇ハ戒嚴ヲ宣告ス

戒嚴ノ要件及効力ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

恭テ按スルニ戒嚴ハ外敵内變ノ時機ニ臨ミ常法ヲ停止シ司法及

行政ノ一部ヲ擧ケテ之ヲ軍事處分ニ委ヌル者ナリ本條ハ戒嚴ノ要件及効力ヲ以テ法律ノ定ムル所トシ其ノ法律ノ條項ニ準據シテ時ニ臨テ之ヲ宣告シ又ハ其ノ宣告ヲ解クハ之ヲ至尊ノ大權ニ歸シタリ要件トハ戒嚴ヲ宣告スルノ時機及區域ニ於ケル必要ナル限局及宣告スル爲ノ必要ナル規程ヲ謂フ効力トハ戒嚴ヲ宣告スルノ結果ニ依リ權力ノ及フ所ノ限界ヲ謂フ

合國ノ地ニ在テ戰權ヲ施行シ臨時戒嚴ヲ宣告スルハ之ヲ其ノ地ノ司令官ニ委子處分シテ後ニ上申スルコトヲ許ス此レ又法律ニ於テ便宜ニ至尊ノ大權ヲ將帥ニ委任スル者ナリ

十五年三月十六號布告

第十五條 天皇ハ爵位勳章及其ノ他ノ榮典ヲ授與ス

恭テ按スルニ至尊ハ榮譽ノ源泉ナリ蓋功ヲ賞シ勞ニ酬ヒ及卓行善舉ヲ表彰シ顯榮ノ品位紀章及殊典ヲ授與スルハ專ラ至尊ノ大

權ニ屬ス而シテ臣子ノ竊弄ヲ容サ、ル所ナリ我カ國太古簡朴ノ世加一婆一禰ヲ以テ貴賤ノ別ヲ爲ス推古天皇始メテ冠位十二階ヲ定メ諸臣ニ頒チ賜フ天武天皇定メテ四十八階トナス文武天皇賜冠ヲ停メテ易フルニ位記ヲ以テス大寶令載スル所凡ソ三十階是レ今ノ位階ノ因テ起ル所ナリ又勳位十二等ハ以テ武功ヲ賞シ及孝弟力田ノ人ニ賜ヘリ中古以降武門專權ノ時ニ當テ賞罰ノ柄既ニ幕府ニ移ルト雖叙授ノ儀典ハ猶朝廷ニ屬スルコトヲ失ハサリシ維新ノ後明治二年位制ヲ定メ一位ヨリ九位ニ至ル八年勳等賞牌ノ制ヲ定メ十七年五等爵ノ制ヲ定ム此レ皆以テ賞獎ヲ昭ニシ顯榮ノ大典ヲ示ス者ナリ

第十六條 天皇ハ大赦特赦減刑及復權ヲ命ス

恭テ按スルニ國家既ニ法廷ヲ設ケ法司ヲ置キ正理公道ヲ以テ平

等ニ臣民ノ權利ヲ保護セシム而シテ猶法律ノ未タ各般ノ人事ヲ曲悉スルニ足ラスシテ時アリテ犯人事情仍憫諒スヘキ者アリ立法及司法ノ軌轍遂ニ以テ其ノ闕漏ニ周匝ナルコト能ハサラムコトヲ恐ル故ニ恩赦ノ權ハ至尊慈仁ノ特典ヲ以テ法律ノ及ハサル所ヲ補濟シ一民ノ其ノ情ヲ得サル者無ラシメムコトヲ期スルナリ

大赦ハ特別ノ場合ニ於テ殊例ノ恩典ヲ施行スル者ニシテ一ノ種類ノ犯罪ニ對シ之ヲ赦スナリ特赦ハ一個犯人ニ對シ其ノ刑ヲ赦スナリ減刑ハ既ニ宣告セラレタルノ刑ヲ減スルナリ復權ハ既ニ剝奪セラレタルノ公權ヲ復スルナリ

第四條以下第十六條ニ至ルマテ元首ノ大權ヲ列舉ス抑元首ノ大權ハ憲法ノ正條ヲ以テ之ヲ制限スルノ外及ハサル所ナキコト宛

モ大陽ノ光線ノ遮蔽ノ外ニ映射セサル所ナキカ如シ此レ固ヨリ
逐節叙列スルヲ待チテ始メテ存立スル者ニ非ス而シテ憲法ノ掲
クル所ハ既ニ其ノ大綱ヲ擧ケ又其ノ節目中ノ要領ナル者ヲ羅列
シテ以テ標準ヲ示スニ過キサルノミ故ニ鑄幣ノ權度量ヲ定ムル
ノ權ノ如キハ一々之ヲ詳ニスルニ及ハス其ノ之ヲ略スルハ即チ
之ヲ包括スル所以ナリ

第十七條 攝政ヲ置クハ皇室典範ノ定ムル所ニ依ル

攝政ハ天皇ノ名ニ於テ大權ヲ行フ

恭テ按スルニ攝政ハ天皇ノ事ヲ攝行ス故ニ凡ソ至尊ノ名分ヲ除
ク外一切ノ大政總テ天皇ノ名ニ於テ之ヲ行ヒ又大政ニ付キ其ノ
責ニ任セサルコト一ニ天皇ニ同シ但シ第七十五條ノ場合ニ於テ
制限スル所アルノミ天皇ノ名ニ於テト謂ヘルハ天皇ニ代テト謂

ヘルノ義ノ如シ蓋攝政ノ政令ハ即チ天皇ニ代リ之ヲ宣布スルナ
リ

攝政ヲ置クハ皇室ノ家法ニ依ル攝政ニシテ王者ノ大權ヲ總攬ス
ルハ事國憲ニ係ル故ニ後者ハ之ヲ憲法ニ掲ケ前者ハ皇室典範ノ
定ムル所ニ依ル蓋攝政ヲ置クノ當否ヲ定ムルハ專ラ皇室ニ屬ス
ヘクシテ而シテ臣民ノ容議スル所ニ非ス抑天子違豫ノ事アリテ
政治ヲ親ラスルコト能ハサルハ稀ニ見ル所ノ變局ニシテ而シテ
國家動亂ノ機亦往々此時ニ伏ス彼ノ或國ニ於テ兩院ヲ召集シ兩
院合會シテ攝政ヲ設クルノ必要ヲ議決スルコトヲ憲法ニ掲クル
カ如キハ皇室ノ大事ヲ以テ民議ノ多數ニ委子皇統ノ尊嚴ヲ干瀆
スルノ漸ヲ啓ク者ニ近シ本條攝政ヲ置クノ要件ヲ皇室典範ニ讓
リ之ヲ憲法ニ載セサルハ蓋專ラ國體ヲ重シ微ヲ防キ漸ヲ慎ム

ナリ

第二章 臣民權利義務

第二章ハ第一章ニ次キ臣民ノ權利及義務ヲ掲ク蓋祖宗ノ政ハ專
 ラ臣民ヲ愛重シテ名クルニ大寶ノ稱ヲ以テシタリ非常赦ノ時檢
 非違使佐囚徒ニ仰スルノ詞ニ爲^テ公御財御調物備進ト云ヘリ^次江家
 歷世ノ天子即位ノ日ハ皇親以下天下ノ人民ヲ集メ大詔ヲ宣^タマ
 フノ詞ニ集^ツ侍皇子等^ヲ王^ト臣^ト百官人等^ト天下公民諸^ヲ開食ト詔ル
 トアリ史臣用井ル所ノ公民ノ字ハ即チ「オホミタカラ」ノ名稱ヲ譯
 シタルナリ其ノ臣民ニ在テ亦自ラ稱ヘテ御民ト云天平六年海犬
 養宿禰岡麻呂應詔歌ニミタミワレ、イケル、シルシ、アリ、アメツチノ
 サカユルトキニ、アヘラク、オモヘハト謂ヘル是ナリ蓋上ニ在テハ

愛重ノ意ヲ致シ待ツニ邦國ノ寶ヲ以テシ下ニ在テハ大君ニ服從
 シ自ラ視テ以テ幸福ノ臣民トス是レ我カ國ノ典故舊俗ニ存スル者
 ニシテ本章ニ掲クル所ノ臣民ノ權利義務亦此ノ義ニ源流スルニ
 外ナラス抑、中古、武門ノ政、士人ト平民トノ間ニ等族ヲ分チ甲者公
 權ヲ專有シテ乙者預ラサルノミナラス其ノ私權ヲ併セテ乙者其
 ノ享有ヲ全クスルコト能ハス公民ノ義、是ニ於テ滅絶シテ伸ヒサ
 ルニ近シ維新ノ後、屢、大令ヲ發シ士族ノ殊權ヲ廢シ日本臣民タル
 者始メテ平等ニ其ノ權利ヲ有シ其ノ義務ヲ盡スコトヲ得セシメ
 タリ本章ノ載スル所ハ實ニ中興ノ美果ヲ培植シ之ヲ永久ニ保明
 スル者ナリ

第十八條 日本臣民タルノ要件ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

日本臣民トハ外國臣民ト之ヲ區別スルノ謂ナリ日本臣民タル者ハ各法律上ノ公權及私權ヲ享有スヘシ此レ臣民タルノ要件ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムルヲ必要トスル所以ナリ日本臣民タルニ二ツノ類アリ第一ハ出生ニ因ル者第二ハ歸化又ハ其ノ他法律ノ効力ニ依ル者

國民ノ身分ハ別法ノ定ムル所ニ依ル但シ私權ノ完全ナル享有ト及公權ハ專ラ國民ノ身分ニ伴隨スルヲ以テ特ニ別法ヲ以テ之ヲ定ムルノ旨ヲ憲法ニ掲クルコトヲ怠ラス故ニ別法ノ掲クル所ハ即チ憲法ノ指命スル所タリ又憲法ニ於ケル臣民權利義務ノ由テ係屬スル所タリ

選舉被選ノ權任官ノ權ノ類之ヲ公權トス公權ハ憲法又ハ其ノ他ノ法律ニ依テ之ヲ認定シ專ラ本國人ノ享有スル所トシテ之ヲ外

國人ニ許サ、ルハ各國普通ノ公法ナリ私權ニ至テハ内外ノ間ニ懸絶ノ區別ヲナシタルハ既ニ歴史上ノ往事ニ屬シ今日ハ一ニノ例外ヲ除ク外各國大抵外國人ヲシテ本國人ト同様ニ之ヲ享受スルコトヲ得セシムルノ傾向ヲ取リタリ

第十九條 日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ應シ均ク文武官ニ任セラレ及其ノ他ノ公務ニ就クコトヲ得

文武官ニ登任シ及其ノ他ノ公務ニ就クハ門閥ニ拘ラス是ヲ維新改革ノ美果ノ一トス往昔門地ヲ以テ品流ヲ差別セシ時ニ當テハ官ヲ以テ家ニ屬シ族ニ依テ職ヲ襲キ賤類ニ出ル者ハ才能アリト雖顯要ニ登用セラレ、コトヲ得ス維新ノ後陋習ヲ一洗シテ門閥ノ弊ヲ除キ爵位ノ等級ハ一モ就官ノ平等タルニ妨クルコトナシ

此レ乃憲法ノ之ヲ本條ニ保明スル所ナリ但シ法律命令ヲ以テ定
ムル所ノ相當資格即チ年齡納稅及試驗能力ノ諸般資格ハ仍官職
及公務ニ就クノ要件タルノミ
日本臣民ハ均ク文武官ニ任セラレ及其ノ他ノ公務ニ就クコトヲ
得ト謂フトキハ特別ノ規定アルニ依ルノ外外國臣民ニ此ノ權利
ヲ及ホサ、ルコト知ルヘキナリ

第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ兵役ノ

義務ヲ有ス

日本臣民ハ日本帝國成立ノ分子ニシテ俱ニ國ノ生存獨立及光榮
ヲ護ル者ナリ上古以來我カ臣民ハ事アルニ當テ其ノ身家ノ私ヲ
犠牲ニシ本國ヲ防護スルヲ以テ丈夫ノ事トシ忠義ノ精神ハ榮譽
ノ感情ト俱ニ人々祖先以來ノ遺傳ニ根因シ心肝ニ浸漸シテ以テ

一般ノ風氣ヲ結成シタリ聖武天皇ノ詔ニ曰大伴佐伯宿禰ハ常モ
云フゴトク天皇カ朝守リ仕ヘ奉ル事願ミナキ人等ニアレハ汝等
ノ祖ドモノ云ヒ來ラク海行カバ、ミヅク屍山行カバ草ムス屍王ノ
ヘニコソ死ナメ、ノドニハ死ナシト云ヒ來ル人等トナモ聞シメス
ト、此ノ歌即チ武臣ノ相傳ヘテ以テ忠武ノ教育ヲナセル所ナリ大
寶以來軍團ノ設アリ海内丁壯兵役ニ堪フル者ヲ募ル持統天皇ノ
時每國正丁四分ノ一ヲ取レルハ即チ徵兵ノ制ノ由テ始マル所ナ
リ武門執權ノ際ニ至テ兵農職ヲ分チ兵武ノ事ヲ以テ一種族ノ專
業トシ舊制久ク失ヒタリシニ維新ノ後明治四年武士ノ常職ヲ解
キ五年古制ニ基キ徵兵ノ令ヲ頒行シ全國男兒二十歳ニ至ル者ハ
陸軍海軍ノ役ニ充タシメ平時毎年ノ徵員ハ常備軍ノ編制ニ從ヒ
而シテ十七歳ヨリ四十歳迄ノ人員ハ盡ク國民軍トシ戰時ニ當リ

臨時召集スルノ制トシタリ此レ徵兵法ノ現行スル所ナリ本條ハ法律ノ定ムル所ニ依リ全國臣民ヲシテ兵役ニ服スルノ義務ヲ執ラシメ類族門葉ニ拘ラス又一般ニ其ノ志氣身體ヲ併セテ平生ニ教養セシメ一國雄武ノ風ヲ保持シテ將來ニ失墜セシメサラムコトヲ期スルナリ

第二十一條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納稅

ノ義務ヲ有ス

納稅ハ一國共同生存ノ必要ニ供應スル者ニシテ兵役ト均ク臣民ノ國家ニ對スル義務ノ一タリ
租稅ハ古言ニ「チカラ」ト云民力ヲ輸スノ義ナリ稅ヲ課スルヲ「オフ」ト云各人ニ負ハシムルノ義ナリ祖宗既ニ統治ノ義ヲ以テ國ニ臨ミタマヒ國庫ノ費ハ之ヲ全國ノ正供ニ取ル租稅ノ法由テ來ル

所久シ孝徳天皇租庸調ノ制ヲ行ヒ維新ノ後地租ノ改正ヲ行フ是ヲ稅法ノ二大變革トス其ノ詳ナルハ志籍ニ備ハルヲ以テ茲ニ之ヲ註明セス蓋租稅ハ臣民國家ノ公費ヲ分擔スルモノニシテ徵求ニ供給スル獻饋ノ類ニ非サルナリ又承諾ニ起因スル德澤ノ報酬ニ非サルナリ

(附記) 佛國ノ學者ハ其ノ偏理ノ見ヲ以テ租稅ノ義ヲ論シタリ千七百八十九年ミラボー氏カ佛國人民ニ向テ國費ヲ募ルノ公文ニ曰租稅ハ享ル所ノ利益ニ酬ユル代價ナリ公共安寧ノ保護ヲ得ムカ爲ノ前拂ナリト、ユミル、ド、ダラルダン氏ハ又說ヲ爲シテ曰租稅ハ權利ノ享受、利益ノ保護ヲ得ルノ目的ノ爲ニ國ト名ケタル一會社ノ社員ヨリ納ムル所ノ保險料ナリト此レ皆民約ノ主義ニ淵源シ納稅ヲ以テ政府ノ職務ト人民ノ義務ト互相交

換スルノ物トスル者ニシテ其ノ説巧ナリト雖實ニ千里ノ謬タルコトヲ免レス蓋租稅ハ一國ノ公費ニシテ一國ノ分子タル者ハ均ク其ノ共同義務ヲ負フヘキナリ故ニ臣民ハ獨現在ノ政府ノ爲ニ納稅スヘキノミナラス又前世過去ノ負債ノ爲ニモ納稅セサルコトヲ得ス獨得ル所ノ利益ノ爲ニ供給スヘキノミナラス其ノ利益ヲ享受セサルモ亦之ヲ供給セサルコトヲ得ス抑經營ハ所及儉省ナラムコトヲ欲シ租稅ハ所及薄カラムコトヲ欲ス此レ固ヨリ政府ノ本務ニシテ而シテ議會ノ財政ヲ監督シ租稅ヲ議定スルニ於ケル立憲ノ要義亦此レニ外ナラス然ルニ若租稅ノ義務ヲ以テ之ヲ上下相酬ノ市道ナリトシ納稅ノ諾否ハ專ラ享クル所ノ利益ト乘除相關ル者トセハ人々自ラ其ノ胸臆ニ斷定シテ以テ年租ヲ拒ムコトヲ得ム而シテ國家ノ成立危殆

ナラサラムコトヲ欲スルモ得ヘカラサルヘシ近時ノ論者既ニ前説ノ非ヲ辯シテ餘蘊ナカラシメ而シテ租稅ノ定義纔ニ歸着スル所ヲ得タリ今其ノ一二ヲ舉クルニ曰租稅ハ國家ヲ保持スル爲ニ設クル者ナリ政府ノ職務ニ酬ユルノ代價ニ非ス何トナレハ政府ト國民トノ間ニ契約アリテ存セサレハナリ(佛國フオスダン、エ氏)曰國家ハ租稅ヲ賦課スルノ權アリ而シテ臣民ハ之ヲ納ムルノ義務アリ租稅ノ法律上ノ理由ハ臣民ノ純然タル義務ニ在リ國家ノ本分ト其ノ目的トニ於テ歛クヘカラサルノ費用アルニ從ヒ國ノ分子タル臣民ハ之ヲ供納セサルヘカラス國民ハ無形ノ一體トシテ國家ナル自個ノ職分ノ爲ニ資需ヲ給スヘク而シテ各人ハ從テ之ヲ納メサルヘカラス何トナレハ各人ハ國民ノ一個分子ナレハナリ彼ノ國民及各個ノ臣民ハ國家ノ外ニ立

チ其ノ財産ノ保護ヲ受クル爲ノ報酬ナリトシテ租税ノ義ヲ解
釋スルハ極メテ不是ナル謬説ナリト(獨國スタ)此ニ記シテ以テ

參考ニ充ツ

第二十二條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ居住及 移轉ノ自由ヲ有ス

本條ハ居住及移轉ノ自由ヲ保明ス封建ノ時藩國疆ヲ盡リ各關柵
ヲ設ケ人民互ニ其ノ本籍ノ外ニ居住スルコトヲ許サス並ニ許可
ナクシテ旅行及移轉スルコトヲ得ス其ノ自然ノ運動及營業ヲ束
縛シテ植物ト其ノ類ヲ同クセシメタリシニ維新ノ後廢藩ノ舉ト
俱ニ居住及移轉ノ自由ヲ認メ凡ツ日本臣民タル者ハ帝國疆内ニ
於テ何レノ地ヲ問ハス定住シ借住シ寄留シ及營業スルノ自由ア
ラシメタリ而シテ憲法ニ其ノ自由ヲ制限スルハ必法律ニ由リ行

政處分ノ外ニ在ルコトヲ掲ケタルハ此レヲ貴重スルノ意ヲ明ニ
スルナリ

以下各條ハ臣民各個ノ自由及財産ノ安全ヲ保明ス蓋法律上ノ自
由ハ臣民ノ權利ニシテ其ノ生活及智識ノ發達ノ本源タリ自由ノ
民ハ文明ノ良民トシテ以テ國家ノ昌榮ヲ翼贊スルコトヲ得ル者
ナリ故ニ立憲ノ國ハ皆臣民各個ノ自由及財産ノ安全ヲ以テ貴重
ナル權利トシテ之ヲ確保セサルハナシ但シ自由ハ秩序アル社會
ノ下ニ棲息スル者ナリ法律ハ各個人ノ自由ヲ保護シ又國權ノ必
要ヨリ生スル制限ニ對シテ其ノ範圍ヲ分割シ以テ兩者ノ間ニ適
當ノ調和ヲ爲ス者ナリ而シテ各個臣民ハ法律ノ許ス所ノ區域ノ
中ニ於テ其ノ自由ヲ享受シ綽然トシテ餘裕アルコトヲ得ヘシ此
レ乃憲法ニ確保スル所ノ法律上ノ自由ナル者ナリ

第二十三條 日本臣民ハ法律ニ依ルニ非スシテ逮捕

監禁審問處罰ヲ受クルコトナシ

本條ハ人身ノ自由ヲ保明ス逮捕監禁審問ハ法律ニ載スル所ノ場合ニ限り其ノ載スル所ノ規程ニ從ヒ之ヲ行フコトヲ得ヘク而シテ又法律ノ正條ニ依ルニ非スシテ何等ノ所爲ニ對シテモ處罰スルコトヲ得ス必是ノ如クニシテ然後ニ人身ノ自由始メテ安全ナルコトヲ得ヘキナリ蓋人身ノ自由ハ警察及治罪ノ處分ト密切ノ關係ヲ有シ其ノ間分毫ノ餘地ヲ容ル、コト能ハス一方ニ於テハ治安ヲ保持シ罪惡ヲ防制シ及檢探糾治スルノ必要ナル處分ヲシテ敏捷強勁ナラシムルニ拘ラス他ノ一方ニ於テハ各人ノ自由ヲ尊重シテ其ノ界限ヲ峻嚴ニシ威權ノ蹂躪スル所ヲラシメサルハ立憲ノ制ニ於テ尤至重ノ要件トスル所ナリ故ニ警察及司獄官吏

第二十四條 日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁

法律ニ依ラスシテ人ヲ逮捕シ又ハ監禁シ又ハ苛刻ノ所爲ヲ施シタル者ハ其ノ罰私人ヨリ重カラシメ刑法第二百七十八條第二而シテ審問ノ方法ニ至テハ亦之ヲ警察官ニ委子スシテ必之ヲ司法官ニ訴ヘシメ辯護及公開ヲ行ヒ司法官又ハ警察官被告人ニ對シ罪狀ヲ供述セシムル爲ニ凌虐ヲ加フル者ハ重ヲ加ヘテ處斷ス刑
第二百八十二條凡ソ處罰ノ法律ノ正條ニ依ラサル者ハ裁判ノ効ナキモノトス治罪法第四百十條此レ皆務メテ周匝縝密ノ意ヲ致シテ以テ臣民ヲ保護スル所以ニシテ而シテ拷問及其ノ他中古ノ斷獄ハ歷史上既往ノ事蹟トシテ復現時ニ再生スルコトヲ得セシメス本條更ニ之ヲ確保シ以テ人身ノ自由ヲシテ安固ノ塗轍ニ入ラシメタリ

判ヲ受クルノ權ヲ奪ハル、コトナシ

本條亦各人ノ權利ヲ保護スル爲ノ要件タリ法律ニ依リ構成設置
スル所ノ裁判官ハ威權ノ牽制ヲ受ケスシテ兩造ノ間ニ衡平ヲ持
シ臣民ハ其ノ孤弱貧賤ニ拘ラス勢家權門ト曲直ヲ訟廷ニ爭ヒ檢
斷ノ官吏ニ對シ情狀ヲ辯護スルコトヲ得ヘシ故ニ憲法ハ法律ニ
定メタル正當ナル裁判官ノ外ニ特ニ臨時ノ裁判所又ハ委員ヲ設
ケテ以テ裁判ノ權限ヲ侵犯シ各人ノ爲ニ其ノ權利ヲ奪フコトヲ
許サス而シテ各人ハ獨立ノ裁判所ニ倚賴シテ以テ司直ノ父トス
ルコトヲ得ヘシ

第二十五條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク
外其ノ許諾ナクシテ住所ニ侵入セラレ及搜索セラ
ル、コトナシ

本條ハ住所ノ安全ヲ保明ス蓋家宅ハ臣民各個安棲ノ地タリ故ニ
私人ニシテ家主ノ承諾ナクシテ他人ノ住所ニ侵入スルコトヲ得
サルノミナラス警察司法及收税ノ官吏民事又ハ刑事又ハ行政ノ
處分ヲ問ハス凡テ法律ニ指定シタル場合ニ非スシテ及法律ノ規
程ニ依ラスシテ臣民ノ家宅ニ侵入シ又ハ之ヲ搜索スルコトアレ
ハ總テ憲法ノ見テ以テ不法ノ所爲ト做ス所ニシテ刑法ヲ以テ論
セラル、コトヲ免レサルヘキナリ 刑法第百七十一條
第百七十二條

第二十六條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク
外信書ノ秘密ヲ侵サル、コトナシ

信書ノ秘密ハ近世文明ノ惠賜ノ一タリ本條ハ刑事ノ檢探又ハ戰
時及事變及其ノ他法律ノ正條ヲ以テ指定シタル必要ノ場合ノ外
信書ヲ開披シ又ハ破毀シテ以テ其ノ秘密ヲ侵スヲ許サ、ルコト

ヲ保明ス

第二十七條

日本臣民ハ其ノ所有權ヲ侵サル、コトナシ公益ノ爲必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

本條ハ所有權ノ安全ヲ保明ス所有權ハ國家公權ノ下ニ存立スル者ナリ故ニ所有權ハ國權ニ服屬シ法律ノ制限ヲ受ケサルヘカラス所有權ハ固ヨリ不可侵ノ權ニシテ而シテ無限ノ權ニ非サルナリ故ニ城壘ノ周圍線一定ノ距離ニ於テ或ル建築ヲ禁スルハ賠償ヲ要セス鑛物ハ鑛法ノ管理ニ屬シ山林ハ山林經濟ノ標準ニ依リ規定シタル條則ニ由ラシメ鐵道線ヨリ一定ノ距離ニ於テ樹ヲ植ルコトヲ禁シ墓域ヨリ一定ノ距離ニ於テ井ヲ鑿ルコトヲ禁スルカ如キノ類此レ皆所有權ニ制限アルノ證據ニシテ而シテ各個人ノ所有ハ各個ノ身體ト同ク國權ニ對シ服屬ノ義務ヲ負フ者ナル

コトヲ認知スルニ足ル者ナリ蓋所有權ハ私法上ノ權利ニシテ全國統治ノ最高權ノ專ラ公法ニ屬スル者ト牴觸スル所アルニ非サルナリ歐洲ニ於テ和蘭ノ「グロシユス」氏其ノ萬國公法ニ於テ君主國法學者ハ其ノ國土ニ最高所有權ヲ有スルノ說ヲ唱ヘタリ近時ノ國法ヲ以テ最高所有權ノ名ニ換ヘタリ

上古臣民私地ヲ獻シ罪アリテ領地ヲ沒官セラレ私地ヲ賣リ價ヲ索ムルノ事史籍ニ見ユ孝德天皇大化二年處々ノ屯倉及田莊ヲ廢シ以テ兼併ノ害ヲ除キ而シテ隋唐ノ制ニ倣ヒ班田ノ制ヲ行ヒタリシモ其ノ後所領莊園ノ弊仍盛ニ行ハレ從テ封建ノ勢ヲ成シ德川氏ノ時ニ至テ農民ハ概テ領主ノ佃戶タルニ過キサリシ維新ノ初元年十二月大令ヲ發シテ村々ノ地面ハ總テ百姓ノ持地タルヘキコトヲ定メタリ四年ニ各藩版籍ヲ奉還シテ私領ノ遺物始メテ跡ヲ絕チタリ五年二月地所永代賣買ノ禁ヲ解キ又地券ヲ發行シ

六年三月地所名稱ノ達ヲ發シ公有地私有地ノ稱ヲ設ケ七年ニ私有地ヲ改メテ民有地トシ八年ニ地券ニ所有ノ名稱ヲ記載シタリ地券雛形ニ日本帝國ノ土地ヲ所此レ皆歐洲ニ在テ或ハ兵革ヲ用有スル者ハ必此券狀ヲ有スヘシ此レ皆歐洲ニ在テ或ハ兵革ヲ用非テ領主ノ專權ヲ廢棄シ或ハ巨大ノ金額ヲ用非テ以テ佃戶ノ爲ニ權利ヲ償却シタル者ニシテ而シテ我カ國ニ於テハ各藩ノ推讓ニ依テ容易ニ一般ノ統治ニ歸シ以テ之ヲ小民ニ惠賜スルコトヲ得タリ此レ實ニ史籍アリテ以來各國ニ共ノ例ヲ見サル所ニシテ中興新政ノ紀念タル者ナリ

公共利益ノ爲ニ必要ナルトキハ各個人民ノ意嚮ニ反シテ其ノ私產ヲ收用シ以テ需要ニ應セシム此レ即チ全國統治ノ最高主權ニ根據スル者ニシテ而シテ其ノ條則ノ制定ハ之ヲ法律ニ屬シタリ蓋公益收用處分ノ要件ハ其ノ私產ニ對シ相當ノ補償ヲ付スルニ

在リ而シテ必法律ヲ以テ制定スルヲ要シ命令ノ範圍ノ外ニ在ルハ又憲法ノ證明スル所ナリ

第二十八條 日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス

中古西歐宗教ノ盛ナル之ヲ内外ノ政事ニ混用シ以テ流血ノ禍ヲ致シ而シテ東方諸國ハ又嚴法峻刑ヲ以テ之ヲ防禁セムト試ミタリシニ四百年來信教自由ノ說始メテ萌芽ヲ發シ以テ佛國ノ革命北米ノ獨立ニ至リ公然ノ宣告ヲ得漸次ニ各國ノ是認スル所トナリ現在各國政府ハ或ハ其ノ國教ヲ存シ或ハ社會ノ組織又ハ教育ニ於テ仍一派ノ宗教ニ偏袒スルニ拘ラス法律上一般ニ各人ニ對シ信教ノ自由ヲ予ヘサルハアラス而シテ異宗ノ人ヲ戮辱シ或ハ公權私權ノ享受ニ向テ差別ヲ設クルノ陋習ハ既ニ史乘過去ノ事

トシテ仍猶逸各邦ニ於テハ千八百四十八年マテ復其ノ跡ヲ留メサ
 ルニ至レリ此レ乃信教ノ自由ハ之ヲ近世文明ノ一大美果トシテ
 看ルコトヲ得ヘク而シテ人類ノ尤至貴至重ナル本心ノ自由ト正
 理ノ伸長ハ數百年間沈淪茫昧ノ境界ヲ經過シテ纔ニ光輝ヲ發揚
 スルノ今日ニ達シタリ蓋本心ノ自由ハ人ノ内部ニ存スル者ニシ
 テ固ヨリ國法ノ干涉スル區域ノ外ニ在リ而シテ國教ヲ以テ偏信
 ヲ強フルハ尤人知自然ノ發達ト學術競進ノ運歩ヲ障害スル者ニ
 シテ何レノ國モ政治上ノ威權ヲ用井テ以テ教門無形ノ信依ヲ制
 壓セムトスルノ權利ト機能トヲ有セサルヘシ本條ハ實ニ維新以
 來取ル所ノ針路ニ從ヒ各人無形ノ權利ニ向テ濶大ノ進路ヲ予ヘ
 タルナリ
 但シ信仰歸依ハ專ラ内部ノ心識ニ屬スト雖其ノ更ニ外部ニ向ヒ

テ禮拜儀式布教演說及結社集會ヲ爲スニ至テハ固ヨリ法律又ハ
 警察上安寧秩序ヲ維持スル爲ノ一般ノ制限ニ遵ハサルコトヲ得
 ス而シテ何等ノ宗教モ神明ニ奉事スル爲ニ法憲ノ外ニ立チ國家
 ニ對スル臣民ノ義務ヲ逃ル、ノ權利ヲ有セス故ニ内部ニ於ケル
 信教ノ自由ハ完全ニシテ一ノ制限ヲ受ケス而シテ外部ニ於ケル
 禮拜布教ノ自由ハ法律規則ニ對シ必要ナル制限ヲ受ケサルヘカ
 ラス及臣民一般ノ義務ニ服從セサルヘカラス此レ憲法ノ裁定ス
 ル所ニシテ政教互相關係スル所ノ界域ナリ、

第二十九條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著 作印行集會及結社ノ自由ヲ有ス

言論著作印行集會結社ハ皆政治及社會ノ上ニ勢力ヲ行フ者ニシ
 テ而シテ立憲ノ國ハ其ノ變シテ罪惡ヲ成シ又ハ治安ヲ妨害スル

者ヲ除ク外總テ其ノ自由ヲ予ヘテ以テ思想ノ交通ヲ發達セシメ且以テ人文進化ノ爲ニ有益ナル資料ヲラシメサルハナシ但シ他ノ一方ニ於テハ此レ等ノ所爲ハ容易ニ濫用スヘキ銳利ナル器械タルカ故ニ此レニ由テ他人ノ榮譽權利ヲ傷害シ治安ヲ妨ケ罪惡ヲ致唆スルニ至テハ法律ニ依リ之ヲ處罰シ又ハ法律ヲ以テ委任スル所ノ警察處分ニ依リ之ヲ防制セサルコトヲ得サルハ是レ亦公共ノ秩序ヲ保持スルノ必要ニ出ル者ナリ但シ此ノ制限ハ必法律ニ由リ而シテ命令ノ區域ノ外ニ在リ

第三十條 日本臣民ハ相當ノ敬禮ヲ守リ別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒ請願ヲ爲スコトヲ得

請願ノ權ハ至尊仁愛ノ至意ニ由リ言路ヲ開キ民情ヲ通スル所以ナリ孝徳天皇ノ時ニ鐘ヲ懸ケ匱ヲ設ケ諫言愛訴ノ道ヲ開キタマ

ヒ中古以後歷代ノ天皇朝殿ニ於テ百姓ノ申文ヲ讀マセ大臣納言ノ輔佐ニ依リ親ク之ヲ聽斷シタマヘリ嵯峨天皇以後此ノ事史乘ニ考フルニ古昔明良ノ君主ハ皆言路ヲ洞通シ冤屈ヲ伸疏スルコトヲカメサルハアラス蓋議會未タ設ケス裁判聽訟ノ法未タ備ハラサルノ時ニ當テ民言ヲ容納シ民情ヲ疏通スルハ獨君主仁慈ノ懿徳タルノミナラス又政事上衆思ヲ集メ鴻益ヲ廣ムルノ必要ニ出ル者ナリ今ハ諸般ノ機關既ニ整備ニ就キ公議ノ府亦一定ノ所アリ而シテ猶臣民請願ノ權ヲ存シ匹夫匹婦疾苦ノ訴ト父老獻芹ノ微衷トヲシテ九重ノ上ニ洞達シ阻障スル所ナキヲ得セシム此レ憲法ノ民權ヲ貴重シ民生ヲ愛護シ一ノ遺漏ナキヲ以テ終局ノ目的ト爲スニ由ル而シテ政事上ノ德義是ニ至テ至厚ナリト謂フコトヲ得ヘシ

但シ請願者ハ正當ノ敬禮ヲ守ルヘク憲法上ノ權利ヲ濫用シテ以テ至尊ヲ干瀆シ又ハ他人ノ隱私ヲ摘發シテ徒ニ讒誣ヲ長スルカ如キハ德義上ノ尤モ戒慎スヘキ所ニシテ而シテ法律命令又ハ議院規則ニ依リ規程ヲ設クルハ又已ムヲ得サルニ出ル者ナリ
請願ノ權ハ君主ニ進ムルニ始マリ而シテ推廣シテ議院及官衙ニ呈出スルニ及フ其ノ各個人ノ利益ニ係ルト又ハ公益ニ係ルトヲ問ハス法律上彼此ノ間ニ互ニ制限ヲ設ケサルナリ

第三十一條 本章ニ掲ケタル條規ハ戰時又ハ國家事

變ノ場合ニ於テ天皇大權ノ施行ヲ妨クルコトナシ
本章掲ケル所ノ條規ハ憲法ニ於テ臣民ノ權利ヲ保明スル者ナリ
蓋立憲ノ主義ハ獨臣民ノミ法律ニ服従スルニ非ス又臣民ノ上ニ勢力ヲ有スル國權ノ運用ヲシテ法律ノ檢束ヲ受ケシムルニ在リ

唯然リ故ニ臣民倚テ以テ其ノ權利財產ノ安全ヲ享有シテ專横不法ノ疑懼ヲ免ル、コトヲ得ヘシ此レヲ本章ノ大義トス但シ憲法ハ猶非常ノ變局ノ爲ニ非常ノ例外ヲ掲ケルコトヲ怠ラス蓋國家ノ最大目的ハ其ノ存立ヲ保持スルニ在リ練熟ナル船長ハ覆没ヲ避ケ航客ノ生命ヲ救フ爲ニ必要ナルトキハ其ノ積荷ヲ海中ニ投棄セサルヘカラス其將ハ全軍ノ敗ヲ避クル爲ニ已ムヲ得サルノ時機ニ當リテ其ノ一部曲ヲ棄テサルコトヲ得ス國權ハ危難ノ時機ニ際シ國家及國民ヲ救濟シテ其ノ存立ヲ保全スル爲ニ唯一ノ必要方法アリト認ムルトキハ斷シテ法律及臣民權利ノ一部ヲ犧牲ニシテ以テ其ノ最大目的ヲ達セサルヘカラス此レ乃元首ノ權利ナルノミナラス亦其ノ最大義務タリ國家ニシテ若此ノ非常權ナカリセハ國權ハ非常ノ時機ニ際リテ其ノ職ヲ盡スニ由ナカラ

ムトス
 各國ノ憲法ニ或ハ此ノ義ヲ明示シ或ハ明示セサルトニ拘ラス其
 實際ニ於テ存立ヲ保全スル國權ノ權力ヲ認許セサルハアラス何
 トナレハ各國總テ皆戰時ノ爲ニ必要ナル處分ヲ施行スルハ誣フ
 ヘカラサルノ事實ナレハナリ但シ常變ノ際間ニ髮ヲ容ル、コト
 能ハス夫ノ時機ノ必要ニ非スシテ妄ニ非常權ニ推托シ以テ臣民
 ノ權利ヲ蹂躪スルカ如キハ各國憲法ノ決シテ許サ、ル所ナリ蓋
 正條ニ非常權ヲ掲ケ及其ノ要件ヲ示ス者ハ非常ノ時機ノ爲ニ憲
 法上ノ空缺ヲ遺スコトヲ肯ムセサルナリ或ル國ニ於テ之ヲ不言
 ニ附スル者ハ時機ノ處分ヲ以テ憲法區域ノ外ニ置キ議院ノ判決
 ニ任セ以テ其ノ違法ノ責ヲ解カムトスルナリ而シテ近世ノ國法
 學ヲ論スル者甲ノ方法ノ尤完全ナルヲ贊稱ス

第三十二條 本章ニ掲ケタル條規ハ陸海軍ノ法令又

ハ紀律ニ抵觸セサルモノニ限り軍人ニ準行ス

軍人ハ軍旗ノ下ニ在テ軍法軍令ヲ恪守シ專ラ服從ヲ以テ第一義
 務トス故ニ本章ニ掲グル權利ノ條規ニシテ軍法軍令ト相抵觸ス
 ル者ハ軍人ニ通行セス即チ現役軍人ハ集會結社シテ軍制又ハ政
 事ヲ論スルコトヲ得ス政事上ノ言論著述印行及請願ノ自由ヲ有
 セサルノ類是ナリ

第三章 帝國議會

第三章ハ帝國議會ノ成立及權利ノ大綱ヲ舉ク蓋議會ハ立法ニ參
 スル者ニシテ主權ヲ分ツ者ニ非ス法ヲ議スルノ權アリテ法ヲ定
 ムルノ權ナシ而シテ議會ノ參贊ハ憲法ノ正條ニ於テ附與スル所

ノ範圍ニ止マリ無限ノ權アルニ非サルナリ
 議會ノ立法ニ參スルハ立憲ノ政ニ於ケル要素ノ機關タル所以ナ
 リ而シテ議會ハ獨立立法ニ參スルノミナラス併セテ行政ヲ監視ス
 ルノ任ヲ間接ニ負擔スル者ナリ故ニ我カ憲法及議院法ハ議會ノ
 爲ニ左ノ權利ヲ認メタリ一ニ曰、請願ヲ受クルノ權、二ニ曰、上奏及
 建議ノ權、三ニ曰、議員政府ニ質問シ辯明ヲ求ムルノ權、四ニ曰、財政
 ヲ監督スルノ權是ナリ若議會ニシテ果シテ老熟着實ノ氣象ニ基
 キ平和靜穩ノ手段ヲ用非テ此ノ四條ノ權ヲ適當ニ使用スルコト
 ヲ愆ラサルトキハ以テ權力ノ偏重ヲ制シ立法行政ノ際調和平衡
 シテ善良ナル臣民ノ代議タルニ負カサルヘキナリ

第三十三條 帝國議會ハ貴族院衆議院ノ兩院ヲ以テ
 成立ス

貴族院ハ貴紳ヲ集メ衆議院ハ庶民ニ選フ兩院合同シテ一ノ帝國
 議會ヲ成立シ以テ全國ノ公議ヲ代表ス故ニ兩院ハ或ル特例ヲ除
 ク外平等ノ權力ヲ有チ一院獨立立法ノ事ヲ參贊スルコト能ハス以
 テ謀議周匝ニシテ輿論ノ公平ヲ得ルヲ期セムトス
 二院ノ制ハ歐洲各國ノ既ニ久シク因襲スル所ニシテ其ノ効績ヲ
 史乘ニ徵驗シ而シテ此ニ反スルノ一院制ヲ取レル者ハ皆其ノ流
 禍ヲ免レサルコトヲ證明シタリ 佛國千七百九十一年及千八百四
 十八年西班牙千八百十二年憲法
 近來二院制ノ祖國ニ於テ論者却テ其ノ社會發達ノ淹滯障礙タル
 ノ說ヲ爲ス者アリ抑二院ノ利ヲ主持スル者既ニ熟套ノ論アリテ
 今茲ニ引擧スルヲ必要トセサルヘシ但シ貴族院ノ設ハ以テ王室
 ノ屏翰ヲ爲シ保守ノ分子ヲ貯存スルニ止マルニ非ス蓋立國ノ機
 關ニ於テ固ヨリ其ノ必要ヲ見ル者ナリ何トナレハ凡ソ高尚ナル

有機物ノ組織ハ獨各種ノ元素ヲ包含シテ以テ成體ヲ爲スノミナ
 ラス又必各種ノ機器ニ倚テ以テ中心ヲ輔翼セサルハアラス兩目
 各其ノ位ヲ殊ニセサレハ以テ視力ノ角點ヲ得ヘカラス兩耳各其
 ノ方ヲ異ニセサレハ以テ聽官ノ偏聾ヲ免ルヘカラス故ニ元首ハ
 一ナラサルヘカラス而シテ衆庶ノ意思ヲ集ムルノ機關ハ兩個ノ
 一ヲ缺クヘカラサルコト宛モ兩輪ノ其ノ一ヲ失フヘカラサルカ
 如シ夫レ代議ノ制ハ以テ公議ノ結果ヲ收メムトスルナリ而シテ
 勢力ヲ一院ニ集メ一時感情ノ反射ト一方ノ偏向トニ任シテ互相
 牽制其ノ平衡ヲ持スル者ナカラシメハ孰レカ其ノ傾流奔注ノ勢
 容易ニ範防ヲ踰越シ一變シテ多數壓制トナリ再變シテ橫議亂政
 トナラサルコトヲ保證スル者アラム乎此レ其ノ弊ハ却テ代議ノ
 制ナキノ日ヨリ猶甚キモノアラムトス故ニ代議ノ制設ケサレハ

已ム之ヲ設ケテ二院ナラサレハ必偏重ヲ招クコトヲ免レス此レ
 乃物理ノ自然ニ原由スル者ニシテ一時ノ情況ヲ以テ之ヲ掩蔽ス
 ヘキニ非サルナリ要スルニ二院ノ制ノ代議法ニ於ケルハ之ヲ學
 理ニ照シ之ヲ事實ニ徴シテ其ノ不易ノ機關タルコトヲ結論スル
 コトヲ得ヘキナリ彼ノ或國ニ於ケル貴族院ノ懶庸ニシテ議事延
 滯ノ弊アルヲ論スルカ如キハ此レ一時ノ短ヲ摘發スルニ過キス
 而シテ國家ノ長計ニ對シテハ其ノ言ノ價直アルヲ見サルナリ

**第三十四條 貴族院ハ貴族院令ノ定ムル所ニ依リ皇
 族華族及勅任セラレタル議員ヲ以テ組織ス**

貴族院議員ハ其ノ或ハ世襲タリ或ハ選舉又ハ勅任タルニ拘ラス
 均ク上流ノ社會ヲ代表スル者タリ貴族院ニシテ其ノ職ヲ得ルト
 キハ政權ノ平衡ヲ保チ政黨ノ偏張ヲ制シ橫議ノ傾勢ヲ擗ヘ憲法

ノ鞏固ヲ扶ケ上下調和ノ機關トナリ國福民慶ヲ永久ニ維持スルニ於テ其ノ効果ヲ收ムルコト多キニ居ラムトス蓋貴族院ハ以テ貴胄ヲシテ立法ノ議ニ參預セシムルノミニ非ス又以テ國ノ勳勞學識及富豪ノ士ヲ集メテ國民慎重練熟耐久ノ氣風ヲ代表セシメ抱合親和シテ俱ニ上流ノ一團ヲ成シ其ノ効用ヲ全クセシムル所以ナリ其ノ構成制規ハ貴族院令ニ具ハルヲ以テ憲法ニ之ヲ列舉セサルナリ

第三十五條 衆議院ハ選舉法ノ定ムル所ニ依リ公選

セラレタル議員ヲ以テ組織ス

衆議院ノ議員ハ其ノ資格ト其ノ任期トヲ定メテ廣ク全國人民ノ公選スル所ヲ取ラムトス本條議員選舉ノ制規ヲ以テ之ヲ別法ニ讓ル者ハ蓋選舉ノ方法ハ時宜ノ必要ヲ將來ニ見ルニ從ヒ之ヲ補

修スルノ便ヲ取ルコトアラムトス故ニ憲法ハ其ノ細節ニ涉ルコトヲ欲セサルナリ

衆議院ノ議員ハ總テ皆全國ノ衆民ヲ代表スル者タリ而シテ衆議院ノ選舉ニ選舉區ヲ設クルハ代議士ノ選舉ヲシテ全國ニ普通ナラシメ及選舉ノ方法ニ便リスルニ外ナラス故ニ代議士ハ各個ノ良心ニ從ヒ自由ニ發言スル者ニシテ其ノ所屬選舉區ノ人民ノ爲ニ一地方ノ委任使トナリ委囑ヲ代行スル者ニ非サルナリ之ヲ歐洲ノ史乘ニ參考スルニ往昔ノ議會ハ其ノ議員タル者往々委囑ノ主旨ニ依リ一部ノ利益ヲ主張シテ全局ヲ達觀スルノ公義ヲ忘レ從テ多數ヲ以テ議決トスルノ代議ノ大則ヲ拋棄スルニ至ル者往々ニシテコレアリ此レ代議士ノ本分ヲ知ラサルノ過ニ由ルナリ

第三十六條 何人モ同時ニ兩議院ノ議員タルコトヲ

得ス

兩院ハ一ノ議會ニシテ分チテ兩局トシ其ノ成素ヲ殊ニシ平衡相持スルノ位置ニ居ル故ニ一人ニシテ同時ニ兩院ノ議員ヲ兼ヌルハ兩院分設ノ制ノ許サ、ル所ナリ

第三十七條

凡テ法律ハ帝國議會ノ協賛ヲ經ルヲ要ス

法律ハ國家主權ヨリ出ル軌範ニシテ而シテ必議會ノ協賛ヲ經ルヲ要スルハ之ヲ立憲ノ大則トス故ニ議會ノ議ヲ經サル者ハ之ヲ法律トスルコトヲ得サルナリ一院ノ可トスル所ニシテ他ノ一院ノ否トスル所ハ亦之ヲ法律トスルコトヲ得サルナリ

(附記) 何等ノ事物ハ法律ヲ以テ定ムルヲ要スル乎ノ問題ニ至テハ蓋一ノ例言ヲ以テ之ヲ概括シ難シ普國ノ普通法ヲ公布セル勅令ニ本法ハ別段ノ法律ニ依テ定メサル國民ノ權利義務ヲ

判明スヘキ條規ヲ包括スト云ヘリ又巴威倫千八百十八年五月二十六日憲法ノ第七章第二條ニ人身ノ自由又ハ國民ノ財產ニ關ル普通ノ法ヲ發シ或ハ現行法ヲ變更シ解釋シ廢止スルニハ國會ノ協同ヲ要スト云ヘリ然ルニ學者多クハ法律ノ區域ハ權利義務若ハ自由財產ニ止マルヘカラサルコトヲ駁シ且事物ヲ以テ法律ト命令トノ區域ヲ分割セムトスルハ憲法上及學問上ノ試驗ニ於テ一モ其ノ結果ヲ得サルコトヲ論シタリ蓋法律及命令ノ區域ハ專ラ各國政治發達ノ程度ニ從フ而シテ唯憲法史以テ之ヲ論斷スヘキノミ但シ憲法ノ明文ニ依リ特ニ法律ヲ要スル者ハ之ヲ第一ノ限界トシ既ニ法律ヲ以テ制定シタル者ハ法律ニ非サレハ之ヲ變更スルコトヲ得サルハ之ヲ第二ノ限界トス此レ乃立憲各國ノ同キ所ナリ

第三十八條 兩議院ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決
シ及各法律案ヲ提出スルコトヲ得

政府ニ於テ法律ヲ起草シ天皇ノ命ニ由リ之ヲ議案トナシ兩議院
ニ付スルトキハ兩議院ハ之ヲ可トシ之ヲ否トシ又ハ之ヲ修正ス
ルコトヲ得若兩議院ニ於テ或ル法律ヲ發行スルヲ必要ナリトス
ルトキハ各其ノ案ヲ提出スルコトヲ得而シテ甲議院之ヲ提出シ
乙議院之ニ同意シ又ハ之ヲ修正シテ可決シタル後天皇ノ裁可ア
ルトキハ亦法律トナルコト政府ノ起案ニ異ナルコトナシ
至尊ノ議會ニ於ケルハ召集開閉ノ勅命及法律裁可ノ外會期中總
テ國務大臣ヲシテ議案及其ノ他ノ往復ニ當ラシム故ニ之ヲ政府
ノ提出ト謂フナリ

第三十九條 兩議院ノ一ニ於テ否決シタル法律案ハ

同會期中ニ於テ再ヒ提出スルコトヲ得ス

再議ノ提出ハ議院ノ權利ヲ毀損スルノミナラス又會期遷延シテ
一事ニ拘滯スルノ弊アラムトス故ニ本條ニ之ヲ禁止セリ既ニ否
決ヲ經タル同一ノ議案ヲ以テ其ノ名稱文字ヲ變更シ再ヒ之ヲ提
出シ以テ本條ノ規定ヲ避ルハ亦憲法ノ許サハル所ナリ

君主ノ裁可ヲ得サルノ法案ハ同一會期ノ中ニ議院ヨリ提出スル
コトヲ得サルハ此レ固ヨリ元首ノ大權ニ對スル事理ノ當然ニシ
テ更ニ言明ヲ假ラス但シ仍建議ノ條ニ於テ其ノ再ヒ建議スルコ
トヲ禁スルコトヲ掲クルハ提出議案ノ裁可ノ有無ハ至尊ノ勅命
ニ由リ而シテ建議採納ノ有無ハ政府ノ取捨ニ存ス其ノ間固ヨリ
輕重ノ差アリ從テ豫メ疑義ヲ判明スルノ要用ヲ見レハナリ

第四十條 兩議院ハ法律又ハ其ノ他ノ事件ニ付各其

ノ意見ヲ政府ニ建議スルコトヲ得但シ其ノ採納ヲ得サルモノハ同會期中ニ於テ再ヒ建議スルコトヲ得ス

本條ハ議院ニ建議ノ權アルコトヲ掲クルナリ上條既ニ兩議院ニ各法律案ヲ提出スルノ權ヲ予ヘタリ而シテ本條ニ又法律ニ付意見ヲ建議スルコトヲ得ト謂ヘルハ何ツ乎議院自ラ法律ヲ起案シテ之ヲ提出スルト或ハ某ノ新法ノ制定スヘク某ノ舊法ノ改正又ハ廢止スヘキコトヲ決議シ成案ヲ具ヘス單ニ其ノ意見ヲ以テ政府ニ啓陳シ政府ノ採ル所トナルトキハ其ノ起草制定スルニ任スルト兩様ノ方法ニ就テ議院ヲシテ其ノ一ヲ擇ハシムルナリ蓋之ヲ歐洲ニ參考スルニ議院自ラ議案提出ノ權ヲ有スルハ各國ノ同キ所ナリ(瑞西ヲ除ク外)但シ議院自ラ多數ニ倚賴シテ法律ノ條項

ヲ制定スルハ往々議事遷延ト成條ノ疎漏ニシテ首尾完整ナラサルトノ弊ヲ免レス寧政府ノ委員ノ練熟ナルニ倚任スルノ愈レルニ若カス此レ各國學者ノ之ヲ事實ニ徵驗シテ其ノ得失ヲ論スル所ナリ

議會ハ立法ノ事ニ參預スルノミナラス併セテ間接ニ行政ヲ監視スルノ任ヲ負フ者ナリ故ニ兩議院ハ又立法ノ外ノ事件ニ付意見ヲ以テ政府ニ建議シ利弊得失ヲ論白スルコトヲ得

但シ法律又ハ其ノ他ノ事件ニ拘ラス議院ノ意見ニシテ政府ノ採納ヲ得サル者ハ同一會期ノ間再ヒ建議スルコトヲ得サラシムルハ蓋紛議強迫ニ涉ルノ塗ヲ防ク所以ナリ

第四十一條 帝國議會ハ每年之ヲ召集ス

議會ヲ召集スルハ專ラ天皇ノ大權タリ然ルニ本條ニ毎年召集ス

ルコトヲ定ムルハ憲法ニ於テ議會ノ存立ヲ保障スル所以ナリ但シ第七十條ニ掲ケタル場合ノ如キハ非常ノ例外タリ

第四十二條 帝國議會ハ三箇月ヲ以テ會期トス必要アル場合ニ於テハ勅命ヲ以テ之ヲ延長スルコトアルヘシ

三個月ヲ以テ會期トスル者ハ議事遷延シ窮期ナキコトアルヲ防クナリ其ノ已ムヲ得サルノ必要アルニ當リ會期ヲ延長シ閉會ヲ延期スルハ亦勅命ニ由ル議會自ラ之ヲ行フコトヲ得サルナリ議會閉會シタルトキハ會期ノ事務ハ終ヲ告ル者トシ特別ノ規定アル者ヲ除ク外議事ノ已ニ議決シタルト未タ議決セサルトヲ問ハス次回ノ會期ニ繼續スルコトナシ

第四十三條 臨時緊急ノ必要アル場合ニ於テ常會ノ

外臨時會ヲ召集スヘシ

臨時會ノ會期ヲ定ムルハ勅命ニ依ル

議會ハ一年ニ一會ヲ開ク之ヲ常會トス憲法ニ常會ノ時期ヲ掲ケスト雖蓋常會ハ以テ毎年ノ豫算ヲ議スルノ便ヲ取ル故ニ冬季ニ開會スルヲ例トス而シテ常會ノ外臨時緊急ノ必要アルトキハ特ニ勅命ヲ發シテ臨時會ヲ召集ス

臨時會ノ會期ハ憲法ニ之ヲ限定セス而シテ臨時召集スル所ノ勅命ノ定ムル所ニ從フ亦其ノ必要如何ニ依ラシムルナリ

第四十四條 帝國議會ノ開會閉會會期ノ延長及停會ハ兩院同時ニ之ヲ行フヘシ

衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ貴族院ハ同時ニ停會セラレヘシ

貴族院ト衆議院ハ兩局ニシテ一揆ノ議會タリ故ニ一議院ノ議ヲ經スシテ他ノ議院ノ成議ヲ以テ法律ト爲スヘカラス又一議院ノ會期ノ外ニ他ノ議院ノ會議ヲ有効ナラシムヘカラス本條ニ兩院ハ必同時ニ開閉始終スルヲ定ムルハ此ノ義ニ依レルナリ
貴族院ノ一部ハ世襲議員ヲ以テ組織ス故ニ貴族院ハ停會スヘクシテ解散スヘカラス衆議院ノ解散ヲ命セラレタルニ當テハ貴族院ハ同時ニ停會ヲ命セララル、ニ止マルナリ

第四十五條 衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ勅命ヲ以テ新ニ議員ヲ選舉セシメ解散ノ日ヨリ五箇月以内ニ之ヲ召集スヘシ

本條ハ議會ノ爲ニ永久ノ保障ヲ與フルナリ蓋解散ハ將ニ舊議員ヲ解散シテ新議員ヲ召集セムトスル者ナリ而シテ憲法若議院解

散ノ後新ニ召集スルノ時期ヲ一定セサルトキハ議會ノ存立ハ政府ノ隨意ニ廢止スル所ニ任スルニ至ラムトス

第四十六條 兩議院ハ各其ノ總議員三分ノ一以上出席スルニ非サレハ議事ヲ開キ議決ヲ爲スコトヲ得ス

出席議員三分ノ一ニ充タサルトキハ以テ會議ヲ成立スルニ足ラス故ニ議事ヲ開クコトヲ得ス及議決ヲ爲スコトヲ得サルナリ
總議員トハ選舉法ニ定メタル議員ノ總數ヲ謂フ三分ノ一以上出席スルニ非サレハ議事ヲ開クコトヲ得サルトキハ三分ノ一以上召集ニ應スルニ非サレハ議院ノ成立ヲ告グルコト能ハサルコト亦知ルヘキナリ

第四十七條 兩議院ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス可否

同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

過半數ヲ以テ決ヲ舉ルハ議事ノ常則タリ本條過半數トハ出席議員ニ就テ之ヲ謂ヘルナリ兩議平分シテ各同數ヲ得ルノ場合ニ當テ議長ノ見ル所ニ依リ決ヲ爲スハ事理宜ク然ルヘキナリ但シ第七十三條ニ於ケル憲法改正ノ議事ハ例外トス又議院ニ於テ議長及其他ノ委員ヲ選舉スルニ付特ニ定ムルノ多數及委員會ノ規程ハ各其ノ規則ニ依ルヘクシテ本條ニ干涉ナキナリ

第四十八條 兩議院ノ會議ハ公開ス但シ政府ノ要求

又ハ其ノ院ノ決議ニ依リ秘密會ト爲スコトヲ得
議院ハ衆庶ヲ代表ス故ニ討論可否之ヲ衆目ノ前ニ公ニス但シ議事ノ秘密ヲ要スル者外交事件人事及職員委員ノ選舉又ハ或ル財政兵政或ル治安ニ係ル行政法ノ如キハ其ノ變例トシ政府ノ要求

ニ依リ又ハ各院ノ決議ニ依リ秘密會ト爲シ公開ヲ閉ツルコトヲ得

第四十九條 兩議院ハ各天皇ニ上奏スルコトヲ得

上奏ハ文書ヲ上呈シテ天皇ニ奏聞スルヲ謂フ或ハ勅語ニ奉對シ或ハ慶賀吊傷ノ表辭ヲ上リ或ハ意見ヲ建白シ請願ヲ陳疏スルノ類皆其ノ中ニ在リ而シテ或ハ文書ヲ上呈スルニ止マリ或ハ總代ヲ以テ觀謁ヲ請ヒ之ヲ上呈スルモ皆相當ノ敬禮ヲ用ウヘク逼迫強抗ニシテ尊嚴ヲ干犯スルコトアルヲ得サルヘキナリ

第五十條 兩議院ハ臣民ヨリ呈出スル請願書ヲ受クルコトヲ得

臣民ハ至尊ニ請願シ又ハ行政官衙ニ請願シ議院ニ請願スルコト總テ其ノ意ニ隨フコトヲ得其ノ議院ニ在テハ各人ノ請願ヲ受ケ

テ之ヲ審査シ或ハ單ニ之ヲ政府ニ紹介シ或ハ之ニ意見書ヲ附シ
テ政府ノ報告ヲ求ムルコトヲ得但シ議院ハ必シモ請願ヲ議定ス
ルノ義務アルコトナク政府ハ必シモ請願ヲ許可スルノ義務アル
コトナシ若夫請願ノ立法ニ係ル者ハ請願ヲ以テ直ニ提出法律案
ノ動議ト爲スヘカラスト雖議員ハ其ノ請願ノ主旨ニ依リ通常動
議ノ方法ニ從フコトヲ得ヘシ

第五十一條 兩議院ハ此ノ憲法及議院法ニ掲クルモ
ノ、外内部ノ整理ニ必要ナル諸規則ヲ定ムルコト
ヲ得

内部ノ整理ニ必要ナル諸規則トハ議長ノ推選議長及事務局ノ職
務各部ノ分設委員ノ推選委員ノ事務議事規則議事記錄請願取扱
規則議員請假規則紀律及議院會計ノ類ヲ謂フ而シテ憲法及議院

法ノ範圍内ニ於テ議院ノ自ラ之ヲ制定スルニ任スルナリ

第五十二條 兩議院ノ議員ハ議院ニ於テ發言シタル
意見及表決ニ付院外ニ於テ責ヲ負フコトナシ但シ
議員自ラ其ノ言論ヲ演說刊行筆記又ハ其ノ他ノ方
法ヲ以テ公布シタルトキハ一般ノ法律ニ依リ處分
セララルヘシ

本條ハ議院ノ爲ニ言論ノ自由ヲ認ム蓋議院ノ内部ハ議院ノ自治
ニ屬ス故ニ言論ノ規矩ヲ越エ德義ヲ紊リ又ハ人ノ私事ヲ譏毀ス
ルカ如キハ議院ノ紀律ニ據リ議院自ラ之ヲ制止シ及懲戒スヘキ
所ニシテ而シテ司法官ハ之ニ干涉セサルヘキナリ議決ハ以テ法
律ノ成案ヲ爲サムトス而シテ議員ノ討論ハ異同相摩シテ其ノ一
ニ歸結スルノ資料ヲ爲ス者ナリ故ニ議院ノ議ハ以テ刑事及民事

ノ責ヲ問フヘカラサルナリ此レ一ハ議院ノ權利ヲ尊重シ二ハ議員ノ言論ヲシテ十分ニ價量アラシムトナリ但シ議員自ラ議院ノ言論ヲ公布シ其ノ自由ヲ冒用シテ之ヲ外部ニ普及スルニ至テハ動議ト駁議トヲ問ハス總テ法律ノ責問ヲ免ルコトヲ得ス

第五十三條 兩議院ノ議員ハ現行犯罪又ハ内亂外患ニ關ル罪ヲ除ク外會期中其ノ院ノ許諾ナクシテ逮捕セララル、コトナシ

兩議院ハ立法ノ大事ヲ參贊ス故ニ會期ノ間議員ニ予フルニ例外特權ヲ以テシ議員ヲシテ不羈ノ體面ヲ有テ其ノ重要ノ職務ヲ盡スコトヲ得セシムトス若夫現行犯罪又ハ内亂外患ニ係ルノ罪ニ至テハ議院ノ特典ノ庇護スル所ニ非サルナリ會期中トハ召集ノ後閉會ノ前ヲ謂フ非現行犯及普通ノ罪犯ハ議院ニ通牒シ其ノ

許諾ヲ得テ後ニ之ヲ逮捕シ其ノ現行犯及内亂外患ニ關ル罪犯ハ先ツ逮捕シテ後ニ議院ニ通知スヘキナリ

第五十四條 國務大臣及政府委員ハ何時タリトモ各議院ニ出席シ及發言スルコトヲ得

議會ノ議事ニ當リ議場ニ辯明スルハ大臣重任ノ在ル所ニシテ萬衆ニ對シ心胸ヲ開キ正理ヲ公議ニ訴ヘ嘉謀ヲ時論ニ求メ其ノ底蘊ヲ叩キ遺憾ナカラシム蓋此ノ如クナラサレハ以テ立憲ノ効用ヲ收ムルニ足ラサルナリ但シ出席及發言ノ權ハ政府ノ自由ニ任セ或ハ大臣自ラ討論シ又ハ辯明シ或ハ他ノ委員ヲシテ討論辯明セシメ或ハ時宜ノ許サ、ルヲ以テ討論辯明ヲ爲サ、ルコトヲ得皆其ノ意ニ隨フナリ

第四章 國務大臣及樞密顧問

國務大臣ハ輔弼ノ任ニ居リ詔命ヲ宣奉シ政務ヲ施行ス而シテ樞密顧問ハ重要ノ諮詢ニ應ヘ樞密ノ謀議ヲ展フ皆天皇最高ノ輔翼タル者ナリ

第五十五條 國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其ノ責ニ任

ス
凡テ法律勅令其ノ他國務ニ關ル詔勅ハ國務大臣ノ副署ヲ要ス

國務各大臣ハ入テ内閣ニ參贊シ出テ各部ノ事務ニ當リ大政ノ責ニ任スル者ナリ凡ソ大政ノ施行ハ必内閣及各部ニ由リ其ノ門ヲ二ニセス蓋立憲ノ目的ハ主權ノ使用ヲシテ正當ナル軌道ニ由ラシメムトスルニ在リ即チ公議ノ機關ト宰相ノ輔弼ニ依ルヲ謂フ

ナリ故ニ大臣ノ君ニ於ケルハ務メテ獎順匡救ノカヲ致シ若其ノ道ヲ愆ルトキハ君命ヲ藉口シテ以テ其ノ責ヲ逃ルハコトヲ得サルナリ

我カ國上古大臣大連輔弼ノ任ニ居ル孝德天皇ノ詔ニ夫君於天地之間而宰萬民者不可獨制要須臣翼ト云ヘリ天智天皇ノ時始メテ太政官ヲ置キ而來太政大臣左右大臣ハ政務ヲ統理シ大納言ハ參議シ旨ヲ宣ヘ中務卿ハ詔勅ヲ審署シ太政官ハ中務式部治部民部兵部刑部大藏宮内ノ八省ヲ統ヘ官制粗備ル其ノ後重臣專ラ太政ヲ關白シ宮禁ノ中藏人ノ小臣亦王命ヲ出納シ院宣内旨或ハ女官ノ文書ヲ以テ大事ヲ下行スルニ至ル而シテ朝綱全ク廢レタリ維新ノ初首メニ攝關及傳奏議奏ヲ廢シ又特ニ宮中ニ令シ内議請謁ノ禁ヲ嚴ニシ尋テ太政官制ヲ復ス明治二年七月左右大臣參議及

六省ヲ置ク四年太政大臣ヲ置ク六年十月參議諸省卿ニ兼任ス其ノ後又更草ヲ經十八年十二月ニ至テ太政大臣參議各省卿ノ職制ヲ廢シ更ニ内閣總理大臣及外務内務大藏陸軍海軍司法文部農商務遞信ノ十大臣ヲ以テ内閣ヲ組織シタリ蓋太寶ノ制ニ據ルトキハ太政官ハ諸省ノ上ニ冠首トシ諸省ハ其ノ下ノ分司タリ諸省卿ノ職ハ太政官符ヲ施行スルニ過キス而シテ事ヲ天皇ニ受ケ重責ニ任スル者ニ非ス維新ノ後歷次潤色ヲ經十八年ノ詔命ニ至リ大ニ内閣ノ組織ヲ改メ諸省大臣ヲシテ天皇ニ奉對シ各其ノ責ニ當ラシメ統フルニ内閣總理大臣ヲ以テシ一ハ以テ各大臣ノ職權ヲ重クシ擔任スル所ヲ知ラシメ二ハ以テ内閣ノ統一ヲ保チ多岐分裂ノ弊無ラシメタリ

歐洲ノ學者大臣ノ責任ヲ論スル者其ノ說一ナラスシテ各國ノ制

度亦各々越ヲ異ニス或ハ政事ノ責ノ爲ニ特ニ糾彈ノ法ヲ設ケ下院告訴シテ上院之ヲ裁斷スルアリ國英或ハ大審院又ハ特ニ設ケタル政事法院ニ委ヌルニ裁斷ノ權ヲ以テスルアリ白國ハ下院告訴ハ兩院告訴シ特置政事法院主トシテ政事罪ヲ裁斷シ併セテ刑事罪ヲ裁斷ス普國ハ憲法ニ正條アリテ而シテ糾彈斷罪ノ別法未タ之ヲ實行セス以テ或ハ政事ノ責ヲ以テ刑事ト分離シ裁決ノ結果ハ罷免剝職ニ止マルトスルアリ米國及巴威里千或ハ謀反贓賄濫費及違犯憲法ノ類ヲ指定シ特ニ大臣ノ責トスルアリ米普補及佛千八百十四年ノ憲法〇白耳義ノ國會ハ大或ハ君ニ對スルノ責任臣責任ノ刑名ヲ指定スルノ非ヲ論シタリ或ハ君ニ對スルノ責任トシ和蘭ノ一宰相ハ予ハ君主ニ對シ責任アリ或ハ人民即チ議院ニ對スルノ責任トス佛白補等ノ國ノ憲法ハ國王ノ命令ハ大臣ノ總テ之ヲ論スルニ憲法上ノ疑義ニシテ未タ一定ノ論決ヲ經サルコト未タ大臣責任ノ條ヨリ甚シキハアラサルナリ蓋之ヲ正理ニ

酌ミ之ヲ事情ニ考フルニ大臣ハ憲法ニ依リ輔弼ノ重局ニ當リ行
政上ノ強大ナル權柄ヲ掌有シ獨獎順贊襄ノ職ニ在ルノミナラス
又匡救矯正ノ任ニ居ル宜ク躬ヲ以テ責ニ任スヘキナリ若大臣ニ
シテ責ニ任スルノ義ナカラシメハ行政ノ權力ハ容易ニ法律ノ外
ニ踰越スルコトヲ得法律ハ徒ニ空文タルニ歸セムトス故ニ大臣
ノ責任ハ憲法及法律ノ支柱タル所以ナリ但シ大臣ノ責ハ其ノ執
ル所ノ政務ニ屬ス而シテ刑事ノ責ニ非サルナリ故ニ大臣其ノ職
ヲ愆ルトキハ其ノ責ヲ裁制スル者專ラ一國ノ主權者ニ屬セサル
ヘカラス唯之ヲ任スル者能之ヲ黜クヘシ大臣ヲ任シ又之ヲ黜ケ
又之ヲ懲罰スル者人主ニ非スシテ孰カ敢テ此ニ預ラム乎憲法既
ニ大臣ノ任免ヲ以テ君主ノ大權ニ屬シタリ其ノ大臣責任ノ裁制
ヲ以テ之ヲ議院ニ屬セサルハ固ヨリ當然ノ結果トス但シ議員ハ

質問ニ由リ公衆ノ前ニ大臣ノ答辯ヲ求ムルコトヲ得ヘク議院ハ
君主ニ奏上シテ意見ヲ陳疏スルコトヲ得ヘク而シテ君主ノ材能
ヲ器用スルハ憲法上其ノ任意ニ屬スト雖衆心ノ嚮フ所ハ亦其ノ
採酌ノ一ニ洩レサルコト知ルヘキトキハ此レ亦間接ニ大臣ノ責
ヲ問フ者ト謂フコトヲ得ヘシ故ニ我カ憲法ハ左ノ結論ヲ取ル者
ナリ第一大臣ハ其ノ固有職務ナル輔弼ノ責ニ任ス而シテ君主ニ
代リ責ニ任スルニ非サルナリ第二大臣ハ君主ニ對シ直接ニ責任
ヲ負ヒ又人民ニ對シ間接ニ責任ヲ負フ者ナリ第三大臣ノ責ヲ裁
判スル者ハ君主ニシテ人民ニ非サルナリ何トナレハ君主ハ國ノ
主權ヲ有スレハナリ第四大臣ノ責任ハ政務上ノ責ニシテ刑事及
民事ノ責ト相關涉スルコトナク又相牴觸シ及乘除スルコトナカ
ルヘキナリ而シテ刑事民事ノ訴ハ之ヲ通常裁判所ニ付シ行政職

務ノ訴ハ之ヲ行政裁判所ニ付スヘキノ外政務責任ハ君主ニ由リ懲罰ノ處分ニ付セラルヘキナリ

内閣總理大臣ハ機務ヲ奏宣シ旨ヲ承ケテ大政ノ方向ヲ指示シ各部統督セサル所ナシ職掌既ニ廣ク責任從テ重カラサルコトヲ得ス各省大臣ニ至テハ其ノ主任ノ事務ニ就キ各別ニ其ノ責ニ任スル者ニシテ連帶ノ責任アルニ非ス蓋總理大臣各省大臣ハ均ク天皇ノ選任スル所ニシテ各相ノ進退ハ一ニ勅旨ニ由リ首相既ニ各相ヲ左右スルコト能ハス各相亦首相ニ繫屬スルコトヲ得サレハナリ彼ノ或國ニ於テ内閣ヲ以テ團結ノ一体トナシ大臣ハ各個ノ資格ヲ以テ參政スルニ非サル者トシ連帶責任ノ一點ニ偏傾スルカ如キハ其ノ弊ハ或ハ黨援聯結ノ力遂ニ以テ天皇ノ大權ヲ左右スルニ至ラムトス此レ我カ憲法ノ取ル所ニ非サルナリ若夫レ國

ノ内外ノ大事ニ至テハ政府ノ全局ニ關係シ各部ノ專任スル所ニ非ス而シテ謀猷措畫必各大臣ノ協同ニ依リ互相推諉スルコトヲ得ス此ノ時ニ當テ各大臣ヲ舉ケテ全體責任ノ位置ヲ取ラサルヘカラサルハ固ヨリ其ノ本分ナリ

大臣ノ副署ハ左ノ二様ノ効果ヲ生ス一ニ法律勅令及其ノ他國事ニ係ル詔勅ハ大臣ノ副署ニ依テ始メテ實施ノ力ヲ得大臣ノ副署ナキ者ハ從テ詔命ノ効ナク外ニ付シテ宣下スルモ所司ノ官吏之ヲ奉行スルコトヲ得サルナリ二ニ大臣ノ副署ハ大臣擔當ノ權ト責任ノ義ヲ表示スル者ナリ蓋國務大臣ハ内外ヲ貫流スル王命ノ溝渠タリ而シテ副署ニ依テ其ノ義ヲ昭明ニスルナリ但シ大臣政事ノ責任ハ獨法律ヲ以テ之ヲ論スヘカラス又道義ノ關ル所タラサルヘカラス法律ノ限界ハ大臣ヲ待ツ爲ノ單一ナル範圍トスル

ニ足ラサルナリ故ニ朝廷ノ失政ハ署名ノ大臣其ノ責ヲ逃レサル
 コト固ヨリ論ナキノミナラス即チ議ニ預カルノ大臣ハ署名セサ
 ルモ亦其ノ過ヲ負ハサルコトヲ得サルヘシ若專ラ署名ノ有無ヲ
 以テ責任ノ在ル所ヲ判セムト欲セハ形式ニ拘リ事情ニ戻ル者タ
 ルコトヲ免レヌ故ニ副署ハ以テ大臣ノ責任ヲ表示スヘキモ副署
 ニ依テ始メテ責任ヲ生スルニ非サルナリ
 太寶公式令ニ據ルニ詔書案成リ御畫日訖テ中務卿ニ給フ其ノ御
 畫日アル者ハ之ヲ中務省ニ留メテ案ト爲シ別ニ一通ヲ寫シ中務
 卿宣中務大輔奉中務少輔行ト署シ太政官ニ送ル太政官ニ於テ太
 政大臣左右大臣及大納言四人署名シテ覆奏シ外ニ付シテ施行セ
 ムト請フ乃御畫可シ其ノ御畫可アル者ハ官ニ留メテ案ト爲シ更
 ニ謄寫シテ天下ニ布告ス蓋審署ノ式尤慎重ヲ加ヘタリ維新ノ後

明治四年七月勅書ニ加名鈐印スルヲ以テ太政大臣ノ任トス但シ
 宣布ノ詔多クハ奉勅ノ署名ナキハ草創ノ際未タ一定ニ至ラサリ
 シナリ十四年十一月各省卿其ノ主管ノ事務ニ屬スル法律規則及
 布達ニ署名スルノ制ヲ定ム十九年一月副署ノ式ヲ定ム公文施行
 ノ法是ニ至テ蓋大ニ備ハレリ

**第五十六條 樞密顧問ハ樞密院官制ノ定ムル所ニ依
 リ天皇ノ諮詢ニ應ヘ重要ノ國務ヲ審議ス**

恭テ按スルニ天皇ハ既ニ内閣ニ倚テ以テ行政ノ揆務ヲ總持シ又
 樞密顧問ヲ設ケテ以テ詢謀ノ府トシ聰明ヲ裨補シテ偏聽ナキヲ
 期セムトス蓋内閣大臣ハ内外ノ局ニ當リ敏給捷活以テ事機ニ應
 ス而シテ優裕靜暇思ヲ潜メ慮ヲ凝シ之ヲ今古ニ考ヘ之ヲ學理ニ
 照シ永圖ヲ籌畫シ制作ニ從事スルニ至テハ別ニ專局ヲ設ケ練達

學識其ノ人ヲ得テ之ニ倚任セサルヘカラス此レ乃他ノ人事ト均ク一般ノ常則ニ從ヒ二種ノ要素各其ノ業ヲ分ツナリ蓋君主ハ其ノ天職ヲ行フニ當リ謀リテ而シテ後之ヲ斷セムトス即チ樞密顧問ノ設置ニ内閣ト俱ニ憲法上至高ノ輔翼ヲラサルコトヲ得ス若夫レ樞密顧問ニシテ聖聰ヲ啓沃シ偏セス黨セス而シテ又能ク問疑ヲ剖解スルノ補益ヲ爲スニ至テハ果シテ憲法上ノ機關タルニ負カサルヘク且大ニシテハ緊急命令又ハ戒嚴令ノ發布ニ當リ小ニシテハ會計上法規ノ外ニ臨時處分ノ必要アルノ類之ヲ諮詢シテ然後ニ決行スルハ即チ爲政ノ慎重ヲ加フル所以ニシテ此ノ場合ニ於テハ樞密顧問ハ憲法又ハ法律ノ一ノ屏翰タルノ任ニ居ルヘキナリ樞密顧問ノ職是ノ如キノ重キナリ故ニ凡ソ勅令ニシテ顧問ノ議ヲ經ル者ハ其ノ上諭ニ於テ之ヲ宣言スルヲ例式トス但

シ樞密顧問ハ至尊ノ諮詢アルヲ待テ始メテ審議スルコトヲ得而シテ其ノ意見ノ採擇ハ亦皆一ニ至尊ノ聖裁ニ由ルノミ
樞密顧問ノ職守ハ可否ヲ獻替シ必忠誠ヲ以テシ隱避スル所ナク而シテ審議ノ事ハ細大トナク至尊ノ特別ノ許可ヲ得ルニ非サレハ之ヲ公洩スルコトヲ得ス蓋樞機密勿ノ府ハ人臣外ニ向テ譽ヲ求ムルノ地ニ非サルナリ

第五章 司法

司法權ハ法律ノ定ムル所ニ依遵シ正理公道ヲ以テ臣民權利ノ侵害ヲ回復シ及刑罰ヲ判斷スルノ職司トス古ヘ政治簡朴ナルニ當テ各國政廳ノ設未タ司法行政ノ別アラサリシハ史籍ノ證明スル所ナリ其ノ後文化彌進ミ人事益繁キニ至テ始メテ司法ト行政ト

ノ間ニ職司ヲ分割シ其ノ構制ヲ殊ニシ其ノ畛域ヲ慎ミ互ニ相干
涉セス以テ立憲ノ政體ニ至大ノ進歩ヲ成サシメタリ

第五十七條 司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁

判所之ヲ行フ

裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

行政ト司法ト兩權ノ區別ヲ明ニスル爲ニ茲ニ之ヲ約說スヘシ曰
行政ハ法律ヲ執行シ又ハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ人民ノ幸福ヲ
増進スル爲ニ便宜ノ經理及處分ヲ爲ス者ナリ司法ハ權利ノ侵害
ニ對シ法律ノ規準ニ依リ之ヲ判斷スル者ナリ司法ニ在テハ專ラ
法律ニ從屬シ便益ヲ酌量セス行政ニ在テハ社會ノ活動ニ從ヒ便
益ト必要トニ依リ法律ハ其ノ範圍ヲ限制シテ區域ノ外ニ濫越ス
ルヲ防クニ止マルノミ行政司法ノ兩權其ノ性質ヲ殊ニスルコト

此ノ如シ故ニ行政ノ官アリテ司法ノ職ヲ分ツコトナカリセハ各
個人民ノ權利ハ社會ノ便益ノ爲ニ隨時移動スルコトヲ免レスシ
テ而シテ其ノ流弊ハ遂ニ權勢威力ノ侵犯ヲ被ルニ至ラントス
唯然リ故ニ裁判ハ必法律ニ依ル法律ハ裁判ノ單純ノ準繩タリ而
シテ又必裁判所ニ由リ之ヲ行フ但シ君主ハ正理ノ源泉ニシテ司
法ノ權亦主權ノ發動スル光線ノ一タルニ外ナラス故ニ裁判ハ必
天皇ノ名ニ於テ宣告シ以テ至尊ノ大權ヲ代表ス

裁判所ノ構成ハ必法律ヲ以テ之ヲ定メ行政ノ組織ト別異スル所
アラシム而シテ司法ノ官ハ實ニ法律ノ基址ニ立チ不羈ノ地位ヲ
有ツ者タリ

我カ中古ノ制刑部省ノ設ハ他ノ各省ト俱ニ太政官ニ隸屬シ而シ
テ刑部卿ハ鞠獄^ク定刑^ツ名決^シ疑讞^ヲ良賤^ノ名籍囚禁^ノ債負ノ事ヲ掌ル判事

ハ刑部卿ニ屬シ案覆鞫狀斷定刑名判諸爭訟事ヲ掌ル是レ民刑二
 事ヲ併セテ之ヲ一省ニ總ヘタリ武門ノ盛ナルニ至テ大柄一タヒ
 移リ檢斷ノ權檢非違使ニ歸シ武斷ヲ以テ政ヲ爲シ封建ノ際概子
 其ノ陋習ヲ因襲シ越訴ヲ以テ大禁ト爲ルニ至レリ維新ノ初刑法
 官ヲ置キ司法ノ權復天皇ノ統攬ニ歸ス四年始メテ東京裁判所ヲ
 置ク裁判ノ爲ニ專廳ヲ設クルハ此レヲ以テ始トス是歲大藏省ノ
 聽訟事務ヲ以テ改メテ司法省ニ屬ス五年開市場裁判所ヲ設ク嗣
 テ司法裁判府縣裁判區裁判ノ各等裁判ヲ置キ始メテ控訴覆審ヲ
 許ス八年大審院ヲ置キ以テ法憲ノ統一ヲ主持スルノ所トシ司法
 卿ノ職制ヲ定メテ檢務ヲ統理シ裁判ニ干預セサル者トス是ヨリ
 後漸次釐革スル所アリ以テ裁判獨立ヲ期スルノ針路ヲ取リタリ
 是ヲ司法事務沿革ノ概略トス

歐洲前世紀ノ末ニ行ハレタル三權分立ノ說ハ既ニ學理上及實際
 上ニ排斥セラレタリ而シテ司法權ハ行政權ノ一支派トシテ均ク
 君主ノ統攬スル所ニ屬シ立法權ニ對シテ之ヲ謂フトキハ行政權
 ハ概括ノ意義ヲ有チ司法ハ行政ノ一部タルニ過キス更ニ行政權
 中ニ就キ職司ノ分派ヲ論スルトキハ又司法ト行政ト各其ノ一部
 ヲ占ムル者タリ此レ蓋近時國法學者ノ普通ニ是認スル所ニシテ
 茲ニ詳論スルヲ假ラサル者ナリ但シ君主ハ裁判官ヲ任命シ裁判
 所ハ君主ノ名義ヲ以テ裁判ヲ宣告スルニ拘ラス君主自ラ裁判ヲ
 施行セス不羈ノ裁判所ヲシテ專ラ法律ニ依遵シ行政威權ノ外ニ
 之ヲ施行セシム是ヲ司法權ノ獨立トス此レ乃三權分立ノ說ニ依
 ルニ非スシテ仍不易ノ大則タルコトヲ失ハス

第五十八條 裁判官ハ法律ニ依リ定メタル資格ヲ具

フル者ヲ以テ之ニ任ス

裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其ノ職ヲ免セラル、コトナシ

懲戒ノ條規ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

裁判官ハ法律ヲ主持シ人民ノ上ニ衡平ノ柄ヲ執ラムトス故ニ專科ノ學識及經驗ハ裁判官タルノ要件タリ而シテ臣民ノ倚テ以テ其ノ權利財産ヲ託スルハ亦實ニ其ノ法律上正當ノ資格アルヲ頼マスムハアラス故ニ本條第一項ハ法律ヲ以テ其ノ資格ヲ定ムヘキコトヲ保明シタリ

裁判ノ公正ヲ保タムト欲セハ裁判官ヲシテ威權ノ干涉ヲ離レ不羈ノ地ニ立チ勢位ノ得失ト政論ノ冷熱ヲ以テ牽束ヲ受ルコトナカラシムヘシ故ニ裁判官ハ刑法又ハ懲戒裁判ノ判決ニ由リ罷免

セラル、ヲ除ク外終身其ノ職ニ在ル者トス而シテ裁判官ノ懲戒條規ハ又法律ヲ以テ之ヲ定メ裁判所ノ判決ヲ以テ之ヲ行ヒ行政長官ノ干涉スル所トナラス此レ憲法ニ於テ特ニ裁判官ノ獨立ヲ保明スル所ナリ

其ノ他停職非職轉任老退ニ於ケル詳細ハ總テ法律ノ掲クル所タリ

第五十九條 裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開ス但シ安寧

秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルトキハ法律ニ依リ又ハ裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得

裁判ヲ公開シ公衆ノ前ニ於テ對理口審スルハ人民ノ權利ニ對シ尤効力アルノ保障タリ裁判官ヲシテ自ラ其ノ義務ヲ尊重シ正理

公道ノ代表ト爲ラシムルハ蓋亦公開ノ助ニ倚ル者少シトセサルナリ我カ國從來白洲裁判ノ習久シク慣用スル所タリシニ明治八年以來始メテ對審判決ノ公開ヲ許シタルハ實ニ司法上ノ一大進歩タリ

刑事ノ審理ニ豫審アリ對審アリ此ニ對審ト謂ヘハ豫審ハ其ノ中ニ在ラサルナリ安寧秩序ヲ害ストハ内亂外患ニ關ル罪及嘯聚教唆ノ類人心ヲ煽起刺衝スル者ヲ謂フナリ風俗ヲ害ストハ内行ノ事之ヲ公衆ノ視聽ニ暴ストキハ醜辱ヲ流シ風教ヲ傷ル者ヲ謂フナリ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アリト謂ヘルハ其ノ果シテ害アルト然ラサルトヲ判定スルハ專ラ裁判所ノ所見ニ任スルナリ法律ニ依ルト謂ヘルハ治罪法訴訟法ノ明文ニ依ルナリ裁判所ノ決議ヲ以テト謂ヘルハ法律ノ明文ナシト雖亦裁判所ノ議ヲ以

テ之ヲ決スルコトヲ得ルナリ對審ノ公開ヲ停ムト謂フトキハ判決宣告ハ仍必之ヲ公開スルナリ

第六十條 特別裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

陸海軍人ノ軍法會議ニ屬スルハ即チ普通ナル司法裁判所ノ外ニ於ケル特別裁判所ノ管轄ニ屬スルモノトス其ノ他商工ノ爲ニ商工裁判所ヲ設クルノ必要アルニ至ラハ亦普通ノ民事裁判ノ外ニ特別ノ管轄ニ屬スルモノトス凡ソ此レ皆法律ヲ以テ之ヲ規定スヘクシテ命令ヲ以テ法律ノ除外例ヲ設クルコトヲ得ス若夫レ法律ノ外ニ於テ非常裁判ヲ設ケ行政ノ勢威ヲ以テ司法權ヲ侵蝕シ人民ノ爲ニ司直ノ府ヲ褫奪スルカ如キハ憲法ノ之ヲ認メサル所ナリ

第六十一條 行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタリトスルノ訴訟ニシテ別ニ法律ヲ以テ定メタル行政裁判所ノ裁判ニ屬スヘキモノハ司法裁判所ニ於テ受理スルノ限ニ在ラス

行政裁判ハ行政處分ニ對スルノ訟ヲ裁判スルノ謂ナリ蓋法律既ニ臣民ノ權利ニ向テ一定ノ限界ヲ爲シ以テ之ヲ安固ナラシメタリ而シテ政治ノ機關タル者亦之ニ服從セサルコトヲ得ス故ニ行政官廳ニシテ其ノ職務上ノ處置ニ依リ法律ニ違ヒ又ハ職權ヲ超エ臣民ノ權利ヲ傷害スルコトアルニ當リテハ行政裁判所ノ斷定ヲ受クルコトヲ免レス

抑訴訟ヲ判定スルハ司法裁判所ノ職任トス而シテ別ニ行政裁判所アルハ何ツヤ司法裁判所ハ民法上ノ爭訟ヲ判定スルヲ以テ當

然ノ職トシ而シテ憲法及法律ヲ以テ委任サレタル行政官ノ處分ヲ取消スノ權力ヲ有セサルナリ何トナレハ司法權ノ獨立ヲ要スルカ如ク行政權モ亦司法權ニ對シ均ク其ノ獨立ヲ要スレハナリ若行政權ノ處置ニシテ司法權ノ監督ヲ受ケ裁判所ヲシテ行政ノ當否ヲ判定取舍スルノ任ニ居ラシメハ即チ行政官ハ正ニ司法官ニ隸屬スル者タルコトヲ免レス而シテ社會ノ便益ト人民ノ幸福ヲ便宜ニ經理スルノ餘地ヲ失フヘキナリ行政官ノ措置ハ其ノ職務ニ依リ憲法上ノ責任ヲ有シ從テ其ノ措置ニ抗拒スル障害ヲ除去シ及其ノ措置ニ由リ起ル所ノ訴訟ヲ裁定スルノ權ヲ有スヘキハ固ヨリ當然ニシテ若此ノ裁定ノ權ヲ有セサルトキハ行政ノ効力ハ麻痺消盡シテ憲法上ノ責任ヲ盡スニ由ナカルヘキナリ此レ司法裁判ノ外ニ行政裁判ノ設ヲ要スル所以ノ一ナリ行政ノ處分

ハ以テ公益ヲ保持セムトス故ニ時アリテ公益ノ爲ニ私益ヲ枉ルコトアルハ亦事宜ノ必要ニ出ル者アリ而シテ行政ノ事宜ハ司法官ノ通常慣熟セサル所ニシテ之ヲ其ノ判決ニ任スルハ危道タルコトヲ免レス故ニ行政ノ訴訟ハ必行政ノ事務ニ密切練達ナル人ヲ得テ以テ之ヲ聽理セサルコトヲ得ス此レ司法裁判ノ外ニ行政裁判ノ設ヲ要スル所以ノ二ナリ但シ行政裁判所ノ構成ハ亦必法律ヲ以テ之ヲ定ムルヲ要スルコト司法裁判所ト異ナルコトナキナリ

明治五年司法省第四十六號達ハ凡ソ地方官ヲ訟フル者皆裁判所ニ於テセシメタリシニ地方官吏ヲ訟フルノ文書法廷ニ蝟集シ俄ニ司法官行政ヲ牽制スルノ弊端ヲ見ルニ至レリ七年第二十四號ノ達ハ始メテ行政裁判ノ名稱ヲ設ケ地方官ヲ訟フル者ハ司法官

ニ於テ具狀シテ太政官ニ申稟セシム是レ姑ク一時ノ弊ヲ救フニ過キスシテ而シテ行政裁判所ノ構成ハ仍之ヲ將來ニ期シタリ本條ニ行政官廳ノ違法ノ處分ト謂フトキハ法律又ハ正當ナル職權ニ依ルノ處分ハ之ヲ訴フルコトヲ得サルコト知ルヘキナリ例之ハ公益ノ爲ニ所有ヲ制限スルノ法律ニ依ル處分ヲ受クル者ハ之ヲ訴フルコトヲ得サルナリ本條ニ又權利ヲ傷害セラレタリトスル者ト謂フトキハ單ニ利益ヲ傷害セラレタリトスル者ハ請願ノ自由アリテ行政訴訟ノ權ナキコト知ルヘキナリ例之ハ鐵道ヲ開クノ工事アリ行政官ハ定規ノ手續ニ遵由シテ其ノ線路ヲ定メタルニ地方ノ人民他ノ線路ヲ取ルノ利益アリトシテ之ヲ争フ者アラム此レ其ノ争ハ單ニ利益ニ屬シテ權利ニ屬セサルカ故ニ之ヲ當該官廳ニ請願スルコトヲ得ルモ之ヲ行政裁判ニ訴フルコト

ヲ得サルナリ

第六章 會計

會計ハ國家ノ歲出歲入ヲ整理スル所ノ行政ノ要部ニシテ臣民ノ生計ト密切ノ關鍵ヲ爲ス者ナリ故ニ憲法ハ殊ニ之ヲ慎重シテ帝國議會ノ協贊及監督ノ權限ヲ明確ニス

第六十二條 新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ
但シ報償ニ屬スル行政上ノ手数料及其ノ他ノ收納金ハ前項ノ限ニ在ラス
國債ヲ起シ及豫算ニ定メタルモノヲ除ク外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スハ帝國議會ノ協贊ヲ經

ヘシ

新ニ租稅ヲ課スルニ當テ議會ノ協贊ヲ必要トシ之ヲ政府ノ專行ニ任セサルハ立憲政ノ一大美果トシテ直接ニ臣民ノ幸福ヲ保護スル者ナリ蓋既ニ定マレル現稅ノ外ニ新ニ徵額ヲ起シ及稅率ヲ變更スルニ當テ適當ノ程度ヲ決定スルハ專ラ議會ノ公論ニ倚賴セサルコトヲ得ス若此ノ有効ナル憲法上ノ防範ナカリセハ臣民ノ富資ハ其ノ安固ヲ保證スルコト能ハサラムトス
第二項報償ニ屬スル行政上ノ手数料及其ノ他ノ收納金トハ各個人ノ要求ニ由リ又ハ各個人ニ利益ヲ予フル爲ノ政府ノ事業又ハ事務ニ對シ上納セシムル者ニシテ普通ノ義務トシテ賦課スル所ノ租稅ト其ノ性質ヲ殊ニスル者ヲ謂フ即鐵道切符料倉庫料學校授業料ノ類ハ行政命令ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得ヘク必シモ法

律ニ依ルヘキノ限ニ在ラサル者トス但シ行政上ノ手数料ト謂フ
 トキハ司法上ノ手数料ト其ノ類ヲ異ニスルコト知ルヘキナリ
 第三項國債ハ將來ニ國庫ノ負擔義務ヲ約束スル者ナリ故ニ新ニ
 國債ヲ起スニハ必議會ノ協賛ヲ取ラサルヘカラス豫算ノ効力ハ
 一ノ會計年度ニ限ル故ニ豫算ノ外ニ涉リ將來ニ國庫ノ負擔タル
 ヘキ補助保證及其ノ他ノ契約ヲ爲スハ皆國債ニ同シク議會ノ協
 賛ヲ要スルナリ

第六十三條 現行ノ租稅ハ更ニ法律ヲ以テ之ヲ改メ

サル限ハ舊ニ依リ之ヲ徵收ス

前條已ニ新ニ課スルノ租稅ハ必法律ヲ以テ之ヲ定ムヘキコトヲ
 保明シタリ而シテ本條ハ現行ノ租稅ハ嗣後更ニ新定ノ法律ヲ以
 テ之ヲ改正スルノ事アラサル限ハ總テ從前ノ舊制及舊稅率ニ依

遵シテ之ヲ徵收スヘキコトヲ定ム蓋國家ハ其ノ必要ノ經費ニ供
 スル爲ニ一定ノ歲入アルヲ要ス故ニ現行租稅ニ屬スル國家ノ歲
 入ハ憲法ニ由テ移動セサルノミナラス憲法ハ更ニ明文ヲ以テ之
 ヲ確定シタリ

(附記) 之ヲ歐洲各國ニ參考スルニ毎一年ニ徵稅ノ全部ヲ議會
 ノ議ニ付スルハ其ノ實多クハ無用ノ形式タルニ拘ラス一般ニ
 理論ノ貴重スル所トナリ或國ノ憲法ハ租稅議決ノ効力ハ一年
 ニ限り明文ヲ以テ之ヲ更新スルニ非サレハ一年以外ニ存立セ
 サルコトヲ掲ケタリ今其ノ由テ來ル所ヲ推究スルニ其ノ一ハ
 歐洲中古各國ノ君家ハ家事ヲ以テ國務ト相混シ家產ヲ以テ國
 費ニ充テ私邑ヲ封殖シテ其ノ租入ヲ取り以テ文武ノ需要ニ供
 給シタリシニ其ノ後常備兵ノ設軍需鉅大ナルト及宮室園囿ノ

費トニ因リ内庫缺乏スルニ至リ國中ノ豪族ヲ召集シ其ノ貢
 獻ヲ徴シ以テ歳費ヲ補給スルノ方法ヲ取リタリ此レ乃歐洲各
 國ニ於ケル租税ノ起源ハ實ニ人民ノ貢獻寄附タルニ過キス瓦
 聖憲法第九條ニ王室財産ノ收入ニシテ足ラサルトキハ租
 税ヲ徴收シテ國費ヲ支給スヘシト云ヘルハ其ノ一證ナリ故
 ニ國民ハ王家饜クコト無キノ徴求ヲ防制スル爲ニ政府ヲシテ
 其ノ必要ヲ證明シ以テ國民ノ承諾ヲ經ルヲ要セシメ承諾ナケ
 レハ租税ナシト謂ヘルノ約束ヲ以テ國憲ノ大則トスルニ至レ
 リ此レ歷史上ノ沿革ヨリ來ル者ナリ其ノ二ハ主權在民ノ主義
 ニ據リ國民ハ全部ノ租税ニ對シ專ラ自由承諾ノ權ヲ有シ國民
 ニシテ租税ヲ承諾セサルトキハ政府ハ其ノ存立ヲ失フヲ以テ
 自然ノ結果トスヘシト謂ヘル極端ノ論ヨリ來ル者ナリ抑此ノ
 歷史上ノ遺傳ト架空ノ理論トハ兩々抱合シテ以テ各國ノ憲法

ノ上ニ強大ナル勢力ヲ有シ牢固ニシテ破ルヘカラサルニ至レ
 ルニ拘ラス願ミテ其ノ實際如何ト問フニ至テハ英國ニ在テハ
 地租、關稅、物產稅、印紙稅ハ常久ニ之ヲ徴收シ固定資金ニ拂ヒ込
 ム者計ソ歲入ノ全部七分ノ六ニ居ルダイシ氏ニ據ル〇千八
 万ニ歲入全部八千七百二十万五千八百八十四年ノ統計ニ據ル
 万磅ハ毎年議決ニ依リ徴收スル者トシ其ノ七千三百萬磅餘ハ
 經常法ニ依リ此レ乃昔日ノ因襲ト及法律ノ効力ニ依リ經常不動
 ノ歲入トシ毎年ニ議ニ付スルコトヲ要セサル者ナリ普國ハ憲
 法第九條ニ依リ現稅ハ舊ニ依ルノ條規ヲ實行シタリ彼ノ理
 論ノ巢窟タル所ノ佛國ニ於テモ其ノ著述者ノ言ニ據ルニ毎年
 租税ヲ議スルノ原則ハ依違ノ間ニ之ヲ施行スルニ過キスボ
 氏財政學第三版第二卷而シテ其ノ殊ニ毎年討議シテ以テ稅率
 七十五頁及七十六頁ヲ定ムル所ノ直稅ノ如キモ亦既ニ其ノ不便ヲ論スル者アリ蓋

之ヲ立國ノ原理ニ求ムルニ國家ノ成立ハ永久ニシテ假設ノ物ニ非ス故ニ國家其ノ永久ノ存立ヲ保ツ爲ノ經費ノ大局ハ毎一年ニ移動ヲ爲スヘキニ非ス而シテ何人モ及何等ノ機關モ必要經費ノ源ヲ杜塞シテ以テ國家ノ成立ヲ戕害スルノ權利ナカルヘキナリ彼ノ歐洲各國ノ中古ノ制度ノ如キハ國家常存ノ資源ハ王室ノ財産ニ在テ租稅ニ在ラス故ニ人民ハ隨意ニ納稅ノ諾否ヲ毎一年ニ限ルコトヲ得ヘキモ近世國家ノ原理漸ク論定ヲ得ルニ至テハ國家ノ經費ハ租稅ノ正供ニ資ルヘク而シテ殊ニ國家ノ存立ニ必要ナル經常稅ノ徵收ハ專ラ國權ニ據ル者ニシテ人民ノ隨意ナル獻饋ニ因ル者ニ非サルコト既ニ疑ヲ容ルヘキノ餘地アルコトナキナリ

我カ國上古ヨリ國家ノ經費ハ之ヲ租稅ニ取り中古三稅租庸調ノ

法ヲ定メ國民ヲシテ均ク納稅ノ義務アラシメ正供ノ外ニ徵求ノ路ヲ開クコトヲ假ラス現在各種稅法皆常經アリテ毎年移動ノ方法ニ由ル者アルコトナシ今憲法ニ於テ現行稅ヲ定メテ經常稅トナシ其ノ將來ニ變更アルヲ除ク外總テ舊ニ依リ徵收セシムルハ之ヲ國體ニ原ツケ之ヲ理勢ニ酌ミ紛更ヲ容レサル者ナリ

第六十四條 國家ノ歲出歲入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシ

豫算ノ款項ニ超過シ又ハ豫算ノ外ニ生シタル支出アルトキハ後日帝國議會ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

豫算ハ以テ會計年度ノ爲ニ歲出歲入ヲ豫定シ行政機關ヲシテ其ノ制限ニ準據セシメムトス國家ノ經費ニ豫算ヲ設クルハ財政ヲ

整理スルノ初步發軔タリ而シテ豫算ヲ議會ニ付シ其ノ協賛ヲ經及豫算ニ依リ支費スルノ後仍超過支出及豫算外ノ支出ヲ以テ議會ノ監督ニ付シ事後承諾ヲ求ムルニ至テハ之ヲ立憲制ノ成果トスルニ足ル者ナリ

豫算ノ事太實ノ令ニ見ル所ナシ德川氏ノ時各官衙ニ定額アリテ而シテ豫算ナシ維新ノ後仍舊慣ニ因リ國庫又ハ各廳ニ於テ逐次出納スルニ止マル明治六年大藏省ニ於テ始メテ歲入出見込會計表ヲ作り太政大臣ニ呈出ス我カ政府ノ豫算ヲ以テ公文トスルハ此ヲ以テ始トス七年ニ又同年度ノ豫算會計表ヲ作り嗣後逐年ニ豫算ノ科目及様式ヲ改良シ十四年ニ會計法ヲ頒布スルニ至テ稍整頓ニ就キ十七年ニ歲入出豫算條規ヲ施行シ益々成緒ヲ見ルコトヲ得タリ十九年ニ勅令ヲ以テ豫算ヲ發布ス此ヲ式ニ依リ豫算ヲ

公布スルノ初トス而シテ豫算ノ制ハ實ニ會計上必要ノ準繩トナルニ至レリ本條ハ更ニ進ミテ豫算ヲ議會ニ付スルノ制ヲ取ラムトス蓋豫算ヲレテ正當明確ナラシメ又其ノ正當明確ナルコトヲ公衆ニ證明シ及行政官衙ヲレテ豫算ヲ遵守スルノ必然ノ義務アラシムルハ之ヲ議會ニ付スルヨリ最モ緊切ナル効力ヲ見ルニ若クハナカルヘシ

茲ニ辯明ヲ要スル者ハ各國ニ於テ豫算ヲ以テ一ノ法律ト認メタルコト是ナリ抑豫算ハ單ニ一年ニ向テ行政官ノ遵守スヘキ準繩ヲ定ムル者ナルニ過キス故ニ豫算ハ特別ノ性質ニ因リ議會ノ協賛ヲ要スル者ニレテ本然ノ法律ニ非サルナリ唯然リ故ニ法律ハ以テ豫算ノ上ニ前定ノ効力ヲ有スヘク而シテ豫算ハ以テ法律ヲ變更スルノ作用ヲ爲スコトヲ得ス豫算ヲ以テ法律ヲ變更スルハ

豫算議定權ノ適當ナル範圍ヲ越ユル者ナリ彼ノ各國ニ於テ豫算ヲ以テ法律ト稱ヘタルハ或ハ豫算ノ議定ヲ過重シテ議院無限ノ權トスルニ因リ又或ハ凡ソ議院ノ議ヲ經ル者ハ總テ法律ヲ以テ稱呼スルノ謬ヲ陷ムニ因ルニ過キス抑法律ハ必議會ノ議ヲ經ト謂フコトヲ得ヘシ而シテ議會ノ議ヲ經ル者ハ必法律ト名クト謂フコトヲ得サルナリ何トナレハ議會ノ承諾ヲ經ルモ其ノ特別ノ一事ニ限り普通ニ遵由セシムルノ條則ニ非サル者ハ固ヨリ法律ト其ノ性質ヲ殊ニスレハナリ

第二項歳出ノ豫算ノ款項ニ超過スル者アルカ又ハ豫算ノ外ニ生シタル費用ノ支出ヲナシタルトキハ議會ノ事後承諾ヲ求ムルハ政府已ムヲ得サルノ處分ニ於テ仍議會ノ監督ヲ要スルナリ蓋精確ナル豫算ハ過剩アルヨリモ寧不足アルハ往々避クヘカラサ

ルノ事實ナリ各大臣ハ豫算ニ拘束セラレテ既ニ不要トナリタル豫定ノ政費ヲ支出スルノ責ヲ有セサルカ如ク已ムヲ得サルノ必要ニ由リ生シタル豫算超過及豫算ノ外ノ支出ヲ施行スルモ亦憲法ノ禁スル所ニ非ス何トナレハ大臣ノ職務ハ獨豫算ニ關ル國會ノ協賛ニ由リ指定セララル、ノミニ非スシテ寧至高ノ模範タル憲法及法律ニ依リ指定セララル、者ナレハナリ故ニ憲法上ノ權利又ハ法律上ノ義務ヲ履踐スル爲ニ必要ナル供需アルニ際シ大臣ハ豫算ニ不足ヲ生シ又ハ豫算中ニ正條ナキノ故ヲ以テ其ノ政務ヲ廢スルコトヲ得ス而シテ已ムヲ得サルノ超過及豫算外ノ支出ハ仍適法ノ事タルコトヲ失ハサルナリ抑適法ノ事ニシテ猶事後承諾ヲ要スルハ何ソ乎行政ノ必要ト立法ノ監督トヲシテ兩々並行互相調和セシムル所以ナリ蓋國家モ亦一個人ト同ク濫費冗出ノ

情弊アルハ免レサルノ弱點タルカ故ニ豫算ノ議決款項ヲ細密ニ履行スルハ此ヲ以テ政府ノ重要義務トセサルコトヲ得ス英國千九百四十九年三月三十日ノ衆議院ノ議決ニ云國會議費ノ科額ヲ決定シタルトキハ其ノ經費ヲシテ其ノ目的ノ爲ニ委任セラレタル額ニ超過セザラシムルコトニ注意ナリトハ而シテ已ムヲ得サルノ超過責任及監督ニ當ル各省ノ義務ナリト若議會ニ於テ濫費違法ノ支出及豫算外支出アルハ異例ノ事トシ若議會ニ於テ濫費違法ノ情弊ヲ發見シ其ノ必要ナルコトヲ認メサルトキハ以テ法律上ノ爭議ヲ提起スルコトヲ得サルモ以テ政事上ノ問題ヲ媒介スルコトヲ得ヘシ但シ財政上政府ノ既ニ支出シタル費額及政府ノ爲ニ生シタル義務ニ付テハ其ノ結果ヲ變動スルコト能ハサルノミ豫算款項ノ超過ハ議會ニ於テ議決セル定額ヲ超エ支出シタルヲ謂フ豫算ノ外ニ生シタル支出トハ豫算ニ設ケタル款項ノ外ニ豫見セサルノ事項ノ爲ニ支出シタルヲ謂フ普國檢査院章程第十九條ニ云憲法院第四百九

出謂ヲ以テ豫算ノ超過トハ豫算ニ於テ各項ノ流用ヲ許シ此ノ外第九十九條ニ從テ豫算ノ確定シタル會計豫算ノ支出款項又ハ豫算超過ノ承認シタル特別豫算ノ各項ニ違ヘル多額ノ支出ヲ豫算超過トシ豫算外トシテ其ノ憲法第四百四條ノ兩議院ニ提出シテ其ノ豫算超過ヲ受クヘシ豫算外ノ支出ナリ

(附記) 豫算超過ノ支出ハ各國ノ會計ニ於テ實際ノ免レサル所

ナリ英國千八百八十五年收入支出監督條規トシテ議院ノ議決スル所ニ依ルニ毎年ノ決算ハ最後ニ下院ノ決算委員ニ於テ之ヲ審査シ各科目ニ付議決ノ金額ニ超過シタル支費アルトキハ立法ノ認可ヲ經ヘシト云ヘリゴックス氏ニ據ル氏ハ又其ノ豫算開製ノ當時ニ在リテハ十分餘裕アルカ如キモ實際ニ是レ蓋テ英國ノ事後承諾者ナリ普國ハ事後承諾ノ方法ヲ取リ而シテ憲法ニ之ヲ明言セリ伊國ハ半ハ現年度ニ於ケル豫算修正

ノ方法ヲ取り半ハ事後承諾ノ方法ヲ取レリ
 九年ノ法 佛國ハ豫算ニ定メタル經費ニシテ當然ノ理由ニ因リ不足ヲ生シタル者ハ補充費トシ豫見セサル事項又ハ豫算ニ定メタル事務ニシテ既定ノ區域ノ外ニ擴張スル者ハ非常費トシ補充費非常費ハ皆法律ヲ以テ之ヲ許可スヘキ者トシ國會閉會ノ場合ニ於テハ參議院ノ覆議ニ由リ內閣會議ヲ經命令ヲ以テ假ニ之ヲ許可シ而シテ其ノ命令ハ次回ノ國會ニ於テ承諾ヲ受クヘキ者トシタ
 一千八百七十八年法

第六十五條 豫算ハ前ニ衆議院ニ提出スヘシ

本條豫算議案ヲ以テ衆議院ニ最先ノ特權ヲ付シタリ蓋豫算ヲ議スルハ政府ノ財務ト國民ノ生計トヲ對照シ兩々願應シ豐儉ノ程度ヲ得セシムルヲ要ス此レ乃衆民ノ公選ニ依リ成立スル代議士

ノ職任ニ於テ尤緊切ナリトスル所ナリ

第六十六條 皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ將來増額ヲ要スル場合ヲ除ク外帝國議會ノ協賛ヲ要セス

第六十四條ニ豫算ハ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘキコトヲ定メタリ而シテ本條ハ皇室經費ノ爲ニ其ノ例外ヲ示ス者ナリ
 恭テ按スルニ皇室經費ハ天皇ノ尊嚴ヲ保ツ爲ニ缺クヘカラサルノ經費ヲ供給スル國庫最先ノ義務タリ其ノ使用ハ一ニ宮廷ノ事ニ係リ議會ノ問フ所ニ非ス從テ議會ノ承諾及検査ヲ要スルコトナカルヘキナリ皇室費額ヲ豫算及決算ニ記載スルハ支出總額ノ成分ヲ示ス者ニ過キスレテ之ヲ議會ノ議ニ付スルノ一款トナスニ非サルナリ而シテ其ノ將來ニ増額ヲ要スルニ當リ仍議會ノ協

贊ヲ要スルハ其ノ臣民ニ負擔セシムルノ租稅ト密切ナル關係ヲ有スルヲ以テ之ヲ衆議ニ詢ハムトスルナリ

第六十七條 憲法上ノ大權ニ基ツケル既定ノ歲出及法律ノ結果ニ由リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歲出ハ政府ノ同意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得ス

憲法上ノ大權ニ基ツケル既定ノ歲出トハ第一章ニ掲ケタル天皇ノ大權ニ依レル支出即チ行政各部ノ官制陸海軍ノ編制ニ要スル費用文武官ノ俸給并ニ外國條約ニ依レル費用ニシテ憲法施行ノ前ト施行ノ後トヲ論セス豫算提議ノ前ニ既定マレル經常費額ヲ成ス者ヲ謂フ法律ノ結果ニ由ル歲出トハ議院ノ費用議員ノ歳費手當諸般ノ恩給年金法律ニ依レル官制ノ費用及俸給ノ類ヲ謂

フ法律上政府ノ義務ニ屬スル歲出トハ國債ノ利子及償還會社營業ノ補助又ハ保證政府ノ民法上ノ義務又ハ諸般ノ賠償ノ類ヲ謂フ
蓋憲法ト法律トハ行政及財務ノ上ニ至高ノ標準ヲ示ス者ニシテ國家ハ立國ノ目的ヲ達スル爲ニ憲法ト法律トヲ以テ最高ノ主位ヲ占領セシメ而シテ行政ト財務トヲ以テ此レニ從屬セシメサルヘカラサルナリ故ニ豫算ヲ議スル者ハ憲法ト法律トニ準據シ憲法上及法律上國家ノ制置ニ必要ナル資料ヲ給備スルヲ以テ當然ノ原則トセサルヘカラス其ノ他前定ノ契約及民法上又ハ諸般ノ義務ハ均ク法律上ノ必要ヲ生スル者トス若議會ニシテ豫算ヲ議スルニ當リ憲法上ノ大權ニ準據セル既定ノ額又ハ法律ノ結果ニ由リ及法律上ノ義務ヲ履行スルニ必要ナル歲出ヲ廢除削減スル

コトアラハ此レ即チ國家ノ成立ヲ破壊シ憲法ノ原則ニ背ク者ト
ヒサルコトヲ得ス但シ既定ノ歳出ト謂フトキハ其ノ憲法上ノ大
權ニ基ツクニ拘ラス新置及増置ノ歳出ハ仍議會ニ於テ論議ノ自
由ヲ有スルナリ而シテ政府ノ同意ヲ經ルトキハ憲法上既定歳出
及法律ノ結果ニ由リ又ハ義務ノ必要ニ由ル者ト雖法律及時宜ノ
許ス限ハ仍省略修正スルコトヲ得ヘキナリ

(附記)「ボーリウ」氏ノ著論ニ據ルニ瑞典ニ於テハ國會ニシテ歳
出ヲ削減シ現在建設ノ事業ヲ繼續スルニ足ラサル場合ニ於テ
ハ國王ノ認許ヲ得スシテ之ヲ決議スルコト能ハス瑞典憲法第
八十九條
其ノ他獨逸各邦ニ於テ議會ハ憲法上ノ義務又ハ法律及民法上
ノ義務ニ生スル必要ナル歳出ヲ拒ムコトヲ得サルノ主義ヲ揭
グル者ハ「ブラウンシユ、ワイヒ」憲法第一百七十三條「オルデンブル

ヒ憲法第八十七條ハ「ノールフル」憲法第九十一條「サクツン、マイ
ニンゲン」憲法第八十一條是ナリ又一タヒ豫算ヲ以テ定メタル
ノ經費ハ其ノ事項及目的ノ消滅セサル間ハ國會ノ承諾ナクシ
テ之ヲ増加スルコトヲ得ス政府ノ承諾ナクシテ之ヲ削減スル
コトヲ得サルコトヲ定ムル者ハ「アルデンブルヒ」憲法第二百三
條是ナリ此レ皆各國ノ舊慣又ハ成文ニ存スル者ニシテ而シテ
近世國家原理ノ發達ト符合スル者ナリ茲ニ附記シテ以テ參考
ニ備フ

第六十八條 特別ノ須要ニ因リ政府ハ豫メ年限ヲ定
メ繼續費トシテ帝國議會ノ協賛ヲ求ムルコトヲ得
歳費ハ毎年ニ議定スルヲ以テ常トス蓋國家ノ務ハ活動變遷シテ
一定ノ細尺ヲ以テ概律スヘカラス故ニ國家ノ費用ハ亦前年ヲ以

テ後年ニ推行スヘカラス但シ本條特別ノ須要アル場合ニ對シ例
外ヲ設クルハ陸海軍費ノ一部又ハ工事製造ノ類數年ヲ期レ其ノ
成功ヲ見ルヘキ者議會ノ協賛ヲ以テ數年ニ亘ルノ年限ヲ定ムル
コトヲ得ルナリ

第六十九條 避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲ニ
又ハ豫算ノ外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツル爲ニ
豫備費ヲ設クヘシ

本條ハ豫備費ノ設ヲ以テ豫算ノ不足及豫算ノ外ノ必要ナル費用
ヲ補給スルコトヲ定ム蓋第六十四條ハ豫算超過及豫算外支出ニ
付議會ノ事後承諾ヲ求ムヘキコトヲ掲ケタリ而シテ其ノ超過及
額外支出ハ何等ノ財源ニ資リテ以テ之ヲ供給スル乎ヲ指示セス
此レ本條ニ豫備費ノ設ヲ定ムルヲ必要トスル所以ナリ

(附記) 各國豫備費ノ設ヲ參考スルニ荷蘭ニ於テハ各省ニ豫備
費五万フロリンヲ置キ又政府一般ノ爲ニ五万フロリンヲ置キ
以テ議決科目ノ不足ヲ補給スルニ備フ伊國千八百六十九年ノ
會計法ハ豫算ノ中ニ豫備費ヲ設クルコトヲ掲ケ豫算定額ノ避
クヘカラサル不足ニ應スル爲ニ二項ノ定額ヲ許可ス其ノ一ハ
義務ト及命令ニ依リ生スル經費ヲ支辨スヘキ豫備費トシテ
クラン其ノ二ハ別ニ一項ヲ爲スヘキ豫知スヘカラサル經費ノ爲
ノ豫備費トスラントク其ノ第一豫備ノ使用ハ會計検査院ノ登
記ヲ經テ大藏長官之ヲ施行シ第二豫備ノ使用ハ大藏長官ノ發
識ニ由リ内閣會議ヲ經テ勅令ヲ以テ之ヲ定ム普國ハ各省ニ豫
備費ヲ置キ更ニ大藏省ニ非常豫備費ヲ置ク此レ皆豫算ノ不足
ト豫算ノ外ノ必要ヲ補充スル爲ニ豫メ設クル者ナリ瑞典ハ豫

見セサル場合ニ備フル爲ニ國債局ノ收入ヨリ二種ノ豫備金ヲ設ケ其ノ第一種ハ國家ノ防禦又ハ重要緊急ナル事件ニ備ヘ第二種ハ戰時ノ用ニ備フ此レ亦別ニ一法タリ

第七十條

公共ノ安全ヲ保持スル爲緊急ノ需用アル場合ニ於テ内外ノ情形ニ因リ政府ハ帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルトキハ勅令ニ依リ財政上必要ノ處分ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

本條ノ解釋ハ既ニ第八條ニ具ハル但シ第八條ト異ナル所ノ者ハ第八條ハ憲法ニ於テ議會開會セサルトキハ臨時會ノ召集ヲ要セス本條ハ議會開會セサルトキハ臨時會ノ召集ヲ要ス而シテ内外

ノ情形ニ由リ議會ヲ召集シ能ハサルトキニ限り始メテ議會ノ叶同ヲ待タスシテ必要ノ處分ヲ施スコトヲ得蓋本條ハ專ラ財政ニ關ルヲ以テ更ニ一層ノ慎重ヲ加フルナリ

所謂財政上必要ノ處分トハ立法議會ノ協賛ヲ經ヘキ者ニシテ而シテ臨時緊急ノ場合ノ爲ニ協賛ヲ經スシテ處分スルヲ謂フ

臨時財政ノ處分ニシテ將來ニ國庫ノ爲ニ義務ヲ生スル者若議會ノ事後承諾ヲ得サルトキハ何等ノ結果ヲ生スヘキ乎蓋議會ノ承諾ヲ拒ムハ將來ニ繼行スルノ効力ヲ拒ム者ニシテ其ノ既ニ行ヘル過去ノ處分ヲ追廢スルニ非ス第八條ノ說明既ニ之ヲ詳ニス故ニ勅令ニ依リ

既ニ生シタルノ政府ノ義務ハ議會之ヲ廢スルコト能ハス抑事若此ニ至ラハ國家不祥ノ結果トシテ視サルコトヲ得ス此レ本條ノ國家ノ成立ヲ保護スル爲ニ至テ已ムヲ得サルノ處分ヲ認メ又議

會ノ權ヲ存崇シテ尤慎重ノ意ヲ致ス所以ナリ

第七十一條 帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハ政府ハ前年度ノ豫算ヲ施行スヘシ

議會自ラ議定ノ結局ヲ爲サスシテ閉會ニ至ルトキハ之ヲ豫算ヲ議定セストス兩議院ノ一ニ於テ豫算ヲ廢棄シタルトキハ之ヲ豫算成立ニ至ラストス其ノ他議會未タ豫算ヲ議決セスシテ停會又ハ解散ヲ命セラレタルトキハ其ノ再ヒ開會スルノ日ニ至ルマテ亦豫算成立セサルノ場合トス

議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハ其ノ結果ハ大ニシテハ國家ノ存立ヲ廢絶シ小ニシテハ行政ノ機關ヲ麻痺セシムルニ至ル千八百七十七年北米合衆國ニ於テ國會陸軍

ノ豫算ヲ議定スルコトヲ遷延シタルカ爲ニ三月ノ間兵士ノ給養ヲ缺クコトヲ致セリ同年澳斯特刺利ニ於テ「メルボルン」ノ議院ハ豫算ノ全部ヲ廢棄シタリ是レ民主主義ノ上ニ結架セル邦國ノ情態ニシテ我カ國體ノ固ヨリ取ルヘキ所ニ非サルナリ乃或國ニ於テ此ノ場合ヲ以テ一ニ勢力ノ判決スル所ト爲シ議會ニ拘ラスシテ政府ノ專意ニ任シ財務ヲ施行セルカ如キモ(普國千八百六十二年ヨリ六十六年ニ至ル)亦非常ノ變例ニシテ立憲ノ當然ニ非サルナリ我カ憲法ハ國體ニ基ツキ理勢ニ酌ミ此ノ變狀ニ當リ前年ノ豫算ヲ施行スルヲ以テ終局ノ處分トスルコトヲ定メタリ

第七十二條 國家ノ歲出歲入ノ決算ハ會計検査院之ヲ検査確定シ政府ハ其ノ検査報告ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

會計検査院ノ組織及職權ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

豫算ハ會計ノ初トシ決算ハ會計ノ終トス議會ノ會計ヲ監督スルニ其ノ方法ニツアリ即チ一ハ期前ノ監督ニシテ二ハ期後ノ監督トス期前ノ監督トハ次年度ノ豫算ヲ承諾スルヲ謂ヒ期後ノ監督トハ經過セル年度ノ決算ヲ審査スルヲ謂フ此ノ期後ノ監督ヲ取ル爲ニ政府ハ會計検査院ノ検査ヲ經タル決算ヲ以テ該院ノ報告ヲ併セテ議會ニ提出スルノ義務アリ

検査院ノ職掌ハ一ニ各部ノ出納官ノ證明ヲ検査シ其ノ責任ヲ解除スルニ在リ二ニ支拂命令官ノ處分ヲ監督シテ其ノ豫算超過豫算外ノ支出及豫算又ハ法律勅令ニ違反シタル事件ヲ検査スルニ在リ三ニ國庫ノ總決算及各省決算報告ヲ検査シ各出納官ノ報呈シタル各部會計ノ積數ト對照シ以テ之ヲ確定スルニ在リ

會計検査院ノ行政上ノ検査ハ議會ノ立法上ノ検査ノ爲ニ準備ノ地ヲ爲ス者ナリ故ニ議會ハ検査院ノ報告ト俱ニ政府ノ決算書ヲ受ケテ其ノ正當ナルヲ承諾シ之ヲ決定スヘシ

會計検査院ハ政府ノ會計ヲ監査スル爲ニ獨立ノ資格ヲ有セサルヘカラス故ニ其ノ組織及職權ハ裁判官ト同ク法律ヲ以テ之ヲ定メ行政命令ノ區域ノ外ニ在ル者トス但シ其ノ検査上ノ規程ノ如キハ仍勅令ノ定ムル所タルヘキノミ

第七章 補則

第七十三條 將來此ノ憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要アルトキハ勅命ヲ以テ議案ヲ帝國議會ノ議ニ付スヘシ此ノ場合ニ於テ兩議院ハ各其ノ總員三分ノ二以上出

席スルニ非サレハ議事ヲ開クコトヲ得ス出席議員三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルニ非サレハ改正ノ議決ヲ爲スコトヲ得ス

恭テ按スルニ憲法ハ我カ天皇ノ親ク之ヲ制定シ上祖宗ニ繼キ下後世ニ遺シ全國ノ臣民及臣民ノ子孫タル者ヲシテ其ノ條則ニ遵由セシメ以テ不磨ノ大典トナス所ナリ故ニ憲法ハ紛更ヲ容サス但シ法ハ社會ノ必要ニ調熟シテ其ノ効用ヲ爲ス者ナリ故ニ國體ノ大綱ハ萬世ニ亘リ永遠恒久ニシテ移動スヘカラスト雖政制ノ節目ハ世運ト俱ニ事宜ヲ酌量シテ之ヲ變通スルハ亦已ムヘカラサルノ必要タラスムハアラス本條ハ將來ニ向テ此ノ憲法ノ條項ヲ改定スルノ事アルヲ禁セス而シテ憲法ヲ改定スル爲ニ更ニ特別ノ要件ヲ定メタリ

通常ノ法律案ハ政府ヨリ之ヲ議會ニ付シ或ハ議會之ヲ提出ス而シテ憲法改正ノ議案ハ必勅命ヲ以テ之ヲ下付スルハ何ツヤ憲法ハ天皇ノ獨リ親ラ定ムル所タリ故ニ改正ノ權ハ亦天皇ニ屬スヘケレハナリ改正ノ權既ニ天皇ニ屬ス而シテ仍之ヲ議會ニ付スルハ何ツヤ一タヒ定マルノ大典ハ臣民ト俱ニ之ヲ守リ王室ノ專意ヲ以テ之ヲ變更スルコトヲ欲セサルナリ議院ニ於テ之ヲ議決スルニ通常過半数ノ議事法ニ依ラシメスシテ必三分二ノ出席ト及多數ヲ望ムハ何ツヤ將來ニ向テ憲法ニ對スル慎守ノ方嚮ヲ扶持スルナリ

本條ノ明文ニ據ルニ憲法ノ改正條項ヲ議會ノ議ニ付セラルハニ當リ議會ハ議案ノ外ノ條項ニ連及シテ議決スルコトヲ得サルヘキナリ又議會ハ直接又ハ間接ニ憲法ノ主義ヲ變更スルノ法律ヲ

議決シテ以テ本條ノ制限ヲ逃ル、コトヲ得サルヘキナリ

第七十四條 皇室典範ノ改正ハ帝國議會ノ議ヲ經ル

ヲ要セス

皇室典範ヲ以テ此ノ憲法ノ條規ヲ變更スルコトヲ得ス

恭テ按スルニ憲法ノ改正ハ既ニ議會ノ議ヲ經ルヲ要ス而シテ皇室典範ハ獨其ノ議ヲ經ルヲ要セサルハ何ツヤ蓋皇室典範ハ皇室自ラ皇室ノ事ヲ制定ス而シテ君民相關カルノ權義ニ涉ル者ニ非サレハナリ若夫改正ノ必要アルニ當テ之ヲ皇族會議及樞密顧問ニ付スルノ條則ノ如キハ亦典範ニ於テ之ヲ制定スヘキ者ニシテ而シテ憲法ニ之ヲ示明スルノ要用ナシ故ニ此ノ條ニ之ヲ併セ掲ケサルナリ

但シ皇室典範ノ改正ニ由リ直接又ハ間接ニ此ノ憲法ヲ變更スルノ事アラシメハ憲法ノ基址ハ容易ニ移動スルノ不幸ナキコトヲ保タサラムトス故ニ本條特ニ憲法ノ爲ニ保障ヲ存スルノ至意ヲ示シタリ

第七十五條 憲法及皇室典範ハ攝政ヲ置クノ間之ヲ

變更スルコトヲ得ス

恭テ按スルニ攝政ヲ置クハ國ノ變局ニシテ其ノ常ニ非サルナリ故ニ攝政ハ統治權ヲ行フコト天皇ニ異ナラスト雖憲法及皇室典範ノ何等ノ變更モ之ヲ攝政ノ斷定ニ任セサルハ國家及皇室ニ於ケル根本條則ノ至重ナルコト固ヨリ假攝ノ位置ノ上ニ在リ而シテ天皇ノ外何人モ改正ノ大事ヲ行フコト能ハサルナリ

第七十六條 法律規則命令又ハ何等ノ名稱ヲ用非タ

ルニ拘ラス此ノ憲法ニ矛盾セサル現行ノ法令ハ總テ
テ遵守ノ効力ヲ有ス

歲出上政府ノ義務ニ係ル現在ノ契約又ハ命令ハ總
テ第六十七條ノ例ニ依ル

維新ノ後法令ノ頒布ハ御沙汰書又ハ布告及布達ト稱フ明治元年
八月十三日法令頒布ノ書式ヲ定メ以後被仰出御沙汰等ノ文字ヲ
用井ルハ行政官ニ限り其ノ他ノ五官神祇官會計官軍務及府縣ハ
申達ノ字ヲ以テス五官府縣ニ於テ重立タル布告ハ行政官ニ差出
シ議政官決議ノ上行政官ヨリ達セシム五年正月八日達ニ自今布
告ニ番號ヲ附シ各省ノ布達亦同様タラシム此レヨリ始メテ布告
布達ノ名稱ニ區別ヲナシタリ六年七月十八日達ニ布令中揭示ス
ヘキ者ト然ラサル者トヲ區別シ布令書ノ結文ノ例ヲ定メ各廳及

官員ニ達スルハ此旨相達又ハ此旨可相心得トシ全國一般ニ布告
スルハ此旨布告トシ華族或ハ社寺ニ達スルハ此旨華士族ヘ布告
又ハ此旨社寺ヘ布告トス其ノ各廳及官員ニ達スル者ハ揭示ヲ要
セス此レ人民ニ對スル布告ト官廳訓令トヲ區別シタルノ始ナリ
十四年十二月布告布達式ヲ定メ布告ハ太政大臣奉勅旨布告トシ
布達ハ太政大臣ヨリ布達シ並ニ主任ノ卿之ニ連署ス同月三日布
告ニ法律規則ハ布告ヲ以テ發行ス從前諸省限布達セル條規ノ類
ハ自今總テ太政官ヨリ布達ス此レ諸省布達ノ制ヲ廢シ及始メテ
諸省卿ノ連署ノ制ヲ定メタルナリ十九年二月二十六日ノ勅令ニ
法律勅令ハ上諭ヲ以テ公布シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣
及主任ノ大臣之ニ副署ス閣令ハ内閣總理大臣之ヲ發シ省令ハ各
省大臣之ヲ發ス以上之ヲ總フルニ維新以來ノ官令ニ御沙汰書ト

曰ヒ布告ト曰ヒ布達ト曰ヘルハ其ノ文式ニ依テ稱呼シタルナリ
 其ノ法ト曰ヒ戸籍法律ト曰ヒ新律類令ト曰ヒ徵兵令類條例ト曰
 曰新開條律例ト曰ヒ改定類規則ト曰フ府縣會規ハ總テ皆人民ニ
 公布シ例ノ類遵由ノ効力ヲ有セシムルノ條則ヲ謂フノ義ニシテ其ノ間
 ニ輕重スル所アルニ非サルナリ而シテ十九年二月二十六日ノ勅
 令ニ至テ始メテ法律勅令ノ名稱ヲ正シタリシモ何ヲカ法律トシ
 何ヲカ勅令トスルニ至テハ亦未タ一定ノ限界アルニ非サルナリ
 八年ノ元老院ノ章程ニ元老院ハ新法ノ設立舊法ノ改定ヲ議定ス
 ト謂ヒ十九年二月二十六日ノ勅令ニ法律ノ元老院ノ議ヲ經ルヲ
 要スル者ハ舊ニ依ルト謂フ然ルニ八年以後布告ノ中何ヲカ指シ
 テ法律トスヘキヤ未タ明白ナラス從テ元老院立法ノ權限亦明劃
 ナラス十一年二月二十二日十九年以後勅令ニシテ院議ニ付スル

者亦少シトセス要スルニ憲法發布ノ前ニ當テハ法律ト勅令トハ
 其ノ名稱ヲ殊ニシテ其ノ事實ヲ同クスル者タルニ過キス而シテ
 其ノ名稱ニ依テ以テ効力ノ輕重ヲ區別スヘカラサルハ十九年以
 前布告ト布達ト時アリテ區別アリ時アリテ區別ナキニ異ナルコ
 トナキナリ
 故ニ憲法ノ指定スル所ニ從ヒ法律ト命令トノ區別ヲ明ニセムト
 スルハ必立法議會開設ノ時期ニ於テ其ノ始ヲ履ムコトヲ得ヘク
 而シテ立法議會開設ノ前ニ當テハ法律規則命令其ノ他何等ノ名
 稱ヲ用非何等ノ文式ヲ用非タルモ此ヲ以テ其ノ効力ノ輕重ヲ判
 斷スルノ繩尺トスルコトヲ得ス
 前日ノ公令ハ何等ノ名稱ヲ用非タルモ總テ遵由ノ効力アリトス
 但シ此ノ憲法ニ矛盾スル者ハ憲法ノ施行ノ日ヨリ其ノ法令ノ全

文或ハ或ル條章ニ限リ効力ヲ失フヘキナリ
 前日ノ公令今日ニ現行シテ將來ニ遵由ノ力アル者ノ中ニ就テ更
 ニ憲法ノ定ムル所ニ依ルトキハ必其ノ法律タルコトヲ望ム者ア
 リ第二十條兵役類今過去ニ汙リテ一々之ニ法律ノ公式ヲ予ヘ
 以テ憲法ノ文義ニ副ハシメムトスルハ形式ニ拘リ徒ニ多事ヲ爲
 スニ過キス故ニ本條ハ現行ノ法令條規ヲシテ總テ皆遵由ノ力ア
 ラシムルノミナラス其ノ中憲法ニ於テ法律ヲ以テ之ヲ望ム者ハ
 即チ法律トシテ遵由ノ力アラシムルコトヲ示ス者ナリ而シテ法
 律トシテ遵由ノ力アラシムル者ニシテ若將來ニ於テ改正ヲ要ス
 ルトキハ其ノ前日ニ勅令布達ヲ以テ公布シタルニ拘ラス總テ皆
 法律ヲ以テ舉行スルヲ要スルコト知ルヘキナリ

皇室典範義解

恭テ按スルニ皇室ノ典範アルハ益其ノ基礎ヲ鞏固ニシ尊嚴ヲ無
 窮ニ維持スルニ於テ缺クヘカラサルノ憲章ナリ
 祖宗國ヲ肇メ一系相承ケ天壤ト與ニ無窮ニ垂ル此レ蓋言説ヲ假
 ラスシテ既ニ一定ノ模範アリ以テ不易ノ規準タルニ因ルニ非サ
 ルハナレ今人文漸ク進ミ遵由ノ路必憲章ニ依ル而シテ皇室典範
 ノ成ルハ實ニ祖宗ノ遺意ヲ明徴ニシテ子孫ノ爲ニ永遠ノ銘典ヲ
 貽ス所以ナリ
 皇室典範ハ皇室自ラ其ノ家法ヲ條定スル者ナリ故ニ公式ニ依リ
 之ヲ臣民ニ公布スル者ニ非ス而シテ將來已ムヲ得サルノ必要ニ
 由リ其ノ條章ヲ更定スルコトアルモ亦帝國議會ノ協賛ヲ經ルヲ
 要セサルナリ蓋皇室ノ家法ハ祖宗ニ承ケ子孫ニ傳フ既ニ君主ノ

任意ニ制作スル所ニ非ス又臣民ノ敢テ干涉スル所ニ非サルナリ

第一章 皇位繼承

第一條 大日本國皇位ハ祖宗ノ皇統ニシテ男系ノ男子之ヲ繼承ス

恭テ按スルニ皇位ノ繼承ハ祖宗以來既ニ明訓アリ和氣清麻呂還
奏ノ言ニ曰我國家開闢以來君臣分定矣以臣爲君未之有也天之日
嗣必立皇緒ト

皇統ハ男系ニ限リ女系ノ所出ニ及ハサルハ皇家ノ成法ナリ上代
獨女系ヲ取ラサルノミナラス神武天皇ヨリ崇峻天皇ニ至ルマテ
三十二世曾テ女帝ヲ立ツルノ例アラス故ニ神功皇后ハ國ニ當ル
コト六十九年終ニ攝位ヲ以テ終ヘタマヘリ飯豐青尊政ヲ攝シ清

寧天皇ノ後ヲ承ケシモ亦未タ皇位ニ即キタマハス清寧天皇崩シ
テ皇子ナシ亦近親ノ皇族男ナシ而シテ皇妹春日大娘アリ然ルニ
皇妹位ニ即カスシテ群臣從祖履中天皇ノ孫顯宗天皇ヲ推奉ス是
レ以テ上代既ニ不文ノ常典アリテ易フヘカラサルノ家法ヲ成シ
タルコトヲ見ルヘシ其ノ後推古天皇以來皇后皇女即位ノ例ナキ
ニ非サルモ當時ノ事情ヲ推原スルニ一時國ニ當リ幼帝ノ歲長ス
ルヲ待チテ位ヲ傳ヘタマハムトスルノ權宜ニ外ナラス之ヲ要ス
ルニ祖宗ノ常憲ニ非ス而シテ終ニ後世ノ模範ト爲スヘカラサル
ナリ本條皇位ノ繼承ヲ以テ男系ノ男子ニ限リ而シテ又第二十一
條ニ於テ皇后皇女ノ攝政ヲ掲クル者ハ蓋皆先王ノ遺意ヲ紹述ス
ル者ニシテ苟モ新例ヲ創ムルニ非サルナリ
祖宗ノ皇統トハ一系ノ正統ヲ承クル皇胤ヲ謂フ而シテ和氣清麻

呂ノ所謂皇緒ナル者ト其ノ解義ヲ同クスル者ナリ皇統ニシテ皇位ヲ繼クハ必一系ニ限ル而シテ二三ニ分割スヘカラス天智天皇ノ言ニ曰天無雙日國無二王ト故ニ後深草天皇以來數世ノ間兩統互ニ代リ終ニ南北二朝アルヲ致シ、ハ皇家ノ變運ニシテ祖宗典憲ノ存スル所ニ非サルナリ

以上本條ノ意義ヲ約說スルニ祖宗以來皇祚繼承ノ大義炳焉トシテ日星ノ如ク萬世ニ亘リテ易フヘカラサル者蓋左ノ三大則トス

第一 皇祚ヲ踐ムハ皇胤ニ限ル

第二 皇祚ヲ踐ムハ男系ニ限ル

第三 皇祚ハ一系ニシテ分裂スヘカラス

第二條 皇位ハ皇長子ニ傳フ

第三條 皇長子在ラサルトキハ皇長孫ニ傳フ皇長子

及其ノ子孫皆在ラサルトキハ皇次子及其ノ子孫ニ傳フ以下皆之ニ例ス

恭テ按スルニ菟道稚郎子ノ言ニ曰昆上而季下古今之常典ト葛野王持統天皇ニ進奏スルノ言ニ曰我國家爲法也神代以來子孫相承以襲天位若兄弟相及則亂從此興ト此レ乃祖宗以來子孫直系相傳ヘ長幼序ニ從フヲ以テ天位繼承ノ正法トス而シテ其ノ兄弟相傳フルハ反正天皇ノ履中天皇ニ於ケル允恭天皇ノ反正天皇ニ於ケルヨリ始マリ皆已ムヲ得サルニ出テ其ノ正ニ非サルナリ第二第三條繼承ノ法ヲ一定シテ後王ノ爲ニ常典ヲ貽シ敢テ權宜左右スルコトヲ容サ、ルハ蓋祖宗ノ遺範ヲ恪ミ永ク亂萌ヲ後裔ニ絶ツ所以ナリ凡ツ子孫ト云ヘルハ曾孫以下皆其ノ内ニ在リ古典ニ天トアルハ日本書紀卷二天祖ノ裔孫ヲ謂ヘルナリ又五世孫七世孫トアリ同書卷十是レ姓氏錄ノ慣用スル所ナリ長子ノ子

孫ハ次子ニ先タツハ宗統ヲ重ニスルナリ長子ノ子孫在ラサルニ至テ始メテ次子ニ移ル次子ノ子孫ノ第三子以下ニ於ケルモ亦同例トス

次條ニ皇庶子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ皇嫡子孫皆在ラサルトキニ限ルト謂フトキハ第二第三條ハ嫡子孫ニ就テ其ノ長ヲ擇フヲ謂フ而シテ嫡子孫皆在ラサルトキハ庶子孫ニ於テ其ノ長ヲ擇フモ亦本法ニ依ルコト知ルヘキナリ

第四條 皇子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ嫡出ヲ先ニス皇庶子孫ノ皇位ヲ繼承スルハ皇嫡子孫皆在ラサルトキニ限ル

恭テ按スルニ祖宗ノ嫡ヲ先ニシ庶ヲ後ニスルハ神武天皇庶長子手研耳命ヲ措テ綏靖天皇ヲ立テタマフニ始マル是ヲ繼嗣ノ常典

トス但シ皇緒萬世一日モ曠クスヘカラス故ニ既ニ嫡出ナキトキハ庶出亦位ヲ繼クコトヲ得セシム蓋清寧天皇崩シ皇嗣ナシ履中天皇ノ孫顯宗天皇位ヲ繼ク而シテ天皇ハ實ニ其ノ姊飯豐青尊兄仁賢天皇ト俱ニ履中天皇ノ庶出磐坂市邊押羽皇子ノ子ナリ清寧天皇ノ姊亦庶出ナリ武烈天皇崩シテ皇嗣ナシ應神天皇五世ノ孫繼體天皇ヲ迎ヘ位ニ即ク而シテ天皇ハ實ニ應神天皇ノ庶出稚渟毛二派皇子ノ後ナリ此ノ時ニ當テ皇統絶エサルコト綫ノ如シ若庶系ヲ立ツルコトナカリセハ當時既ニ言フヘカラサルノ事アラム我カ國ノ庶出ヲ絶タサルハ實ニ已ムヲ得サルニ出ル者ナリ皇嫡子孫皆在ラサルトキニ限ルトハ長子及次子以下及其ノ子孫ニ通シテ之ヲ謂フナリ故ニ皇庶長子ハ皇嫡幼子孫ニ先タツコトヲ得ス長系ノ庶皇孫ハ次系ノ皇嫡子孫ニ先タツコトヲ得サルナ

問皇庶子ノ子嫡出ナルトキハ之ヲ嫡皇孫トスルコトヲ得ヘキカ
答皇庶子ノ子孫ハ即チ庶流ナリ故ニ皇庶子ノ嫡出ノ子ハ其ノ庶
出ノ兄弟ニ先タツヘキモ皇嫡子孫ニ先タツコトヲ得ス

第五條 皇子孫皆在ラサルトキハ皇兄弟及其ノ子孫
ニ傳フ

第六條 皇兄弟及其ノ子孫皆在ラサルトキハ皇伯叔
父及其ノ子孫ニ傳フ

第七條 皇伯叔父及其ノ子孫皆在ラサルトキハ其ノ
以上ニ於テ最近親ノ皇族ニ傳フ

恭テ按スルニ第五第六第七條ハ皇子孫在ラサルニ當リ繼嗣ヲ定
ムルニ最近親ヲ以テスルコトヲ示スナリ皇子孫ハ現在ノ天皇ニ

屬スル至親ノ宗系タリ皇子孫ノ嫡庶俱ニ在ラサルトキハ皇兄弟
ヲ以テ最近親トス故ニ繼承ノ權皇兄弟ノ中ノ一ニ移ル其ノ現在
ノ天皇ト同父ナレハナリ皇兄又ハ皇弟ノ子及孫ハ皇兄又ハ皇弟
ノ系統ニ屬スル者ナリ皇兄弟及其ノ子孫ノ嫡庶俱ニ在ラサルト
キハ此ニ次キ皇伯叔ヲ最近親トス故ニ繼承ノ權皇伯叔ノ中ノ一
ニ移ル其ノ現在ノ天皇ノ父ト同父ナレハナリ皇伯又ハ皇叔ノ子
及孫ハ皇伯又ハ皇叔ノ系統ニ屬スル者ナリ皇伯叔以上最近親ノ
皇族ト謂ヘルハ皇大伯叔及其ノ以上皆之ニ準スルナリ一系ノ下
ハ尊卑相承ケ而シテ宗系盡キテ支系ニ及ヒ近系盡キテ遠系ニ及
フ蓋繼承ノ疑義ヲ將來ニ絶チ皇緒ノ慶福ヲ永遠ニ保タムトスル
ナリ

第八條 皇兄弟以上ハ同等内ニ於テ嫡ヲ先ニシ庶ヲ

後ニシ長ヲ先ニシ幼ヲ後ニス

恭テ按スルニ皇兄弟一等トシ皇伯叔又一等トシ皇大伯叔又一等トス皇兄弟ノ等内ニ於ケルハ其ノ嫡長ヲ擇ヒ嫡ナキトキハ庶出ノ中ニ就テ其ノ長ヲ擇フ皇兄弟ノ子孫ニ於ケルハ總テ皇子孫ノ例ニ同シ皇伯叔ノ等内ニ於テ嫡ヲ先ニシ長ヲ先ニスルハ其ノ例皇兄弟ノ等ニ同シ其ノ皇大伯叔ノ等ニ於ケルモ亦同シ蓋皇子孫ノ庶出ハ皇兄弟ノ嫡出ニ先ニスルハ皇家其ノ宗系ヲ重ニスルノ例典ニシテ天皇ノ下尊卑相承ケ嫡庶俱ニ盡クルニ非サレハ支系ニ移ルコトナシ本條推シテ之ヲ各等ニ及ホシ一等コトニ嫡長ヲ先ニシ庶幼ヲ後ニシ嫡庶俱ニ盡クル毎ニ其ノ等ヲ上ス皆其ノ例ヲ同クス故ニ同等内ニ於テト謂ヘルナリ

トハ長子ヲ先ニシ長系ヲ先ニスルヲ謂フ故ニ皇嫡兄弟及其ノ子孫ハ皇庶兄弟ニ先タチ皇嫡兄弟ノ中ニ就テハ皇長兄及其ノ子孫ハ皇幼弟ニ先タチ皇嫡兄弟ナキトキハ皇庶兄及其ノ子孫ハ又皇庶弟ニ先タツヘキナリ

第九條 皇嗣精神若ハ身體ノ不治ノ重患アリ又ハ重大ノ事故アルトキハ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シ前數條ニ依リ繼承ノ順序ヲ換フルコトヲ得

恭テ按スルニ皇嗣ハ先王憲典ノ存スル所ニ循ヒ大統領ヲ繼キ神器ヲ傳フルノ位ニ居ル而シテ入主ノ任意ニ左右スルコトヲ得ル所ニ非ス故ニ繼承ノ順序ヲ換フルハ必精神若ハ身體ノ不治ノ重患アリ又ハ重大ノ事故アリテ神器ノ重キヲ承クルニ堪ヘサルトキニ限り而シテ又必皇族會議及樞密顧問ニ諮詢スルヲ經テ始メテ

決行スルコトヲ得若本條ノ定ムル所ニ依ラスシテ繼嗣ヲ易ヘ置クハ典範ノ認メサル所タリ而シテ一時ノ過失ノ如キハ以テ重大ノ事故ト爲スノ類ニ非サルナリ

第二章 踐祚即位

第十條 天皇崩スルトキハ皇嗣即チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク

恭テ按スルニ神祖以來鏡劍璽三種ノ神器ヲ以テ皇位ノ御守ト爲シタマヒ歷代即位ノ時ハ必神器ヲ承クルヲ以テ例トセラレタリ允恭天皇元年紀ニ大中姬命謂群卿曰皇子允恭天皇將聽群臣之請今當上天皇璽符於是群臣大喜即日捧天皇之璽符再拜上焉乃即位日本書紀ト云ヘル是レナリ

上古ハ踐祚即チ即位ニシテ兩事ニ非ス令義解ニ天皇即位謂之踐祚、祚位也トアル是レナリ此ノ時ヨリ踐祚ノ日ニ神器ヲ奉ラレタリ蓋天子之位、一日不可曠曠世ノ宣命ニ見故ニ繼體天皇群臣ノ迎フル所トナリ未タ帝位ヲ踐ミタマハス而シテ史臣既ニ天皇移樟葉宮ト書シタリ藤原兼實玉海然ルニ天智天皇重キヲ承ケテ仍皇太子ト稱ヘ七年ノ後ニ即位ノ禮ヲ行ヒタマヘリ是レ踐祚ト即位ト兩様ノ區別ヲ爲シタルノ初ナリ其ノ後歷代踐祚ノ後數年ニシテ即位ノ禮ヲ行ハレタルコトアリシモ神器ハ必踐祚ノ時ニ奉ラル、コト上古ト異ナルコトナシ本條ハ皇位ノ一日モ曠闕スヘカラサルヲ示シ及神器相承ノ大義ヲ掲ケ以テ舊章ヲ昭明ニス若乃繼承ノ大義ハ踐祚ノ儀文ノ有無ヲ問ハサルハ固ヨリ本條ノ精神ナリ再ヒ恭テ按スルニ神武天皇ヨリ舒明天皇ニ至ル迄三十四世嘗テ

讓位ノ事アラス讓位ノ例ノ皇極天皇ニ始マリシハ蓋女帝假攝ヨ
リ來ル者ナリ日繼體天皇ノ安閑天皇ニ讓位シタマヒシハ同聖武天
皇光仁天皇ニ至テ遂ニ定例ヲ爲セリ此ヲ世變ノ一トス其ノ後權
臣ノ強迫ニ因リ兩統互立ヲ例トスルノ事アルニ至ル而シテ南北
朝ノ亂亦此ニ源因セリ本條ニ踐祚ヲ以テ先帝崩御ノ後ニ即チ行
ハル、者ト定メタルハ上代ノ恒典ニ因リ中古以來讓位ノ慣例ヲ
改ムル者ナリ

第十一條 即位ノ禮及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ

恭テ按スルニ天智天皇稱制ノ後更ニ即位ノ禮ヲ行ハレシ以來歷
代相因ルノ大典トナレリ文武天皇紀ニ載セタル即位ノ詔ニ集侍
皇子等王臣百官人等天下公民諸聞食ト詔ルトアルハ蓋上代ノ遺
例ニシテ皇族以下百官人民ヲ集メテ詔命ヲ天下ニ布キタマヒシ

ナリ即位ノ古禮ノ史乘ニ見エタルハ持統天皇紀ニ物部麻呂朝臣
樹大盾神祇伯中臣大島朝臣讀天神壽詞畢忌部宿禰色夫知奉上神
璽劍鏡於皇后皇后即天皇位公卿百僚羅列匝拜而拍手焉トアルヲ
始トス此ノ前孝德紀ニ見エ即位ノ式ハ太極殿ニテ行ハレ冕服ヲ
服シ高御座ニ即キ貞觀式冷泉天皇御惱ニ由リ紫宸殿ニテ行
ハル其ノ後太極殿災廢シテ或ハ太政官廳ニテ行ハレ或ハ南殿紫
殿ニテ行ハレタリ武門政ヲ專ニスルノ時用度供給セスシテ踐祚
ノ後數年ヲ經ト雖猶大禮ヲ行ハレサルコトアリシ維新ノ後明治
元年八月二十七日即位ノ禮ヲ舉行セラレ臣民再ヒ祖宗ノ遺典ヲ
仰望スルコトヲ得タリ十三年車駕京都ニ駐マル舊都ノ荒廢ヲ嘆
惜シタマヒ後ノ大禮ヲ行フ者ハ宜ク此ノ地ニ於テスヘシトノ旨
アリ勅シテ宮闕ヲ修理セシメタマヘリ本條ニ京都ニ於テ即位ノ

禮及大嘗祭ヲ行フコトヲ定ムルハ大禮ヲ重シ遺訓ヲ恪ミ又本ヲ忘レサルノ意ヲ明ニスルナリ

大嘗ノ祭ハ神武天皇元年以來歷代相因テ大典トハセラレタリ蓋天皇位ニ即キ天祖及天神地祇ヲ請饗セラル、ノ禮ニシテ一世ニ一タヒ行ハル、者ナリ天武天皇以來年毎ニ行フヲ新嘗ト王政ノ中コロ衰ヘタルトキ此ノ儀久シク廢絶シタリシニ後土御門天皇二年ノ間廢止シ東山天皇ニ至リ再ヒ行ハレ中御門天皇以來五十二年ノ間行ハレス櫻町天皇ニ至テ舉行セララル明治四年十一月詔アリテ舉行セラレタリ

第十二條 踐祚ノ後元號ヲ建テ一世ノ間ニ再ヒ改メサルコト明治元年ノ定制ニ從フ

恭テ按スルニ孝德天皇紀ニ改天豐財重日足姬天皇四年爲大化元年トアルハ是レ建元ノ始ニシテ歷代ノ例制トナレリシモ其ノ後

陰陽占卜ノ說ニ依リ一世ノ間屢年號ヲ改メ徒ニ史乘ノ煩キヲ爲スニ至レリ明治元年九月八日ノ布告ニ云今般御即位御大禮被爲濟先例之通被爲改年號候就テハ是迄吉凶之象兆ニ隨ヒ屢改號有之候へ共自今御一代一號ニ被定候依之改慶應四年可爲明治元年旨被仰出候事ト此レ本條ノ依ル所ノ令典ナリ

第三章 成年立后立太子

第十三條 天皇及皇太子皇太孫ハ滿十八年ヲ以テ成年トス

恭テ按スルニ中古以來天皇元服ノ制ヲ設ケラル大抵十一歳ヨリ十五歳ニ至リ元服ヲ行ハレタリ明治九年民法上ノ丁年ヲ定メテ滿二十年トス本條天皇及皇太子皇太孫ノ爲ニ成年ヲ定メテ十八

年トシタルハ天皇及皇嗣ハ神器ノ重ニ當リ尋常通法ノ拘ル所ニ非サレハナリ

第十四條 前條ノ外ノ皇族ハ滿二十年ヲ以テ成年トス

恭テ按スルニ天皇及皇嗣ノ成年ヲ以テ之ヲ他ノ皇族ニ及ホサ、ルハ前條特例ノ限ニ在ラサルナリ

第十五條 儲嗣タル皇子ヲ皇太子トス皇太子在ラサルトキハ儲嗣タル皇孫ヲ皇太孫トス

恭テ按スルニ皇太子古ハヒツギノミコト稱フ神武天皇紀ニ立皇子神渟名川耳尊爲皇太子ト此レ乃史臣皇太子ノ稱ヲ用非日嗣ノ御子ノ名ニ當テタル者ニシテ中古以來ハ取テ典禮トセラレタリ共ノ皇子ニ非スシテ入テ皇嗣トナルモ史臣亦皇太子ヲ以テ稱フ

成務天皇日本武尊ノ第二子足仲彥尊從姪孫ノ天皇ニシテ族叔祖ヲ立ケテ皇太子ト爲ス即チ皇姪ナリ
ヲ立ツルニ至テモ亦太子ト呼ヘリニ於ケル是ノ淳仁天皇但シ或ハ立太子ヲ宣行スルアリ或ハ宣行セサルアリテ其ノ實一定ノ成例アラス皇弟ヲ立ツルニ至テハ或ハ儲君ト稱ヘ反正天皇ノ腹中或ハ太子ト稱ヘ後三條天皇ノ後冷或ハ太弟ト稱フ嵯峨淳和村上圓山亦未タ畫一ナラス今既ニ皇位繼承ノ法ヲ定メ明文ノ掲クル所ト爲ストキハ立太子立太孫ノ外支系ヨリ入テ大統ヲ承クルノ皇嗣ハ立坊ノ儀文ニ依ルコトヲ須井ス而シテ皇太子皇太孫ノ名稱ハ皇子皇孫ニ限ルヘキナリ

第十六條 皇后皇太子皇太孫ヲ立ツルトキハ詔書ヲ以テ之ヲ公布ス

恭テ按スルニ立后ノ事ハ神武天皇以來歷世ノ帝紀ニ載セタリ而

シテ立后ノ詔ハ始メテ聖武天皇紀ニ見ユ其ノ宣命ニ謂ヘルコトアリ「天下ノ政ニ於キテ獨知ルヘキ物ニアラス必モ後ノ政アルヘシ此ハ事立ツニアラス天ニ日月アル如ト地ニ山川アル如ト並坐テ在ルヘシト云フコトハ汝等王臣等明ニ見知レルコトナリ云々」此ノ詔命ハ坤位册立ノ義ヲ表スルニ於テ事理昭明更ニ贊辭ヲ須非サル者ナリ本條ニ立后ノ大禮必詔書ヲ以テ公布スルコトヲ定ムルハ先王ノ典故ヲ重シ且中古以來中宮准后ノ設アリ從テ册立ノ儀ヲ缺クコトアルハ將來ニ依ルヘキノ模範ト爲スヘカラサルコトヲ明ニスルナリ

立太子ノ詔ハ始メテ光仁天皇紀ニ見ユ貞觀儀式ニ立皇太宣制ノ子儀章式ヲ載ス曰「法ノマヽニ有ルヘキ政トシテ某ノ親王ヲ立テ、皇太子ト定メ賜フ故此ノ狀ヲ悟リテ百官人等仕奉ト詔ル云々」ト蓋皇

太子皇太孫ハ祖宗ノ正統ヲ承ケ皇位ヲ繼嗣セムトス故ニ皇嗣ノ位置ハ立坊ノ儀ニ由リ始メテ定マルニ非ス而シテ立坊ノ儀ハ此ニ由テ以テ臣民ノ瞻望ヲ饜カシムル者ナリ

第四章 敬稱

第十七條 天皇太皇太后皇太后皇后ノ敬稱ハ陛下トス
 恭テ接スルニ陛下ハ臣下ヨリ天子ニ敷奏スルトキノ敬稱ナリ本條ニ陛下ノ敬稱ヲ以テ通シテ至尊ニ對スルノ稱謂トシ而シテ敷奏陛見ノ辭ニ限ラサルハ舊典ヲ敷衍シテ之ヲ内外ニ廣ムルナリ」
 大寶ノ令ニ三后ニ上啓スルハ殿下ト稱フ本條ニ太皇太后皇太后皇后皆陛下ト稱フルハ嫡后國母ハ至尊ニ齊匹シ至尊ト俱ニ臣民ノ至隆ナル敬禮ヲ受クヘケレハナリ但シ君位ハ一アリテ二ナシ

皇后ハ固ヨリ佗ノ皇族ト均ク人臣ノ列ニ居ル而シテ大寶ノ制ト其ノ稱ヲ殊ニシテ仍其ノ實ヲ同クスルコトヲ失ハサルナリ

第十八條 皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃親王親王

妃内親王王王妃女王ノ敬稱ハ殿下トス

恭テ按スルニ本條ハ舊制皇太子ニ於テ殿下ト稱フルノ例ニ因リ推シテ之ヲ皇族ニ及ホスナリ

第五章 攝政

第十九條 天皇未タ成年ニ達セサルトキハ攝政ヲ置

ク

天皇久キニ亘ルノ故障ニ由リ大政ヲ親ラスルコト能ハサルトキハ皇族會議及樞密顧問ノ議ヲ經テ攝

政ヲ置ク

恭テ按スルニ攝政ハ以テ皇室避クヘカラサルノ變局ヲ救濟シ一ハ皇統ノ常久ヲ保持シニハ大政ノ便宜ヲ疏通シ兩ツナカラ失墜ノ患ヲ免ル、所以ナリ攝政ハ天皇ノ天職ヲ攝行シ一切ノ大政及皇室ノ内事皆天皇ニ代リ之ヲ總攬ス而シテ至尊ノ名位ニ居ラサルナリ之ヲ古今及各國ニ參照スルニ攝政ノ事例一ニ非ス或ハ君祚ヲ假攝スルアリ飯豐青尊ノ攝政ニ居タ或ハ人臣ヲ以テ大政ヲ攝行スルアリ原良房是レ我カ藤或ハ共同攝政ヲ組織シ輔臣ヲ以テ攝政體ト爲スアリ周幽王ノ後ケル共和及巴威爾索遜瓦敦而シテ國家ノ危機亦往々攝政ノ時ニ起ル者少カラス本條ハ攝政ヲ認メテ攝位ヲ認メス以テ大統ヲ嚴慎ニスルナリ而シテ人臣ノ攝政ヲ許サ、ルハ次條ニ於テ之ヲ見ル

天皇久キニ亘ルノ故障トハ重患彌留歲月ノ久キニ亘リ醫治ノ望
ナク又ハ其ノ他ノ事故ニ因リ天職曠闕ナルヲ謂フ而シテ其ノ大
政ヲ親ラスルニ堪ヘサルニ至テ始メテ攝政ヲ置クノ事アルヘシ
若天皇一時ノ疾病違和又ハ國疆ノ外ニ在スノ故ヲ以テ皇太子皇
太孫ニ命シ代理監國セシムルカ如キハ大寶令以令代勅ノ制ニ依
リ別ニ攝政ヲ置カス歐洲各國亦此攝政ヲ置クハ已ムヲ得サルノ
必要ニ由ル故ニ天皇既ニ成年ニ達シ又ハ違豫常ニ復シタマフト
キハ攝政ヲ罷ムルコト別ニ明言ヲ待タスシテ知ルヘキナリ
次項皇族會議及樞密顧問ノ議ヲ經ルハ何ツ乎蓋事體時アリテ或
ハ疑似ニ涉ルコトアルヲ免レス故ニ典範ニ於テ其ノ議ヲ經ルコ
トヲ掲ケテ要件ト爲スナリ其ノ諮詢ト謂ハスシテ議ヲ經ト謂ヘ
ルハ何ツ乎天皇或ハ諮詢ノ命ヲ親ラスルコト能ハサルノ情況ニ

在ルモ皇族會議樞密顧問ハ皇室ノ大事ニ於テ推諉傍觀スヘキニ
非ス進テ其ノ誠ヲ致シ以テ宮禁ノ大計ヲ定ムヘキナリ其ノ或ハ
皇族會議ニ由テ發議シ樞密顧問ノ審議ニ付スルト或ハ樞密顧問
ノ發議ニ由リ皇族會議ノ協同ヲ求ムルト俱ニ時宜ニ從フナリ

第二十條 攝政ハ成年ニ達シタル皇太子又ハ皇太孫
之ニ任ス

第二十一條 皇太子皇太孫在ラサルカ又ハ未タ成年
ニ達セサルトキハ左ノ順序ニ依リ攝政ニ任ス

第一 親王及王

第二 皇后

第三 皇太后

第四 太皇太后

第五 内親王及女王

恭テ按スルニ推古天皇紀ニ立厩戸豐聰耳皇子爲皇太子、仍録攝政
 以萬機悉委焉、是ヲ皇太子攝政ノ例トス、仲哀天皇崩シ、應神天皇胎
 中ニ在リ、皇母神功皇后攝政ス、是ヲ皇后攝政ノ例トス、顯宗天皇紀
 ニ白髮天皇崩、皇太子億計王與天皇讓位、久而不處、由是天皇、姉飯豐
 青皇女臨朝秉政、是ヲ皇女攝政ノ例トス、上世攝政ニ當ル者ハ必皇
 族ニ限ル、中古以來始メテ大臣攝政ノ例アリ、而シテ要スルニ一時
 ノ便宜ニシテ以テ後世ノ模範ト爲スヘカラス、本條攝政ノ制ヲ定
 メ皇族ニ限り、人臣ニ及ホサ、ルハ蓋大政ノ繫ル所ヲ嚴ニシ、神器
 ノ重キヲ慎ムナリ
 第一條ニ皇位ヲ繼承スルハ男系ノ男子ニ限ルコトヲ掲ケタリ、而
 シテ本條皇后皇女ニ攝政ノ權ヲ付與スルハ蓋上古以來ノ慣例ニ

遵ヒ且攝政其ノ人ヲ得ルノ道ヲ廣クシ、人臣ニ下及スルノ漸ヲ杜
 カムトナリ
 第二十條ニ謂ヘル皇太子皇太孫ノ成年ハ第十三條ニ依ル、其ノ他
 親王以下普通ノ成年ニ達セサルハ仍攝政ニ任スヘカラサルコト
 知ルヘキナリ

第二十二條 皇族男子ノ攝政ニ任スルハ皇位繼承ノ
 順序ニ從フ其ノ女子ニ於ケルモ亦之ニ準ス

恭テ按スルニ上代皇太子攝政ノ任ニ當ルノ事アルハ是レ既ニ攝
 政ノ重任ト皇位繼承ノ順序トヲ以テ併セテ一條ノ軌轍ト爲スノ
 義例ヲ始ムル者ナリ、蓋各國古史ノ載スル所ニ參考スルニ攝政ハ
 長年德器ノ人ヲ擇テ之ニ任ス、而シテ繼承ノ變多クハ此ニ因テ起
 ル本條ニ攝政ノ任ヲ以テ專ラ皇位繼承ノ順序ニ從ハシムルハ宗

統ノ倫序ヲ以テ併セテ攝政ニ及ホシ危疑ノ門ヲ將來ニ絶ツ所以
ナリ故ニ第十九條ニ依リ攝政ヲ置クヲ要スルノ時アルニ際リテ
ハ皇位繼承ノ順次ニ當レル皇族ハ群臣ノ推奉アルヲ待タスシテ
進テ攝政ニ任スルノ權利及義務ヲ有スヘキコト皇太子ノ大位ヲ
繼クニ於ケルト異ナルコト無キナリ

皇族女子ハ皇位繼承ノ權ナシ第一條但シ攝政ニ任スルノ順序ハ皇
族男子ノ繼承ノ順序ニ比準シテ先後ヲ定ム

第二十三條 皇族女子ノ攝政ニ任スルハ其ノ配偶アラサル者ニ限ル

恭テ按スルニ上代既ニ嫁スルノ皇族女子攝政ニ任スルノ例アル
コトナシ蓋其ノ夫ニ從フノ義ト並行スヘカラサレハナリ而シテ
異姓ニ嫁スルノ王女ハ王族ニ非サルトキハ從テ又攝政ノ權アラ

サルヘキナリ

但シ其ノ皇族ニ嫁スルノ後夫ヲ喪ヒ寡居スル者及異姓ニ嫁スル
モ離婚シテ本族ニ復シ又ハ孀婦トナルノ後其ノ夫ノ家ヲ離レ本
族ニ復スル者ハ仍攝政タルノ權ヲ失ハサルヘシ故ニ本條ハ未ダ
嫁セサルノ皇女ト謂ハスシテ配偶アラサル者ト謂フ

第二十四條 最近親ノ皇族未タ成年ニ達セサルカ又ハ其ノ他ノ事故ニ由リ他ノ皇族攝政ニ任シタルトキハ後來最近親ノ皇族成年ニ達シ又ハ其ノ事故既ニ除クト雖皇太子及皇太孫ニ對スルノ外其ノ任ヲ讓ルコトナシ

恭テ按スルニ本條ハ明文ヲ以テ豫メ疑義ヲ判スルナリ皇太子皇
太孫ハ大統ノ宗系ニ居ル故ニ已ニ成年ニ達シ又ハ事故已ニ除ク

トキハ他ノ皇族及皇后以下攝政ニ當レル者總テ其ノ任ヲ讓ラサルコトヲ得ス但シ甲ノ皇族ト乙ノ皇族トノ間ニシテ單ニ親疎ノ別アル者ニ在テハ一タヒ攝政ニ當レルノ甲ハ更ニ其ノ任ヲ乙ニ讓ルコトヲ要セス又任意ニ之ヲ讓ルコトヲ得サル者トス

第二十五條 攝政又ハ攝政タルヘキ者精神若ハ身體ノ重患アリ又ハ重大ノ事故アルトキハ皇族會議及樞密顧問ノ議ヲ經テ其ノ順序ヲ換フルコトヲ得

恭テ按スルニ攝政又ハ攝政タルヘキ者重患又ハ重大事故アルニ因リ其ノ順序ヲ換フルノ必要ナル時機アルニ當テハ皇族會議及樞密顧問ハ和衷同心以テ其ノ誠ヲ致シ大計ヲ定メサルコトヲ得ス本條ニ重患ト謂テ不治ノ重患ト謂ハス第九條ト文ヲ異ニスルハ彼此ノ間ニ固ヨリ輕重ノ別アレハナリ

第六章 太傅

第二十六條 天皇未タ成年ニ達セサルトキハ太傅ヲ置キ保育ヲ掌ラシム

恭テ按スルニ太子傅ノ職ハ大寶ノ令ニ見ユ而シテ持統天皇紀ニ以直廣壹當麻國見爲東宮太傅ノ事ヲ載セタレハ蓋其ノ由テ來ルコト久キナリ本條天皇幼冲ノ爲ニ太傅ヲ置クコトヲ定ムルハ保傅ノ任其ノ重キコト攝政ニ亞ケハナリ大寶令ニ傳一人掌下而シテ以道德輔導東宮上太傅ハ專ラ保育教導ノ任ニ止マリ大政ニ干預スルコトナク攝政ハ大政ヲ攝行スルモ保導及天皇ノ私事ニ干涉セス

第二十七條 先帝遺命ヲ以テ太傅ヲ任セサリシトキハ攝政ヨリ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シ之ヲ選任

第二十八條 ス 太傅ハ攝政及其ノ子孫之ニ任スルコトヲ得ス

第二十九條 攝政ハ皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シタル後ニ非サレハ太傅ヲ退職セシムルコトヲ得ス

恭テ按スルニ攝政ハ大政ヲ總攝スルノミナラス兼テ又皇家ノ内事ヲ監督ス故ニ先帝ノ遺命アラサリシトキハ攝政ハ太傅ヲ選任スルノ事ヲ怠ラサルヘク而シテ攝政及其ノ子孫ハ太傅ニ任スルコトヲ得ス及太傅ノ任免ハ必皇族會議及樞密顧問ニ諮詢シ而シテ後決行スルコトヲ定ムルハ危疑ノ門ヲ慎ミ攝政ヲシテ其ノ忠順ヲ全クセシメムトナリ

第七章 皇族

第三十條 皇族ト稱フルハ太皇太后皇太后皇后皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃親王妃親王妃内親王王妃女王ヲ謂フ

恭テ按スルニ太皇太后皇太后ハ令義解ニ謂天子祖母登后位者爲太皇太后下謂天子母登后位者爲皇太后ト云ヘリ續日本紀ニ天平應真仁正皇太后聖武皇帝儲貳之日納以爲妃トアリ是レ古ハ皇太子ノ正配ヲ稱ヘテ妃ト謂ヒシナリ御息所ノ稱ハ延喜以後ノ物語ニ見ニ蓋俗稱ニシテ典例ニ非サルリ又日本書紀ニ大津皇子妃皇女山邊ノ文アリ持統是レ凡ソ皇子ノ正配亦妃ト稱ヘシナリ
皇族トハ凡ソ皇胤ノ男子及其ノ正配及皇胤ノ女子ヲ謂フ凡ソ皇族ノ男子ハ皆皇位繼承ノ權利ヲ有スル者ナリ故ニ中世以來空費

府庫ヲ以テ姓ヲ賜ヒ臣籍ニ列スルノ例ハ本條ノ取ラサル所ナリ
皇女ニシテ異姓ノ臣籍ニ嫁シタル者ハ其夫ノ身分ニ從フ故ニ本
條ニ内親王女王ト謂ヘルハ未タ嫁セサルノ女王ヲ指スコト知ル
ヘキナリ

太皇太后皇太后皇后ノ叙列ハ大寶令ニ依リ尊屬ノ序次ニ從フナ

第三十一條 皇子ヨリ皇玄孫ニ至ルマテハ男ヲ親王

女ヲ内親王トシ五世以下ハ男ヲ女王女ヲ女王トス

恭テ按スルニ子ノ子ヲ孫トシ孫ノ子ヲ曾孫トシ曾孫ノ子ヲ玄孫
トス和名抄ハ依ル子ヲ一世トシ孫ヲ二世トシ曾孫ヲ三世トシ玄孫ヲ四
世トシ玄孫ノ子ヲ五世トス大寶令ニ自親王五世ト謂ヘル是レナ
リ之ヲ上古ニ考フルニ皇子ハ「ミコト」稱ヘ皇女ハ「ヒメミコト」稱フ

親王内親王ノ稱ハ持統天皇紀六年正月朔賜親王内親王女王内命
婦等位ト見エタルヲ始トス大寶令ニ凡皇兄弟皇子皆爲親王ト此
ノ時未タ宣下ノ式アラス宣下ノ式ハ蓋淳仁天皇紀ニ兄弟姉妹悉
稱親王ト見エタルヲ始トス皇孫ニシテ親王内親王ノ宣下アリシ
ハ三條天皇ノ皇孫敦貞親王敦元親王儂子内親王嘉子内親王ヲ始
トス紹運錄ニ見エタル龜山天皇ノ皇子恒明親王共ノ子全仁親王
共ノ子滿仁親王共ノ子直仁親王共ノ子全明親王共ノ子恒直親王
相嗣テ常葉井宮ト稱ヘタルハ是レ世襲親王家ノ始ナリ蓋令ニハ
親王ノ稱ハ皇兄弟皇子ニ限リシヲ其ノ後宣下式ニ依リ歷世ノ皇
孫亦親王ノ稱ヲ賜ヒシナリ本條ニ皇玄孫以上ハ親王内親王トス
ルコトヲ定ムルハ現行ノ慣例ヲ斟酌シ且宣下ヲ待タスシテ皇親
ノ王男王女タルコトヲ示スナリ

大寶令五世以下ハ皇親ノ限ニ在ラス而シテ正親司ノ司ル所ハ四世以上ニ限ル然ルニ繼體天皇ノ皇位ヲ繼承シタマヘルハ實ニ應神天皇五世ノ孫ヲ以テス此レ乃中古ノ制ハ必シモ先王ノ遺範ニ非カリシナリ本條ニ五世以下王女王タルコトヲ定ムルハ宗室ノ子孫ハ五世ノ後ニ至ルモ亦皇族タルコトヲ失ハサラシメ以テ親々ノ義ヲ廣ムルナリ 文武天皇慶雲三年ノ詔ニ曰准令五世之王雖得親之籍遂入諸臣之列顧念親々之恩不勝絕籍之痛自今以後五世之王在皇親之限其承嫡者相承爲王自餘如令ト又聖武天皇天平元年ノ詔ニ曰五世王嫡子以上娶孫王生男女者入皇親之限自餘入庶雲三年格ト其ノ後桓武天皇延暦十年ニ至リ勅シテ令制ニ復シタリ

第三十二條 天皇支系ヨリ入テ大統ヲ承クルトキハ皇兄弟姊妹ノ王女王タル者ニ特ニ親王内親王ノ號ヲ宣賜ス

恭テ按スルニ大寶令ニ凡皇兄弟皇子皆爲親王トアリ是レ皇兄弟ハ皇子ト同ク親王ト稱フヘキコト既ニ成典アルナリ天皇支系ヨリ入テ大統ヲ承クレハ皇兄弟姊妹ハ皆親王内親王ノ尊號ヲ得ルハ光仁天皇大統ヲ繼キ皇弟湯原王榎井王ヲ陞セテ親王ト爲シタマヘルヲ以テ始例トス前條ノ注ニ引ク所淳仁天皇兄弟姊妹ノ例亦同シ本條ニ仍宣下ノ例ヲ用非ルハ前條ト其ノ義ヲ異ニスレハナリ

第三十三條 皇族ノ誕生命名婚嫁薨去ハ宮内大臣之ヲ公告ス

恭テ按スルニ皇太子皇太孫ノ立坊ハ詔書ヲ以テ公布スルノ外凡ソ皇族ノ生死婚及命名ハ宮内大臣ヨリ公告ス蓋皇族ハ皇統ノ係ル所ニシテ臣民仰望ノ集マル所タリ故ニ之ヲ臣民ニ公ニシ皆聞

知ラシムルナリ

第三十四條 皇統譜及前條ニ關ル記錄ハ圖書寮ニ於テ尙藏ス

恭テ按スルニ圖書寮尙藏スル所ノ皇統譜及皇族記錄ハ大統ノ源流ヲ微明シ宗室ノ本末ヲ疏證ス本條特ニ之ヲ掲ケテ皇室圖書ノ登錄ハ嫌疑ヲ定メ亂萌ヲ絶ツノ典籍タルコトヲ明ニス

第三十五條 皇族ハ天皇之ヲ監督ス

恭テ按スルニ天皇ハ皇室ノ家父タリ故ニ皇族ノ虞俸ハ皇室經費ヨリ給賜シ皇族各人ノ結婚又ハ外國ニ旅行スルハ勅許ヲ要シ父ナキノ幼男幼女ノ教育及保護ハ勅命ニ由ル凡ツ皇族ハ總テ天皇監督ノ下ニ在ルコト家人ノ家父ニ於ケルカ如シ此レ乃皇族ノ幸福及榮譽ヲ保ツ所以ナリ

第三十六條 攝政在任ノ時ハ前條ノ事ヲ攝行ス

恭テ按スルニ攝政ハ大政ヲ攝行スルノミナラス兼テ又皇室家父タルノ事ヲ攝行ス故ニ皇族各人ハ攝政ニ對シ家人從順ノ義務ヲ有スヘシ

第三十七條 皇族男女幼年ニシテ父ナキ者ハ宮内ノ官僚ニ命シ保育ヲ掌ラシム事宜ニ依リ天皇ハ其ノ父母ノ選舉セル後見人ヲ認可シ又ハ之ヲ勅選スヘシ

第三十八條 皇族ノ後見人ハ成年以上ノ皇族ニ限ル

恭テ按スルニ天皇ハ皇族ヲ監督ス故ニ皇族幼年ニシテ父ナキトキハ勅旨ニ由リ宮内ノ官僚ニ命シテ保育ヲ掌ラシムヘシ或ハ其ノ父ノ遺囑ニ由リ後見人ヲ選舉シ又ハ其ノ母後見人ヲ選舉シタ

ルトキハ天皇之ヲ認可シ或ハ特ニ後見人ヲ勅選シテ保育ニ當ラシムルコトアルハ皆事宜ニ從フ而シテ後見人ノ行フ所ノ事ハ仍天皇親ヲ之ヲ監督スヘシ

第三十九條 皇族ノ婚嫁ハ同族又ハ勅旨ニ由リ特ニ認許セラレタル華族ニ限ル

恭テ按スルニ皇族ノ婚嫁ト謂ヘルハ皇后ヲ擇フコト固ヨリ其中ニ在リ上代皇后ハ皇親ニ擇フ共ノ人臣ノ家ニ取レルハ聖武天皇藤原不比等ノ女安宿媛ヲ立テ、皇后ト爲シタマヘルニ始マル仁徳天皇ノ懿之媛ニ於ケルハ聖武天皇ノ詔ノ先例トシテ引繼シタル所ナレトモ其ノ實仍皇族ニ係ル 中古以來皇親ノ外ハ藤原氏橘氏平氏源氏ノ四姓ヨリ皇后ヲ奉ルコト、ハナレリ其ノ他ノ皇族ハ大寶令ニ凡王娶親王、臣娶五世王者聽唯五世王不得娶親王ト此レ共ノ婚娶ニ於テ尤名位ヲ重シタルナリ本條

ハ祖宗ノ古法ヲ存重シ又華族ノ家ニ婚嫁スルコトヲ許スハ兼テ中世以來ノ慣例ヲ斟酌シ貞淑ヲ擇フノ道ヲ廣ムルナリ而シテ又特ニ認許ヲ得タルノ家ニ限ルハ名門右族ヲ擇ハムトナリ

第四十條 皇族ノ婚嫁ハ勅許ニ由ル

恭テ按スルニ皇族ノ婚嫁必勅許ニ由ルハ至尊監督ノ大權ニ依リ皇族ノ榮譽ヲ保タシムトナリ

第四十一條 皇族ノ婚嫁ヲ許可スルノ勅書ハ宮内大臣之ニ副署ス

恭テ按スルニ皇族ノ婚嫁本法ニ違ヒ勅許ヲ得サル者ハ其ノ婚嫁ヲ認メス共ノ婦ハ皇族タルノ禮遇及名稱ヲ得サルヘシ故ニ勅許ヲ付スルニ當テ亦特ニ慎重ノ意ヲ致ス

第四十二條 皇族ハ養子ヲ爲スコトヲ得ス

恭テ按スルニ皇家養子猶子ノ習アルハ蓋嵯峨天皇ノ皇子源定ヲ
 淳和天皇ノ子トシ時ノ人定ニ母アリト云ヘリ父源融ヲ仁明天皇ノ子トセラレ
 タルニ始マル而シテ未タ養子猶子ノ稱ヘハアラス皇族ノ支孫ニ
 シテ天皇ノ養子トナレルハ融ノ孫是茂ヲ光孝天皇ノ養子トセラ
 レタルニ始マル猶子ノ稱ハ神皇正統紀ニ龜山院天皇姪仁ヲ猶
 子ニシテ東宮ニスエタマフトアリ及職原鈔ニ忠房親王爲後宇多
 院御猶子トアルヲ始トス猶子トハ蓋皇子ニ準スルノ義ナリ大史
清仁親王與弟昭登等並帝(花山帝)薨後所生也帝最愛清仁託左
大臣道長請以皇子準冷泉上皇諸子收以清仁爲第五子昭登第六子
並爲凡此レ皆中世以來ノ沿習ニシテ古ノ典例ニ非サルナリ本條
親王ハ獨異姓ニ於ケルノミナラス皇族互ニ男女ノ養子ヲ爲スコトヲ
 禁スルハ宗系紊亂ノ門ヲ塞クナリ其ノ皇猶子ノ事ニ及ハサルハ
 皇養子ト同例ナレハナリ

第四十三條 皇族國疆ノ外ニ旅行セムトスルトキハ
 勅許ヲ請フヘシ

恭テ按スルニ此レ皇族天皇ノ監督ニ屬スル要件ノ一ニ居ル者ナ
 リ疆外ニ旅行スル者勅許ヲ要スルトキハ外國政府ノ文武ノ官ニ
 補スル者ハ謂ハスシテ知ルヘキナリ

第四十四條 皇族女子ノ臣籍ニ嫁シタル者ハ皇族ノ
 列ニ在ラス但シ特旨ニ依リ仍内親王女王ノ稱ヲ有
 セシムルコトアルヘシ

恭テ按スルニ女子ノ嫁スル者ハ各其ノ夫ノ身分ニ從フ故ニ皇族
 女子ノ臣籍ニ嫁シタル者ハ皇族ノ列ニ在ラス此ニ臣籍ト謂ヘル
 ハ專ラ異姓ノ臣籍ヲ謂ヘルナリ仍内親王又ハ女王ノ尊稱ヲ有セ
 シムルコトアルハ近時ノ前例ニ依ルナリ然ルニ亦必特旨アルヲ

須ツハ共ノ特ニ賜ヘルノ尊稱ニシテ共ノ身分ニ依ルニ非サレハナリ

第八章 世傳御料

第四十五條 土地物件ノ世傳御料ト定メタルモノハ分割讓與スルコトヲ得ス

恭テ按スルニ世傳御料ハ皇室ニ係屬ス天皇ハ之ヲ後嗣ニ傳ヘ皇統ノ遺物トシ隨意ニ分割シ又ハ讓與セラル、コトヲ得ス故ニ後嵯峨天皇後深草天皇ヲシテ龜山天皇ニ位ヲ傳ヘシメ遺命ヲ以テ長講堂領二百八十所ヲ後深草天皇ノ子孫ニ讓與アリタルカ如キハ一時ノ變例ニシテ將來ニ依ルヘキノ典憲ニ非サルナリ
上代ニ屯家ヲ置カル又ハ御田ト呼フ御田ノ穀ヲ收ムルノ處ヲ屯

倉ト謂フ垂仁天皇紀ニ屯倉此云彌夜氣ト註セル是レナリ仁徳天皇紀ニ倭屯田者每御宇帝皇之屯田也其雖帝皇之子、非御宇者不得掌矣トアリ是レ上古既ニ世傳御料ノ制アリテ繼體ノ天皇之ヲ掌有シタマヒシナリ共ノ他ノ屯田ハ賜予又ハ遺命ヲ以テ分割讓與セラル、コト總テ勅旨ニ隨フ者アリ即チ天皇ノ私法上ノ財産トシテ皇室ニ係屬セサル者ナリ安閑天皇紀ニ爲皇后次妃建立屯倉之地使留後代令顯前述トアルカ如キ是レ世傳御料ト共ノ類ヲ異ニスルコト知ルヘキナリ
我カ肇國ノ初夙ニ一國統治ノ公義ニ依リ豪族ノ徒ヲ斥ケテ其ノ私ニ邦土ヲ領有スルヲ許サス古事記建御世神大國主命ニ聞ヘララサム國ナリ云々知而シテ皇室ノ經費ハ全國ノ租稅ヲ以テ之ヲ供奉シ更ニ内庫ノ私産ヲ用非テ供給スルヲ假ラサリシハ全ク立

憲ノ主義ニ符合スル者ニシテ善美ナル國體ノ基礎ナリト謂フヘシ故ニ本條ハ上代ノ所謂屯家御田ノ類專ラ一部ノ御料ニ屬スル者ヲ指ス而シテ皇室經費ハ別ニ憲法ヲ以テ之ヲ定メタリ

第四十六條 世傳御料ニ編入スル土地物件ハ樞密顧問ニ諮詢シ勅書ヲ以テ之ヲ定メ宮内大臣之ヲ公告ス

恭テ按スルニ土地物件ノ世傳御料ニ編入スル者ハ普通民法ノ外ニ於テ處分セラルヘキ者ナリ故ニ樞密顧問ノ議ヲ詢フノ後勅書ヲ以テ之ヲ定ムルハ其ノ慎重ヲ致スナリ又宮内大臣ヨリ公告スルハ臣民ヲシテ普ク之ヲ聞知ラシムルナリ
皇室常産ハ皇室ノ圖書ニ登錄シ其ノ土地ハ地籍ニ明記スルヲ要ス叙旨ヲ以テ一タヒ皇室常産ニ編入セラレタル者ハ更ニ分離シ

テ私産トナサル、コトヲ得ス

第九章 皇室經費

第四十七條 皇室諸般ノ經費ハ特ニ常額ヲ定メ國庫ヨリ支出セシム

恭テ按スルニ皇室ノ經費ハ特ニ常額ヲ定メ國庫至重ノ義務トシテ毎年支出セシム蓋天皇ハ一國ノ元首トシテ臣民ヲ統治シ從テ臣民ノ正供ニ由リ其ノ需要ニ奉スルハ當然ノ權利タリ故ニ議會ハ皇室經費既定ノ歲額ヲ議シ及之ヲ検査スルノ權アルコトナシ但シ新ニ増額ヲ要スルニ當テハ更ニ議會ノ協賛ヲ經ルヲ要ス故ニ常額ト謂フナリ

皇族ノ歳費ハ皇室經費ヨリ支辨シ別ニ國庫豫算ノ科目ヲ設ケス